

宗教法人制度の改正について（報告）

（平成七年九月二十九日文部大臣あて宗教法人審議会報告）

本審議会は去る四月二十五日に文部大臣から宗教法人制度についての検討を要請され、審議検討を行うこととなった。

本審議会では、これまで審議会を五回、特別委員会を八回開催し、精力的にかつ慎重に審議を重ねてきた。その審議の過程では、都道府県の事務担当者、学識経験者、日本宗教連盟に加盟していない宗教法人から意見聴取も行った。

もとより、本審議会は憲法が保障する信教の自由と政教分離の原則を最大限尊重する立場から審議検討を行ってきたことは言うまでもない。

本審議会は、以上のような審議検討の結果、大方の意見は別紙のようであったので、本日ここに報告する。

本審議会は、本報告により、宗教法人制度が現在の社会状況に適合し、より一層適正に運用できるものになることを期待して止まない。

また、政府において現行法の改正の検討を行う場合、それが宗教団体に及ぼす影響を考慮し、慎重な配慮が行われることを期待する。

なお、残された課題については、今後更に検討することとしているところである。

1 宗教法人制度の見直しについての基本的な考え方

(1) 宗教法人法の目的は、宗教団体に法人格を与え、宗教法人が自由でかつ自主的な活動をするための物的基礎を確保することにある。このため、現行宗教法人法は、信教の自由と政教分離の原則を基本とし、宗教法人の責任を明確にするとともに、その公共性に配慮するという趣旨から全体系が組み立てられている。

このような現行宗教法人制度の基本は、維持すべきである。

(2) 認証時の審査を厳正に行うなど、現行宗教法人法の運用で対処できる点はその適切な運用に努めることとすべきである。

(3) 現行宗教法人法が制定された昭和二十六年以来、それぞれの宗教法人は自主的に適正な管理運用のための努力を重ねてきたところである。しかし、今日に至るまで、経済の発展とともに、都市化・情報化の進展、家族と地域の変化、交通手段の発達など大きな社会の変化が生じている。また、広域的活動を展開する宗教法人の増加、収益事業を行う宗教法人の増加など宗教法人の活動も多様化、複雑化している。このような状況の中にあつて、宗教法人の自治能力の向上を図り、その責任と公共性に応えるため、より適切な宗教法人制度の在り方が求められている。

(4) このため、自由と自主性、責任と公共性の二つの要請を基本としつつ、宗教法人の管理運営面等について、宗教法人法の最小限度の改正を行う必要があるとの意見が多数であつた。

2 宗教法人の所轄の在り方

(1) 二以上の都道府県で宗教活動を行う宗教法人の所轄庁は、文部大臣に改めることとするのが適当であると考えられる。

(2) 理由

① 現在、都道府県知事が所轄庁となっている、二以上の都道府県で活動を行う宗教法人については、所轄庁以外の都道府県で問題が生じた場合の対応など、一都道府県知事が所轄するには無理があり、所轄庁が宗教法人法上期待されている責任を適切に果たすことができるようにするという観点及び国と都道府県との適切な役割分担という観点からも、文部大臣が所轄庁となるのが適当であると考えられる。

② 民法法人など、他の公益法人では、その事業が二以上の都道府県にわたる場合は、主務大臣が所管することとなっており、その事業が一都道府県内に限って行われる場合は、都道府県知事等が所管することとなっている。現行宗教法人法は、宗教法人に関する事務は本来国が行うとの考えに立ってその事務の一部を機関委任事務として委任しているものであり、二以上の都道府県で活動を行う宗教法人の事務は、国で行うのが適当であると考えられる。

③ 所轄庁を区分する基準を「宗教活動」の地域的範囲の広狭に着目して定めることは、理由が明白でありわかりやすい。

(3) 一定の宗教法人について所轄庁を都道府県知事から文部大臣に改めることとしても、宗教法人法における所轄庁の宗教法人に

対する権限の内容には全く変わりはないことから、信教の自由及び政教分離の原則に照らして問題が生じるおそれはないと考えられる。

(4) 所轄庁を決定する基準としては、

① 外形的にはつきりととらえられるものであること

② 宗教活動の内容にわたらないものであること

③ 現行法令に規定されている概念によること

などを勘案すると、法三条に規定する「境内建物」を基準とすることが適当である。

この場合、二以上の都道府県に境内建物を備える宗教法人については、包括宗教法人、被包括宗教法人、単立宗教法人を問わず文部大臣が所轄庁となる。

(5) 現行制度では、宗教法人設立後は、所轄庁において境内建物の所在を確認する手段が担保されていないことから、所轄庁において境内建物の現状を把握する制度を設ける必要がある。

なお、宗教団体の活動の範囲により所轄庁を決定することとしても、境内建物は宗教法人の活動を外形的、客観的にとらえるものであり、宗教活動に干渉する余地は全くないことから、信教の自由及び政教分離の原則に照らして問題が生じることはないと考えられる。

(6) 所轄庁の変更については、円滑な移行のための手続き、期間等に配慮する必要がある、また、法人に対し適切な対応を行うため、国等の事務体制の充実を図る必要がある。

3 情報開示の在り方

(1) 信者その他の利害関係人は、正当な利益のある場合、宗教法人法第二十五条で備え付けることとされている書類、帳簿について、宗教法人に対して閲覧を求めることができることとするのが適当であると考えられる。

(2) 理由

① 宗教法人の宗教活動の自治に対しては、その在り方に介入すべきでないのは当然であるが、法律が関与する法人の財務会計等の管理運営の側面については、より民主的運営や透明性を高めるべきであるという社会一般の論理を取り入れるべきであり、正当な利益があると認められる信者その他の利害関係人に、閲覧の請求を認めることにより、宗教法人の公共性に対応した公正な運営をより一層確保することが必要である。

② 財務会計等の管理運営に関して社会一般の論理を取り入れることによって、宗教法人の自治能力の向上が図られ、ひいては宗教活動に関する自治が一層守られることになると考えられる。

③ 法二十五条の書類は、宗教法人の財務会計等の管理運営に関する事項を客観的に記載したものであり、個々具体的な宗教活動の内容を示すものでないから、閲覧請求を認めることとしても、宗教法人の宗教活動が阻害されたり、その自治が侵害されることはないと考えられる。

(3) 信者その他の利害関係人は、宗教法人法で既に宗教法人に関する一定の事項について公告を受け、又は意見を述べることができ

4 設立後の活動状況の把握の在り方

1 所轄庁に対する書類の提出

- (1) 財務関係を中心に、宗教法人法第二十五条で作成、備付けの義務がある書類のうち一定のものを、定期的に所轄庁へ提出する制度を設けることが適当であると考えられる。

(2) 理由

- ① 所轄庁が宗教法人の客観的な活動状況を定期的に把握することにより、宗教法人が宗教団体としての要件を備えていることの確認等、所轄庁が現行法上期待されている責任を適切に果たすことができ、宗教法人制度の適正な運用を図ることができると考えられる。

- ② 作成、備付けを義務付けられている書類のうち一定のものについて、所轄庁へ提出を求めることによって、宗教法人側の適正、適切な事務処理についての自覚を促し、宗教法人法の基本である宗教法人の自治能力と管理運営の透明性の向上に資することになると考えられる。

- (3) 所轄庁において、前記の目的により、法二十五条により備付け義務が課されている書類のうち必要最小限のものについて提出を受けることとしても、これらの書類は、宗教法人の財務会計等の管理運営に関する客観的な事項を記載したものであり、信教の自由を侵害するおそれにつながるものではないと考えられる。

- (4) 法二十五条の書類の提出であれば、宗教法人法においてその

るとされている。閲覧を請求できる者についても、宗教法人に何らの関係を有しない者まで含めるのは適当ではなく、信者その他の利害関係人であって、閲覧することについて正当な利益があると認められる者とするのが適当であると考えられる。

ただし、不当な目的をもって閲覧を請求するような場合は、閲覧を拒めることとすべきである。

- (4) 法二十五条中、現在作成が任意である収支計算書は、法人としての活動状況を示す最低限の書類であると考えられ、財産目録と同様に作成、備付けを義務付けることが適当であると考えられる。

しかし、収入規模が一定額以下の宗教法人においては、その実態に鑑み、直ちに収支計算書の作成を義務付けることは困難であることから、これらの宗教法人で収益事業を行っていない宗教法人については、当分の間、免除措置を設けることが適当である。

なお、この規模の基準については、文部大臣が宗教法人審議会の意見を聞いて定めることとするのが適当であると考えられる。

また、貸借対照表については、法人の活動状況を示す書類として、作成されることが望ましいが、収入規模が一定額以下の宗教法人の負担軽減を図るため、その作成を義務付けることはせず、現行通り作成を任意としておくことが適当である。

- (5) なお、宗教法人による財務会計書類の作成を容易にするため、宗教法人の抛るべき会計の基準を設けることを検討していくことが望まれる。

作成、備付けが義務付けられる書類であり、法人側の事務負担も少なく済むと考えられる。

(5) 提出を求める書類は、所轄庁が宗教法人の活動状況を法人の財務会計等の管理運営の側面から把握するために必要となる最小限のものに限定するという観点から、法二十五条の書類のうち次のものに限ることが適当である。

① 役員名簿

② 財産目録

③ 収支計算書（収益事業を行っていない収入規模が一定額以下の宗教法人については、当分の間、提出を免除する）

④ 貸借対照表（作成している場合に限る）

⑤ 境内建物に関する書類（財産目録に記載されている場合は不要）

⑥ 法六条の事業（公益事業、収益事業等）に関する書類（これらの事業を行っている場合に限る）

(6) 提出時期については、毎年、会計年度終了後四ヶ月以内とすることが適当であると考えられる。

2

収益事業の停止命令、認証の取消し、解散命令の請求のための報告徴収及び質問

(1) 宗教法人法七十九条は所轄庁による収益事業の停止命令について、八十条は所轄庁による認証の取消しについて、八十一条は所轄庁等による解散命令の請求について規定しているが、これらの規定の事由に該当する疑いがある場合に、その事由の存否を確認する手段として、所轄庁に、宗教法人審議会の意見

を聞いた上で、宗教法人に対し報告を求め、質問する権限を付与することが適当であると考えられる。

(2) 理由

① 宗教法人法七十九条、八十条、八十一条は、宗教法人が宗教団体の実体を欠いている場合又はその運営に著しい問題がある場合に、これに対処するための一定の権限を所轄庁に与えている。

宗教法人法の適正な運用を確保するためには、所轄庁がこのような権限を適切かつ慎重に行使することが必要であるが、現行法上はこれらの規定の事由に該当する疑いがある場合であっても、所轄庁においてそれを確認する法的手段が規定されていない。

このため、所轄庁が現行法上期待されている役割と責任を適切に果たすことが難しくなっている。

② 宗教法人をめぐる環境が複雑化し、宗教法人の活動も極めて多様化、複雑化している今日においては、問題のある宗教法人について一定の事実を確認するためには、このような法的手段がなければ不十分であると考えられる。

(3) 所轄庁がこのような報告を求め、質問を行う場合は、宗教法人法七十九条、八十条、八十一条に定める事由が存在する疑いがあるという極めて限られた場合であり、報告を求め、質問を行う対象となる事項も、それらの事由の存否の確認のために必要なものに限られなければならない。

また、所轄庁が報告を求め、質問を行う場合には、宗教法人

の宗教活動に干渉するようなことがあってはならない。

このため、所轄庁がそのような報告を求め、質問を行う場合には、事前に宗教法人審議会に対し、その事項や理由を示してその意見を聞かなければならないこととして、所轄庁による権限行使について慎重を期することとすることが必要であると考えられる。

なお、この報告を求め、質問することには、いわゆる立入検査を含むものではない。

(4) このように極めて限定して報告を求め、質問を行う権限を所轄庁に付与することは、所轄庁が現行法上期待されている役割と責任を果たすために必要最小限の法的手段であり、宗教の自由及び政教分離の原則を侵害することにはならないと考えられる。

5 その他

1 宗教法人審議会の委員の増員

今日、宗教法人をめぐる情勢は多様化、複雑化してきており、宗務行政のより適正な執行を図る必要があることに加え、宗教法人制度の在り方に関する検討が求められていることから、宗教法人審議会の役割はますます重要になってきている。このような事態に適切に対処するため、宗教法人審議会については学識経験者等の委員を増員し、総数の上限を二十人程度とする必要性があると考えられる。

2 その他

宗教法人制度改正の問題ではないが、現在国民の宗教に関する関心は極めて高く、宗教に関する情報提供や苦情相談などを行う組織（仮称「宗教情報センター」など）の設置を求める声が強いことから、そのような組織を、宗教関係者をはじめ、弁護士、宗教者、心理学者、学識経験者など関係者が連携協力して、自主的に設置運営することについて、検討すべきであると考ええる。

Sogenannte Sekten und Psychogruppen

**DIE
M U N - BEWEGUNG**

Herausgegeben im Auftrag des Bundesministeriums für Familie,
Senioren, Frauen und Jugend vom Bundesverwaltungsamt, 50728 Köln

Sogenannte Sekten und Psychogruppen

**DIE
M U N - BEWEGUNG**

Herausgegeben im Auftrag des Bundesministeriums für Familie,
Senioren, Frauen und Jugend vom Bundesverwaltungsamt, 50728 Köln

Impressum

Herausgeber: Bundesverwaltungsamt, 50728 Köln

Gesamtherstellung: Gehringer GmbH, 67613 Kaiserslautern

Diese Broschüre ist Teil der Öffentlichkeitsarbeit der Bundesregierung; sie wird kostenlos abgegeben und ist nicht zum Verkauf bestimmt.

Vorwort:

In einer gezielten Informations- und Aufklärungsarbeit über das Problemfeld sogenannten Sekten und Psychogruppen sieht die Bundesregierung ein wichtiges Instrument zum Schutz der Bürgerinnen und Bürger vor Gruppierungen, deren Strukturen, Organisation, Praktiken und Ziele potentielle Gefährdungen für den einzelnen und für die Gesellschaft enthalten können.



Mit der vorliegenden Broschüre wird über die Mun-Bewegung informiert, die seit langem in Deutschland ihre Aktivitäten entfaltet. Der Beitritt zur Mun-Bewegung ist für junge Menschen und deren Angehörige oft mit einem radikalen Bruch zu ihrer bisherigen Lebensform verbunden. Häufig werden Ausbildung, Freundeskreis und Familie aufgegeben, um sich ganz dieser Gruppierung zu widmen.

Wie ehemalige Mitglieder berichtet haben, sind damit schwerwiegende Eingriffe in die Gesamtsozialisation verbunden, die zu großen Problemen für den einzelnen und für Familien, die einen Angehörigen an die Mun-Bewegung verloren haben, führen.

Die vorliegende Broschüre soll daher eine Orientierungshilfe und in der Auseinandersetzung mit dem Problemfeld der sogenannten Sekten und Psychogruppen eine sachliche Information und Aufklärung sein.

Bonn, im Dezember 1996

Mitglied des Deutschen Bundestages
Bundesministerin für Familie, Senioren,
Frauen und Jugend

Inhaltsverzeichnis

Vorwort	3
I. Geschichte der Munbewegung und ihres Gründers	5
1. Werdegang Muns, Entstehung und Entwicklung seiner Bewegung	5
2. Die Vereinigungsbewegung in Deutschland	11
II. Die Lehre und das Führungssystem der Munbewegung	13
1. Die religiöse Zielsetzung der Lehre Muns	13
2. Die autoritäre Führergestalt Muns und die Hierarchie in der Munbewegung	16
3. Das Elitebewußtsein der Gruppe	17
a) Die stark vereinfachte Weltsicht	17
b) Die Überwindung der satanischen Umwelt	18
c) Die Gruppensprache und die Rituale	21
4. Ehe und Familie	26
5. Die Bindung an die Gruppe	29
a) Die Methoden der Anwerbung	30
b) Die Integration und die Unterwerfung	32
c) Die Lösung von der Gruppe	33
III. Der universale Machtanspruch der Munbewegung	34
1. Die wirtschaftlichen Unternehmungen	36
2. Die kulturellen Unternehmungen	39
3. Die militärischen Ambitionen	40
4. Die politischen Bestrebungen	40
IV. Organisationen und Unterorganisationen der Vereinigungsbewegung	43
V. Verzeichnis der Fußnoten	44
VI. Literaturverzeichnis	51
VII. Ansprechstellen - Hilfe für Betroffene	55

I. Geschichte der Munbewegung und ihres Gründers

1) Werdegang Muns, Entstehung und Entwicklung seiner Bewegung

Die „Mun- oder Vereinigungsbewegung“ ist die Sammelbezeichnung für die 1954 von dem Koreaner San Myung Mun (engl. Schreibweise: Sun Myung Moon) gegründete Bewegung mit ihren zahlreichen Unterorganisationen, von denen die bekanntesten in Deutschland sind die „Vereinigungskirche e.V.“ (kirchlicher Bereich der Organisation), die Hochschul- und Studentenorganisation „CARP“ (Collegiate Association for the Research of Principles) und die politische Organisation „CAUSA“ (frühere Bezeichnung: Combattants Against Universal Soviet Aggression; die heutige offizielle Bezeichnung lautet: Confederation of Associations for the Unity of the Societies of the Americas) mit dem „Forum für geistige Führung“. (1)

San Myung Mun wurde am 25.02.1920 (nach dem Mondkalender am 06.01.1920) als Sohn einer Bauernfamilie in der stark christianisierten Provinz Pyon Puhto in Nordkorea geboren. (2) Seine Eltern traten erst 1930 zum Christentum über. Nach der legendenhaft erscheinenden Lebensbeschreibung der Vereinigungsbewegung war der junge Mun ein religiös Suchender, für den der Übertritt der Eltern zum presbyterianischen Christentum nicht die abschließende Klärung der eigenen religiösen Fragen bedeutete. (3)

Sein Leben als „normaler“ Mensch soll Mun dann durch die sogenannte „Ostervision“ des Jahres 1936 beendet haben. Mun will am Ostermorgen auf einem koreanischen Berg, tief ins Gebet versunken, eine Erscheinung gehabt haben. Jesus habe ihn dabei beauftragt, seine vor 2.000 Jahren gescheiterte Mission zu beenden und das Himmelreich auf Erden einzurichten. Nach längerem Sträuben habe er die Aufgabe akzeptiert. (4)

Der Inhalt der ihm erteilten Aufgabe soll Mun erst in den auf die Ostervision folgenden Jahren klar geworden sein. Nach neunjährigem

ununterbrochenem Suchen und Ringen, in denen Mun sich in einen Dialog mit der Geisterwelt begeben haben soll, will er die Wahrheit Gottes in seinen Händen gehalten haben. (5)

Während dieser Zeit beendete er seine Gymnasialausbildung, nahm Kontakt zu verschiedenen religiösen Strömungen auf, studierte einige Semester Elektrotechnik in Japan und wirkte einige Zeit im japanischen Untergrund. Er kehrte ohne Universitätsabschluß nach Korea zurück. (6)

Etwa ein Jahr nach der Befreiung Koreas durch die Alliierten begann der 26 jährige in Pyöngyang, der Hauptstadt des von der damaligen Sowjetunion besetzten Nordkoreas, eine neue Lehre zu verbreiten. Er gewann die ersten Anhänger und heiratete zum ersten Mal. (7)

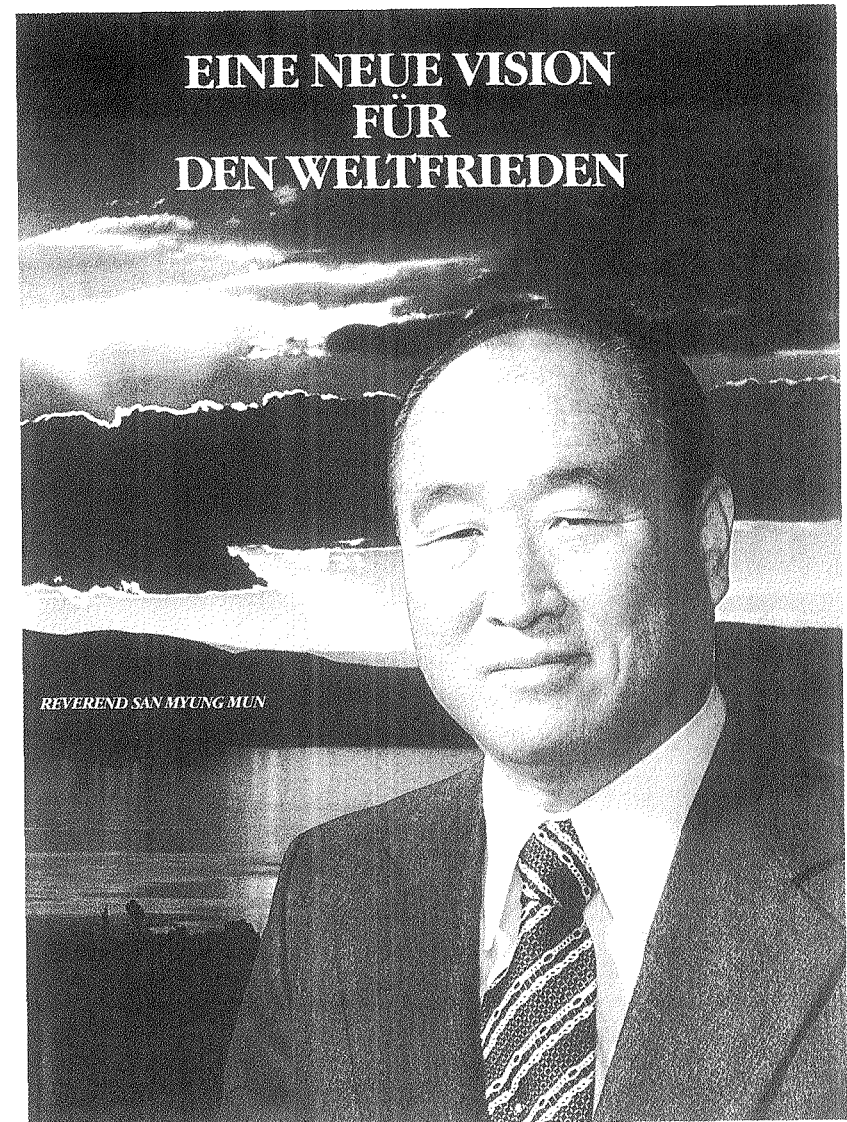
Im Jahr 1946 schloß sich Mun eine Zeitlang dem messianischen „Israel-Orden“ (Israel-Soo-Do-Won) an, dessen Ordensmeister sich selbst für den Messias hielt. (8)

Am 11.08.1947 wurde Mun angeblich wegen seiner Missionstätigkeit festgenommen und nach einer erneuten Verhaftung im Jahr 1948 zu fünf Jahren Arbeitslager verurteilt. Der Grund der Verurteilung ist umstritten. Teilweise wird behauptet, Mun sei wegen Bigamie angeklagt und verurteilt worden. Er habe eine blutjunge Anhängerin geheiratet, obwohl er noch verheiratet gewesen sei. (9) Nach anderen Quellen soll der Vorwurf der Bigamie später fallengelassen worden sein. Die Verurteilung sei lediglich wegen Unruhestiftung erfolgt. (10)

Unbestritten ist, daß Mun 1948 von den presbyterianischen Kirchen Koreas wegen sektiererischer Umtriebe ausgeschlossen wurde. (11)

Im Herbst 1950 wurde Mun von den Streitkräften der Vereinten Nationen während des Koreakrieges aus dem Arbeitslager Hung Nam befreit. (12) Er begab sich in die Hafenstadt Pusan in Südkorea, wo er seine Missionstätigkeit wieder aufnahm. (13) Dort traf Mun auch auf Hyo Won Yon (späterer Präsident der Vereinigungskirche Koreas), der als Verfasser zumindest eines Teils der „Göttlichen Prinzipien“, der Zusammenfassung der Lehre Muns, gilt. (14)

Im Mai 1954 gründete Mun die „Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity“ (Unification Church) und verlegte das Zentrum der Bewegung nach Seoul.



Quelle: s. o. Die Gemeinschaft vom Heiligen Geist für die Vereinigung der Weltchristenheit, 1988

1955 wurde Mun in Südkorea erneut verhaftet und wegen Freiheitsberaubung und sexueller Nötigung angeklagt. (15) Im Hintergrund der Verhaftung stand die Anwerbung der Religionsdozentin Young Oon Kim und einiger Studentinnen der renommierten Ehwa-Frauenuniversität sowie die Auseinandersetzung mit den etablierten Kirchen Koreas. Als Folge des Verfahrens mußten die Anhänger Muns die Universität verlassen, während das Verfahren gegen ihn selbst nach kurzer Zeit eingestellt wurde. (16) Nach dieser Affäre ließ sich Muns erste Frau scheiden. Er heiratete daraufhin erneut. (17)

1959 begann Mun sich wirtschaftlich zu betätigen. Er gründete die erste seiner zahlreichen Firmen, die heutige Tong Il Company in Seoul. Sie produzierte damals Luftgewehre, heute auch Mörser und schwere Geschütze. (18)

Nach einer weiteren Scheidung heiratete Mun im Jahr 1960 seine jetzige Frau Hak-Ja Han. Diese Hochzeit („Hochzeit des Lammes“) hat für Mun und seine Anhänger eine besondere und grundlegende Bedeutung. Damit soll ein neues Zeitalter der Menschheit angebrochen sein.

Anfang der 60er Jahre begann die Auslandsmission der Bewegung, zunächst mit der Entsendung von Missionaren nach Japan und dann in die USA. (19)

1965 unternahm Mun seine erste Weltreise durch 40 Länder, u.a. auch in die Vereinigten Staaten und die Bundesrepublik Deutschland. Während dieser Reise segnete Mun 120 Grundstücke als „Heiligen Grund der Vereinigungsbewegung“. Höhepunkt der Reise war ein kurzer Empfang durch den ehemaligen Präsidenten Eisenhower, der von der koreanischen Botschaft vermittelt wurde. (20)

1971 verlegte Mun seinen Wohnsitz in die USA und begann mit der planmäßigen weltweiten Verbreitung seiner Lehre. Er startete 1972 mit einer „Day-of-Hope-Tour“ durch sieben Städte. 1973 folgte eine 21-Städte-Tour und 1974 eine Reise durch 32 Städte. Höhepunkt ist war eine Ansprache Muns 1974 im Madison Square Garden, New York, vor 50.000 Besuchern. Ein weiterer Höhepunkt und vorläufiger Abschluß seiner Redekampagne war eine Ansprache im Jahre 1976 in Washington am Washington-Monument. (21)

Aufgrund politischer Spannungen zwischen Amerika und Korea wurde 1978 ein Untersuchungsausschuß des amerikanischen Repräsentantenhauses eingesetzt. Leiter war der Abgeordnete Donald Fraser. Der Ausschuß deckte viele Hintergründe der amerikanisch-koreanischen Beziehungen auf und stieß dabei auch auf die Rolle der Vereinigungsbewegung. Es wurde erstmals eine enge religiöse, wirtschaftliche und politische Verflechtung der Ziele der Vereinigungsbewegung offensichtlich. (22)

1982 wurde Mun in den Vereinigten Staaten wegen Steuerhinterziehung zu dreizehn Monaten Gefängnis verurteilt. Die Strafe trat er 1984 an. (23)

Im Jahr 1990 empfing der Präsident der damaligen Sowjetunion, Michail S. Gorbatschow, Mun persönlich während der 11. Weltmedienkonferenz in Moskau. Die Veranstaltung war von Mun zur Vereinigung der Medienlandschaft gegründet worden und fand erstmals im kommunistischen Machtbereich statt. Während die Vereinigungsbewegung behauptet, der Empfang habe stattgefunden, weil Gorbatschow die Wichtigkeit Muns erkannt habe, schien bei Gorbatschow der Grund für dieses Treffen in der wirtschaftlichen Finanzkraft des Geschäftspartners und den damit verbundenen Hoffnungen auf wirtschaftliche Unterstützung zu bestehen. (24)

1995 unternahm das Ehepaar Mun eine weitere Missionsreise in mehrere Länder, u.a. nach Rußland, Afrika und Südamerika.



Quelle: Eine neue Vision für den Weltfrieden

Die Gemeinschaft vom Heiligen Geist für die Vereinigung der Weltchristenheit, 1988

2) Entstehung und Entwicklung der Vereinigungsbewegung in Deutschland

Die ersten deutschen Mitglieder der Vereinigungsbewegung wurden 1963 in Kalifornien angeworben und schon 1964 als Missionare nach Deutschland und Österreich gesandt. (25)

Die „Göttlichen Prinzipien“, die Grundlage der Lehre Muns, wurden in die deutsche Sprache übersetzt und ein erstes Zentrum der Bewegung in Frankfurt am Main gegründet. (26)

Im November 1964 hat sich die Bewegung als „Gesellschaft zur Vereinigung des Weltchristentums“ in Frankfurt/Main registrieren lassen. (27)

In den ersten Jahren war die Expansion in der Bundesrepublik zunächst gering. Nach einem Besuch Muns im Jahr 1969, bei dem ein neuer Landesleiter für den deutschen Zweig der Vereinigung berufen wurde, änderte sich dies. Es kam zu Firmengründungen (Druckerei, Fotolabor, Importfirma zum Vertrieb von Ginseng-Produkten usw.), und erste deutschsprachige Zeitungen wurden gedruckt und verteilt. Von den Mitgliedern wurde erwartet, daß sie in Wohngemeinschaften lebten und finanzielle Beiträge zum Erhalt der Gemeinschaft leisteten.

Auch der Stil der Missionsarbeit wandelte sich. Während in den ersten Jahren Einladungen zu Vorträgen auf der Straße verteilt wurden, wandte man jetzt aufdringlichere Methoden an. Die Mitglieder nutzten z.B. die Fahrten in öffentlichen Verkehrsmitteln, um aus den „Prinzipien“ zu lesen oder laut zu predigen. Seit 1971 gibt es in der Vereinigungsbewegung in Deutschland auch Vollzeitmissionare. (28)

Bis Mitte der 70er Jahre erwarb die Vereinigungsbewegung zwei Trainingszentren : die Neumühle bei Camberg in Hessen und die Regelsmühle in Franken. (29) 1975 erfolgte die Umbenennung in „Vereinigungskirche e.V.“ (30)

1976 griff die CARP (eine Hochschul- und Studentenorganisation der Vereinigungsbewegung) massiv in den Bundestagswahlkampf ein, was ihr bald gerichtlich untersagt wurde. Die Wahlplakate der CARP hetzten gegen den Kommunismus und Sozialismus. (31)

Die Negativschlagzeilen in der Presse verschlechterten innerhalb kurzer Zeit das Image der Vereinigungsbewegung. Sie versuchte, dem entgegenzuwirken : Die Pressearbeit wurde verbessert, die Straßenmission wurde fast vollständig aufgegeben, die sogenannte „Hausmission“ eingeführt, (32) und die Kontakte zu den Eltern der Mitglieder wurden durch Vorträge verstärkt. (33)

1984 wurden an der damaligen Berliner Mauer Vereinigungskampagnen durchgeführt. Die CARP weihte „Heilige Gründe“ und berief internationale Treffen ein. (34)

Im August 1987 wurde ein im Vorfeld heftig umstrittener 4. Welt-Kongreß der CARP in Berlin abgehalten. Es kam zu schweren Zusammenstößen zwischen der Polizei und den Demonstranten gegen Mun.

Aufgrund dieser CARP-Aktivitäten in Berlin behauptete Mun heute, daß es nur dem Einfluß der Vereinigungsbewegung zu verdanken sei, daß Deutschland wiedervereinigt wurde und die „Mauer“ fallen konnte. (35)

Im Jahr 1992, dem „Jahr der Frau“, gab es in der Bundesrepublik eine neue Gründung innerhalb der Vereinigungsbewegung: die „Frauenföderation für den Weltfrieden“. Sie hat die Vereinigung aller Frauen der Welt unter der Ideologie Muns zum Ziel. Präsidentin der Weltvereinigung ist die Ehefrau Muns, Hak-Ja Han. Sie kam jeweils 1992 und 1993 nach Frankfurt, um vor geladenem Publikum ihre Ansprachen zu halten. Frau Mun trat hierbei eindeutig als „Botschafterin“ der Lehre Muns auf. (36)

II. Die Lehre und das Führungssystem der Munbewegung

1) Die religiöse Zielsetzung der Lehre Muns

Die Lehre der Vereinigungsbewegung basiert im wesentlichen auf den „Göttlichen Prinzipien“, den Offenbarungen Muns, die in den verschiedenen Ausgaben niedergelegt sind, und den Reden Muns („Master Speaks“). Die „Göttlichen Prinzipien“ gelten als die von Mun offenbarte Wahrheit für unsere Zeit. (37)

Mun sieht in allem Sein eine polare Struktur enthalten. Aus der allgemeinen Beobachtung, daß viele Dinge der Welt aus Gegensatzpaaren bestehen (z.B.: Mann und Frau, positiv und negativ) (38), folgert Mun, daß auch Gott in sich das männliche (Subjekt) und das weibliche (Objekt) vereinige. Gott soll das „Innere, das männliche Subjekt“ sein, während ihm die Schöpfung als „weibliches Objekt“ gegenüberstehe. Zwischen den beiden Polen Gottes gebe es einen ständigen Austausch, ein „Geben und Nehmen“. Dies sei die Grundlage der ewigen göttlichen Existenz.

Gott soll die Menschen Adam und Eva geschaffen haben, damit sie ein vollkommenes und sündloses Gegenüber zum Göttlichen bilden. Durch ihre Vollkommenheit sollten sie die Verwirklichung des dreifachen Segens erreichen. Die drei zur Vollkommenheit führenden Segnungen Gottes entnimmt Mun dem biblischen Ausspruch : „Seid fruchtbar und mehret Euch, füllet die Erde und machet sie Euch untertan“ (1. Mose 1,28).

Der erste Segen „seid fruchtbar“ soll zur Vervollkommnung der eigenen Persönlichkeit, der zweite „und mehret Euch“ zur Vervollkommnung der Familie führen. Der dritte Segen beinhaltet die Vervollkommnung der Herrschaft über die Schöpfung. (39)

Gott habe mit dem sündlosen Paar eine Trinität bilden wollen. Sein Ziel sei es gewesen, ein Paradies auf Erden zu errichten. Dieses Ziel sei jedoch durch den Sündenfall vereitelt worden. Nach Mun'scher Auffassung soll der Sündenfall dadurch eingetreten sein, daß Eva von Satan verführt worden sei und die Menschen dadurch auf den Weg des

Bösen gelangt seien. Das Paradies habe sich in eine sündige Welt verwandelt, und Satan sei zum Herrn der Welt geworden. (40)

Laut Mun ist es Gottes Ziel, seinen ursprünglichen Plan, das Himmelreich auf Erden, wiederherzustellen. Bei diesem Prozeß soll auch der Mensch eine entscheidende Rolle spielen. Er müsse seine Verbindung zu Gott durch „Wiedergutmachung“ wiederherstellen. Da das Individuum dazu aus eigener Kraft nicht in der Lage sei, brauche es die Hilfe des „Herrn der Wiederkunft“, des „Messias“. (41)

Dessen vorrangige Aufgabe sei es, als sündloser Adams eine sündlose Eva zu ehelichen und damit die erste sündlose und von Satan unabhängige „wahre Familie“ zu gründen. Die Anhänger werden durch eine Adoptionszeremonie zu Kindern der „wahren Eltern“ und Mitglieder der „wahren Familie“. Als solche können sie sündlose Kinder zeugen. (42)

Zwar habe Gott bereits mehrfach versucht, seine Idealvorstellungen z.B. durch die Entsendung von Jesus als „zweiten Adam“ auf die Erde zu verwirklichen, doch habe dieser versagt. Durch seinen frühzeitigen Kreuzestod sei es Jesus nicht gelungen, die physische Wiederherstellung zu vollenden. Er habe es nicht geschafft, eine Frau prinzipiengemäß wiederherzustellen und sündlose Kinder zu zeugen. (43) Folglich wird nach der Lehre der Vereinigungsbewegung ein „dritter Adam“ gebraucht. Dieser sei Mun, der in Korea wiedergeborene Messias, der von seinen Anhängern als „wahrer Vater“ verehrt wird. (44)

Eine wichtige Bestätigung, daß Mun der Messias sei, war für seine Anhänger die Hochzeit im Jahr 1960 mit der Studentin Hak-Ja Han. Durch diese sogenannte „Hochzeit des Lammes“, die als die Vereinigung des sündlosen Adam mit der sündlosen Eva gewertet wird, gilt Mun als Mittler zwischen Gott und Menschheit. (45) Er wurde zu der Zentralfigur, auf die alle anderen Religionen angeblich schon lange gewartet haben. „Deshalb werden alle Religionen vereinigt werden, indem sie sich dabei auf das Christentum ausrichten.“ Das gelte selbstverständlich auch für Hinduismus, Buddhismus und Islam. (46) Mun und seine Frau werden fortan als die „wahren Eltern“ der Gemeinschaft betrachtet. Die Mitglieder der Gemeinschaft werden ihre „wahre Familie“. (47)

Ziel der religiösen Ideologie Muns ist die Errichtung eines Himmelreichs auf Erden, d.h. die Vereinigung aller Religionen unter seiner Herrschaft. Mun versteht den Begriff „Vereinigung“ nie als gleichberechtigtes Nebeneinander verschiedener Glaubensrichtungen, sondern als die absolute Unterwerfung unter seinen Maßstab.

„Das Himmelreich wird zuerst auf Erden errichtet. Die Menschen sehen sich nach einer vereinigten Welt. Die Welt braucht *eine* Ideologie und *einen* Vater... Die Welt wird zu einem einzigen Land. Wenn alle Nationen miteinander vereinigt sind, bilden sie ein Volk unter der Herrschaft Gottes.“ (48)

Damit wird deutlich, daß Mun nicht nur die religiöse, sondern auch die politische Herrschaft anstrebt.

Die Lehre Muns wurde überwiegend aus Elementen anderer Weltanschauungen zusammengefügt. In Korea ist ein solcher Synkretismus (49) keinesfalls ungewöhnlich. Von Kritikern (50) wird behauptet, schon die „Göttlichen Prinzipien“ seien ein Plagiat des Buches „Basic Principles For Christianity“ von Baek-Mun Kim, dem Gründer und Leiter des Israel-Ordens, dem Mun für eine Weile beigetreten war. (51) Neben einer gewissen Ähnlichkeit des Titels soll das Buch auch inhaltliche Parallelen aufweisen. (52)

Aus der christlichen Vorstellung ist u.a. die bildhafte Darstellung des Paradieses mit Adam und Eva entlehnt. Der auch in der Bibel dargestellte Sündenfall erfährt allerdings eine abweichende Interpretation. In der Bibel wird der Sündenfall durch den Ungehorsam der ersten Menschen Adam und Eva ausgelöst, weil sie trotz des göttlichen Verbots Äpfel vom Baum der Erkenntnis gegessen haben sollen. Mun hingegen sieht den Sündenfall darin, daß Eva von Satan sexuell verführt worden sei. Diese Auffassung des Sündenfalls wurde zuvor schon von dem 1688 in London geborenen Naturforscher und Theosophen Emanuel Swedenborg und seinen Anhängern vertreten. Es ist sehr wahrscheinlich, daß Mun bereits während seiner Gymnasialzeit in Seoul Kontakte zu Pfingstgemeinden und Ordensgründern wie Yong Do Lee unterhielt, die Anhänger der Ideen Swedenborgs waren. (53)

Das stark messianische Sendungsbewußtsein der Lehre findet sich in etlichen koreanischen Religionen, u.a. auch bei Baek-Mun Kim wieder. (54)

Neben den genannten Elementen prägten auch östliche Weisheiten die Ideologie Muns. So wird teilweise behauptet, Muns Auffassung über die Polarität aller Dinge entspreche dem Yin und Yang des Konfuzianismus. (55)

2) Die autoritäre Führergestalt Muns und die Hierarchie der Munbewegung

Innerhalb der Vereinigungsbewegung gilt Mun als absolute Autorität. (56) Mun, der von seinen Anhängern als der „wahre Vater“ verehrt wird, ist von seiner Rolle als Messias vollkommen überzeugt:

„...Gott berief mich in seinem Auftrag als sein Instrument. Ich wurde gerufen, um Seine Wahrheit für Ihn zu offenbaren....ich wurde ausersehen, mit Jesus Christus und dem Lebendigen Gott direkt in Verbindung zu treten.“ (57)

Zur 40-Jahr-Feier (1994) seiner Bewegung verkündete er : „Es ist der Messias, der als wahre Eltern kommt...Gott berief mich, um diese Mission zu erfüllen.“ (58)

Mun selbst sieht sich als vollkommenen Menschen, der wie Gott fühlt und daher nie sündigt. „Dieser Mensch...wird daher zum Tempel Gottes und somit zu einem göttlichen Wesen. Er hat also göttlichen Wert.“ (59)

Damit ist er nach seiner Ansicht gleichzeitig befähigt, das gesamte Universum zu regieren. (60)

Zu seiner Unterstützung dienen ihm die Männer der ersten 36 von ihm gesegneten Familien, überwiegend Koreaner, die sich in fast allen Spitzenpositionen seiner Unternehmungen befinden. Die Kinder der Familien werden soweit möglich nur in diesem Zirkel untereinander verheiratet. (61)

Seit 1992 erscheint auch Frau Mun vermehrt in der Öffentlichkeit, überwiegend in der „Frauenföderation für Weltfrieden“, deren Präsidentin des Weltverbandes sie wurde.

Der älteste Sohn Muns, Hyo-Jin wurde zum Präsidenten der CARP-Weltvereinigung ernannt und organisiert dort die studentischen Sport- und Weltkongresse.

In den Ländern stehen den „Vereinigungskirchen“ Landesväter oder Landeseltern vor, denen noch ein Berater aus den „36 Familien“ zur Seite gestellt werden kann. Auf der Ebene darunter befinden sich die Bezirksleiter. Diesen sind die Zentrumsleiter unterstellt.

Das einfache Mitglied hat sich seinem Zentrumsleiter oder höherrangigen Mitgliedern vollständig zu unterwerfen. Es ist „Objekt“. (62)

Die Ausbildung der Leiterkader erfolgt auf dem „Unification Theological Seminary“ in Barrytown, New York, der eigenen Schulungsstätte. Die Absolventen werden überwiegend in „Fundraising“ (Geldbeschaffung) und „Hausmission“ trainiert. (63)

3) Das Elitebewußtsein der Gruppe

Die Anhänger der Vereinigungsbewegung glauben, den einzigen Schlüssel zu einem erfüllten Leben zu besitzen. Sie verstehen sich als Auserwählte („Champion Gottes“ oder „Soldaten Gottes“) (64), die dazu beitragen, das Reich Gottes auf Erden zu errichten. Diese Aufgabe hebt sie in ihren Augen deutlich vom Rest der Welt ab. (65)

Jedes Mitglied glaubt, einen Beitrag zur Welterrettung leisten zu können, wenn es die Bedingungen der Gruppe erfüllt und zum Dank für seine Bemühungen durch Mun adoptiert wird. (66)

Das Elitebewußtsein führt zu einer deutlichen Distanz zur Umwelt und zu einer Exklusivität der Gruppe, die sich in bestimmten Lebens- und Verhaltenskonzepten äußert :

a) Stark vereinfachte Weltsicht

Die Vereinigungslehre vermittelt ihren Anhängern eine sehr vereinfachte Weltsicht. Entsprechend dem „Polaritätsprinzip“ gibt es nur die Unterscheidung in „Gut“ oder „Böse“, „Für die Bewegung“ oder „Dagegen“. Kompromisse sind nicht möglich. Die Anhänger Muns als „Streiter Gottes“ stehen immer auf der Seite des Guten, während die

Menschheit außerhalb der Bewegung zum Untergang verurteilt ist. (67) Kritik an Mun und seiner Lehre wird als satanischer Angriff bewertet. (68)

Das Gelingen des Endziels wird dem gruppenkonformen Handeln des einzelnen zugeschrieben, nie der Gruppe selbst. Mißerfolg bedeutet somit mangelnden Glauben oder zu wenig persönliches Engagement in der Bewegung. (69) Kommt es zu Konflikten im zwischenmenschlichen Bereich, gibt es stets eine einfache Lösung : die Unterwerfung unter die Gruppe, d.h. unter die höherrangigen Gruppenmitglieder. Andere Wege führen in die Arme Satans und gefährden das Ziel der Bewegung. (70)

Ein weiteres Mittel, Konformität in den Gruppen durchzusetzen, ist die Technik des „Gedankenstopps“. Dazu gehören sehr intensives Beten, Singen, Summen oder Meditieren. Diese Methoden finden auch im psychotherapeutischen Bereich Anwendung. In der Vereinigungsbewegung werden sie aber derart trainiert, daß die Mitglieder sie automatisch anwenden, um kritische oder gruppenfeindliche Gedanken abzuwehren. (71)

b) Die Überwindung der satanischen Umwelt mit Hilfe der „himmlischen Täuschung“

Zur Wiederherstellung des Himmelreichs auf Erden sind nach der Auffassung Muns alle Mittel erlaubt, um Satan zu überlisten und ihm seine Besitztümer Stück für Stück zu entreißen. (72) Jeder Gegenstand, jede Person oder jedes Grundstück, das für die Ziele der Vereinigungsbewegung vereinnahmt werden kann, bedeutet einen Sieg über das Böse. Daher müssen ungeahnte Kräfte mobilisiert werden, um dem Plan Gottes Geltung zu verschaffen. (73)

Von Aussteigern wurde immer wieder berichtet, daß sie beim „Fundraising“ und bei der Anwerbung die Gesprächspartner über ihre wahren Ziele und Hintergründe getäuscht haben. Dieses Verhalten wird von Mun als „himmlische Täuschung“ (heavenly deception) bezeichnet, die er aus der Bibel und dem Verhalten Gottes rechtfertigt.

Gott habe die Täuschung des Jakob zur Erlangung des Erstgeburtsrechts für richtig erachtet, weil sie seinen Zielen diene (vgl. Altes Testament, 2. Moses). (74) Die Täuschung der Umwelt über die wahren Ziele der Vereinigungsbewegung sei daher ein legales Mittel.

Die „himmlische Täuschung“ durchzieht alle Aktivitäten der Vereinigungsbewegung :

- das Fundraising (Geldbeschaffung)

Die Vereinigungsbewegung versteht darunter den finanziellen Kampf gegen Satan.

Jeder Geldbetrag, der gesammelt werden kann, bedeutet eine Verminderung der satanischen Einflußsphäre. Gleichzeitig sollen sich die Spender einen Anteil an der himmlischen Erlösung erkaufen. Die Methoden der Strategie soll Mun in Japan erprobt und entwickelt haben. (75)

Die Mitglieder werden in Sammelteams von zehn bis zwölf Personen eingeteilt, die in Gruppen von meist zwei oder drei Personen als Verkäufer von Billigprodukten aus den Mun'schen Betrieben tätig werden. Sie täuschen vor, für soziale Einrichtungen, Seniorenfeste, Kindergärten, zur Unterstützung junger Musiker o.a. zu sammeln. (76)

Während der 60er und 70er Jahre gab es innerhalb der Mun-Bewegung eine eigene Organisation, die „International One World Crusade“ (Eine - Welt - Kreuzzug), die sich ausschließlich mit den weltweiten Einsätzen der Fundraising-Teams befaßte. Hunderte von Mitgliedern wurden zu ihren Einsätzen in der ganzen Welt geflogen. Sie blieben einige Wochen vor Ort, um dann zu weiteren Einsätzen zu wechseln. Dabei konnte es sich auch um die Einteilung zu politischen Demonstrationen handeln, die Mun besonders in Amerika zur Verfolgung seiner Ziele initiierte. (77)

Nach dem Untersuchungsbericht der amerikanischen Regierung von 1978 (Fraser-Report), konnten die Mittelbeschaffungsteams der Vereinigungsbewegung netto \$ 1.000,- pro Tag aufbringen. (78)

Ein Aussteiger berichtete, daß er in seiner mehr als sechsjährigen Zugehörigkeit zur Munbewegung den Betrag von 600.000 Dollar gesamt-

melt hat. Das entspricht einer durchschnittlichen Tageseinnahme von \$ 256,- !

- die Anwerbung (Missionierung)

Jedes Mitglied der Vereinigungsbewegung muß durch die Anwerbung „geistiger Kinder“ den eigenen spirituellen Entwicklungsstandard demonstrieren und gleichzeitig die Welt Satans schmälern (79). Dabei kommt es nicht darauf an, das Ziel der Anwerbung sofort deutlich werden zu lassen. Durch gezielte „himmlische Täuschung“ kann versucht werden, das potentielle Opfer zu Vorträgen, Gruppenessen oder Workshops zu lotsen (80). Ist ein neues Mitglied erst einmal in einem Gruppenzentrum, wird es so vereinnahmt (sogenanntes „Love Bombing“), daß ein Ausstieg nur schwer möglich ist. (81).

Die Mobilisierung einer neuen Kraft gegen Satan und das Anwachsen der Bewegung heiligen jedes Mittel! (82)

- politische, kulturelle und wirtschaftliche Aktionen

Mun selbst benutzt das Prinzip der „himmlischen Täuschung“, um seine politischen Ziele vor der Öffentlichkeit zu verschleiern. Vor einer Demonstration gegen den Rückzug von UN-Truppen aus Korea im Jahre 1974 sagte er :

„Sie müssen daran denken, daß ihre Aussagen nie politischen Charakter haben dürfen. Sie müssen sagen, 'Wir sind nicht an politischen Dingen interessiert. Wir tun dies nicht aus politischen Gründen, sondern aus humanitären'.“ (83).

Auch im kulturellen Bereich wurde das Prinzip der „himmlischen Täuschung“ erfolgreich angewandt. Der Fraser-Report wies nach, daß die koreanische Ballettgruppe „Little Angels“ zum Devisenschmuggel mißbraucht wurde. Genauso versuchte man über die Gruppe Zugang zu politischen Entscheidungsträgern zu gewinnen. (84)

„Wenn man nach den Little Angels fragt, sagen Sie einfach, daß Moon der Initiator der Gründung der Little Angels war..... Wenn wir die Little Angels zu offensichtlich zur Unterstützung unseres Meisters und der Kirche einsetzen, wird der Satan angrei-

fen, indem er sagt, daß Moon diese Kinder für seinen eigenen Ruhm einsetzt.“ (Vorstandsinformation 1973)

Im Rundbrief der Vereinigungsbewegung Österreich wurde mit Stolz berichtet, daß durch das von Mun gegründete „Religious Youth Service Project“ (Tagungen in aller Welt für 20 bis 30 Jährige) hunderte Menschen um eine „substantielle Vision des Weltfriedens“ bereichert worden seien. Diese Teilnehmer würden jetzt „in verantwortungsvollen Aufgaben Vaters Ideale weitergeben, ohne den theologischen Aspekt der göttlichen Prinzipien zu kennen oder gar Mitglied der Vereinigungskirche geworden zu sein.“ (85)

Innerhalb der wirtschaftlichen Aktivitäten der Vereinigungsbewegung wird der Anschein erweckt, die Firmen agierten unabhängig voneinander. Oft kann nur über die Führungskader eine Verbindung zur Bewegung nachgewiesen werden.

So kam z.B. der Spitzenfunktionär der Vereinigungsbewegung Dr. Kae-Hwan Kim 1962 als Stipendiat in die Bundesrepublik, studierte Volkswirtschaft und machte seinen Abschluß 'summa cum laude'. Er arbeitete an der Ruhr-Universität Bochum als wissenschaftlicher Assistent. 1979 gründete er in Düsseldorf die Sae Il Ex- und Import GmbH für Maschinenerzeugnisse. Erst 1980 wurde bekannt, daß Dr. Kim einer der Führungskader Muns war. Er war auch als Geschäftsführer der Mun-Firma Wanderer in Gießen eingesetzt. (86)

c) Die Gruppensprache und die Rituale

Oberflächlich betrachtet zeigen sich in der Sprache der Vereinigungsbewegung kaum Unterschiede zur Normalsprache. Versucht der Außenstehende aber, den Sinn des Gesagten zu verstehen, dann wird deutlich, daß Alltagsbegriffe mit anderen Sinndeutungen unterlegt wurden.

„Geben und Nehmen“ oder „Subjekt und Objekt“ sind Begriffe aus der Gruppensprache. Der Unterlegene ist immer der „Gebende“ oder das Objekt. Subjekt und „Nehmer“ kann nur der Höherstehende sein. Das „Kain-Abel-Problem“ ist ein weiterer Begriff aus dem Bereich der persönlichen Bindungen. Das untergeordnete Mitglied ist immer

in der Rolle des Kain. Da Kain den Abel erschlagen hat, muß er sich als „Wiedergutmachung“ dem schwächeren Abel unterwerfen. Damit kann er sich von den satanischen Einflüssen befreien. Die Lösung eines Konflikts liegt immer in der Unterordnung.

Auch der „Isaak“ ist ein Begriff aus der Wiedergutmachungslehre Muns. Die Anhänger werden in die Position des „Abraham“ versetzt und müssen ihrem Führer den „Isaak“ opfern. Meist handelt es sich um letzte private Gegenstände, Verbindungen zu Eltern, Freunden, Bekannten oder liebgewordene Lektüre.

Die amerikanische Aussteigerin B. Underwood berichtete, daß ein Mitglied den Kontakt zu einem leiblichen Kind opfern sollte, das nicht aus einer von Mun gesegneten Beziehung stammte. (87)

„Engelsgleich“ bedeutet schlicht „böse sein“, denn Satan war ein gefallener Engel.

„Wahre Christen“ sind im Sprachgebrauch der Bewegung nur die Anhänger Muns. Durch die geistige Wiedergeburt während der Adoption werden sie als „wahre Menschen“ und Kinder der „wahren Eltern“ wiedergeboren. (88)

Durch den Gebrauch der Wortgebilde verlernt das Mitglied im Laufe der Zeit seine Normalsprache und kann die Begriffe aus der Umwelt, die nicht ins Sprach- und Denkschema passen, nicht mehr zuordnen. (89)

Zu einer weiteren Ausgrenzung der Umwelt und zur Förderung des Elitebewußtseins trägt die Ritualisierung des täglichen Lebens der Vereinigungsmitglieder bei. Die gruppenspezifischen Normen lassen keinen Freiraum für individuelle Entfaltung. Durch die ständige Nähe anderer Mitglieder wird ein Abweichen unmöglich oder die Bestrafung der Gruppe erfolgt auf dem Fuß.

- das Gelöbnis

muß jeden Sonntagmorgen um 5 Uhr, an jedem Monatsersten und an jedem Feiertag der Bewegung gesprochen werden. Die Zeremonie ist genau geregelt. Über die Festschreibung der Hand- oder Fußbewegungen, die Kleidung, die Haltung, die Verbeugungen, die Aus-

stattung des Raums und die Ausstattung des Altars gibt es genaue Anweisungen. Der Wortlaut des Gelöbnisses muß jedem Teilnehmer zum Mitlesen verfügbar sein, wenn möglich sollte der Text auf koreanisch gelesen werden. Wird der Gelöbnisschwur gebrochen, sollen das Mitglied und seine Familie Satan anheimfallen. (90)

Das Gelöbnis der Munbewegung

- My Pledge -

1. Als das Zentrum des Kosmos will ich den Willen unseres Vaters, den Zweck der Schöpfung, erfüllen, sowie die Verantwortlichkeit, die Er mir zum Erreichen der eigenen Vollkommenheit übertrug. Ich will ein getreuer Sohn (eine getreue Tochter) und ein Kind des Guten werden, um in aller Ewigkeit hilfreich in Seiner Nähe zu sein in der vollkommenen Welt der Schöpfung, indem ich Freude und Herrlichkeit ihm bereite.

Das gelobe ich.

2. Ich will völlig auf mich nehmen den Willen Gottes, die gesamte Schöpfung mir als Erbe zu übergeben. Er hat mir sein Wort gegeben, seine Persönlichkeit und Sein Herz ruft mich, der ich gestorben war, zu neuem Leben, indem Er mich eins werden läßt mit Sich und mich zu Seinem wahren Kind erhebt. Um dies zu erreichen, ging unser Vater sechstausend Jahre unbeirrt den Opferweg des Kreuzes.

Das gelobe ich.

3. Als ein wahrer Sohn (als eine wahre Tochter) will ich dem Vorbild unseres Vaters folgen und mutig das Lager der Feinde angreifen, bis ich sie völlig gerichtet habe mit den Waffen, mit denen Er für mich den Verlauf der Geschichte hindurch den Feind, Satan, besiegt hat und durch das Säen von Schweiß für die Erde, Tränen für den Menschen und Blut für den Himmel - als ein Diener, aber mit dem Herzen eines Vaters, um Seine Kinder und das Universum, verloren an Satan, wiederherzustellen.

Das gelobe ich.

4. Der Mensch, die Familie, die Gesellschaft, die Nation, die Welt und der Kosmos, die bereit sind, unserem Vater zu dienen, der die Quelle ist des Friedens, der Glückseligkeit, der Freiheit und aller Ideale, werden die vollkommene Welt des einen Herzens in dem einen Körper verwirklichen, indem sie ihre ursprüngliche Natur wiederherstellen. Um dies zu tun, werde ich ein wahrer Sohn (eine wahre Tochter) werden und unserem Vater Freude und Befriedigung bringen, und als unseres Vaters Repräsentant werde ich auf die Schöpfung Frieden, Glückseligkeit, Freiheit und alle Ideale des Herzens übertragen.

Das gelobe ich.

5. Ich bin stolz auf die eine Herrschaft, stolz auf das eine Volk, stolz auf die eine Sprache und Kultur, die Gott als Mittelpunkt haben. Ich bin stolz, das Kind des einen Wahren Elternpaares zu werden; stolz auf die Familie, die die eine Tradition erben wird; stolz darauf, als Arbeiter mitzuwirken bei der Errichtung der einen Welt des Herzens.

Ich werde unter dem Einsatz meines Lebens kämpfen. Ich werde verantwortlich sein, meine Pflicht und meine Mission zu erfüllen.

Das gelobe und schwöre ich.

Das gelobe und schwöre ich.

Das gelobe und schwöre ich.

Der 5. Abschnitt sollte immer in koreanisch gesprochen werden !

- die Feiertage

In der Vereinigungsbewegung gibt es eine Reihe eigener Feiertage und Jubiläumsfeiern, die meist nach dem Mondkalender gefeiert werden. Nur der Neujahrstag „God's Day“ wird nach dem Sonnenkalender begangen. Zu jedem Feiertag gehört auch eine freiwillige Spende zugunsten der wahren Eltern. (91)

- das Heilige Salz

Der Gedanke, die Welt und die Menschen von satanischen Einflüssen retten zu müssen, beherrscht die Handlungen der Mun-Anhänger. Neben allgemeinen Bedingungen wie Beten, Fasten oder besondere Sammelaktionen gibt es daher spezielle Reinigungsrituale mit Kerzen und Heiligem Salz. Die Handlungsabläufe sind genau beschrieben. Alle Gegenstände, die von außen in ein Zentrum oder eine Wohnung hineingetragen werden, müssen mit Salz bestreut oder Kerzenrauch bepustet werden. Damit sind sie Satans Einfluß entzogen. Fühlt sich eine Person durch besondere satanische Einflüsse bedrängt, kann sie sich ebenfalls mit Salz bewerfen. Die Kleidung ist damit gereinigt und bietet Schutz vor weiteren Attacken. (92)

- das „Matching“ und die „Segnung“ (blessing)

Beim „Matching“ werden anhand von Fotografien die zukünftigen Partner bestimmt, die von Mun gesegnet werden sollen. Während der „Holy Wine Ceremony“ (Weinzeremonie) vor der Segnung wird durch das Trinken von „Blut“ (ein von Mun zusammengestellter Trank) die satanische Blutlinie gelöscht und das Mitglied geistig als „wahrer Christ“ und „wahres Kind“ der „wahren Eltern Mun“ wiedergeboren. (93)

Nach der Segnung von 360.000 Paaren am 25.08.95 beabsichtigt Mun im November 1997 die Massentrauung von 3,6 Millionen Paaren in Washington/USA. (94)

4. Ehe und Familie

In der Lehre der Vereinigungsbewegung sind die Ehe und die Familie die zentralen Institutionen. Mun betont in allen Reden immer wieder die Bedeutung von Ehe und Familie. (95) Aber sein Verständnis dieser Institution ist kaum mit dem im Grundgesetz verankerten Familienbegriff vereinbar.

Mun versteht unter „Familie“ nicht die Familie im herkömmlichen Sinne, sondern die „wahre Familie“, d.h. seine Anhänger, als deren „wahrer Vater“ er sich sieht. Diese „wahre Familie“ hat vor allen anderen Bindungen Vorrang, weil sie für die Ewigkeit angelegt wurde.

Um eine neue sündlose Menschenfamilie zu schaffen, führt Mun Massenhochzeiten durch, bei denen er Paare, die er zusammengestellt hat, segnet.

Hierzu wählt er nach eingesandten Fotos Partner aus verschiedenen Nationen aus, um sie miteinander zu „verheiraten“. Der von Mun getroffenen Wahl kann in Einzelfällen widersprochen werden, in aller Regel ist aber davon auszugehen, daß die Entscheidung „akzeptiert“ wird. (96)

Die Akzeptanz beruht einerseits darauf, daß die Anhänger glauben, Mun verfüge über die hellseherische Fähigkeit, schon beim Betrachten der Fotos die richtige Partnerseele zu erkennen. Andererseits darf nicht verkannt werden, daß der Gruppendruck und die Angst, aus der Gemeinschaft ausgeschlossen zu werden und Satan anheimzufallen, enorm sind. (97)

So hat das Amtsgericht Hamburg eine von Mun „gematchte“ Ehe gemäß § 34 Ehegesetz aufgehoben, weil es durch die Anhörung der Ehefrau zu der Überzeugung gelangte, daß diese durch Drohungen der Gemeinschaft in eine Zwangslage versetzt worden war, die einem freien Entschluß zur Eingehung der Ehe entgegenstand. (98)

Die Segnung durch Mun (sogenanntes „Blessing“) beinhaltet aber nicht nur die „Eheschließung“. Wesentliches Element der Segnung ist die paarweise Adoption durch Mun in die „wahre Familie“. (99)

Bemerkenswert ist, daß sich die Partner vor der Segnung teilweise noch nie gesehen haben.



Quelle: Die Woche, 01. 03. 96

In Film- und Fernsehberichten wurde gezeigt, daß von einigen „Ehegatten“ nur ein Partner anwesend war, der während der Zeremonie ein Bildnis seines Partners trug. Anscheinend ist auch die Segnung eines lebenden mit einem verstorbenen Mun-Anhänger möglich. (100)

Das von den Ehepartnern bei der Segnung abgegebene Versprechen ist im wesentlichen ein Gelöbnis an Mun. Die Partner geloben, seine Grundsätze zu befolgen und übernehmen die Verantwortung für das Gelingen der Beziehung. (101)

Erst nach einer Bewährungszeit zwischen 40 Tagen bis zu drei Jahren ist es den Eheleuten erlaubt, intim miteinander zu verkehren. Nach Berichten aus Korea soll das erste sexuelle Zusammensein stark ritualisiert und im Detail vorgeschrieben sein (z.B. die Position von Mann und Frau als Verkörperung von Adam und Eva). (102)

Ziel der Rituale ist die Vermehrung der Anhänger Muns, d.h. die Erzeugung „sündloser“ nicht der satanischen Blutlinie verfallener „wahrer Christen“.

Auf das Gebären und die Aufzucht der Kinder reduziert sich die Rolle der Frau in der Vereinigungsbewegung. Selbst das Familienleben und die Fürsorgepflicht gegenüber den Kindern sind dem Ziel der Bewegung untergeordnet. (103)

Aus dem Brief einer Mun-Anhängerin geht hervor, daß Kleinkinder anderen zur Betreuung überlassen werden, damit ein reibungsloser Ablauf der Missionstätigkeit gewährleistet bleibt :

„Als ich Lissabon in Richtung Prag verließ, ließ ich unsere Kinder zurück. David hatte noch von der Brust getrunken. Was mir sehr half, waren Vaters Worte aus einer Rede: '...um nicht sentimental zu werden, vermied ich es, Bilder meiner Kinder anzuschauen und ich konzentrierte mich auf Gottes Arbeit....' So tat ich dasselbe. Ich hatte nur ein Foto bei mir und schaute es fast nie an. In dieser Zeit hatte David einen Unfall...

Ich hoffe, daß er eines Tages stolz darauf sein kann, weil er als ein Opfer dienen konnte.“ (104)

Aus dem Brief geht weiter hervor, daß auch der Vater der Kinder gleichzeitig mindestens fünf Monate im Auslandseinsatz unterwegs war.

Nur aus der Unterordnung der Individualität und aller persönlicher Beziehungen unter das höherrangige Ziel ist ein noch drastischerer Eingriff in das Familienleben nachvollziehbar. Mun soll von seinen Anhängern verlangen, „wahre Kinder“ an andere Ehepaare abzugeben, die aus Alters- oder Gesundheitsgründen nicht in der Lage sind, eigene Kinder zu bekommen. Zuvor sollte man aber ein Kind gebären und behalten. (105)

5. Die Bindung an die Gruppe

Der Einstieg in die Vereinigungsbewegung erfolgt in mehreren Phasen, in denen sich die Bekehrung vollzieht.

Das neue Mitglied durchläuft bestimmte Kontrollmechanismen, die darauf abzielen, sein Bewußtsein, sein Verhalten, seine Informationsquellen und seine Gedanken unter die Kontrolle der Bewegung zu bringen. Ziel ist ein neuer Mensch, der die eigene Persönlichkeit durch die Identität der Gruppe ersetzt.

Wie derartige Persönlichkeitsveränderungen funktionieren, veranschaulichte der Amerikaner Gary Scharff, früher selbst Direktor der Studentenorganisation CARP und nach seinem Ausstieg Leiter des „Freedom of Thought Rehabilitationszentrums“ (u.a. Behandlung ehemaliger Sektenangehöriger) während eines Gerichtsverfahrens :

„Trennen Sie einen Menschen von seinem Elternhaus und seinen Freunden. Schalten Sie mit einem durchorganisierten Programm ohne Freizeit, das von 7 Uhr morgens bis 1 Uhr nachts dauert und keinerlei Eigenbeschäftigung erlaubt - nicht einmal beim Waschen und Essen - sein eigenes Bewußtsein aus. Fügen Sie diesen Faktoren eine Flut religiöser Vorstellungen hinzu, die den Teilnehmer so verwirren und ermüden, daß er nicht mehr weiß, was gesagt wurde, mit der Ausnahme der Tatsache, daß er böse ist, wenn er eine von ihnen anzweifelt oder es nicht schafft, den Vorträgen vollkommen zu folgen. Mangel an Schlaf und proteinarme Nahrung verstärken den Prozeß, indem sie den Menschen körperlich auf Sparflamme setzen.“ (106)

a) *Die Methoden der Anwerbung*

In den 70er und 80er Jahren fiel die Vereinigungsbewegung durch besonders aufdringliche Werbemethoden auf. (107) Die Mitglieder versuchten durch die verschiedensten Methoden auf aggressive Weise Interessenten in die Zentren und Wohngemeinschaften zu locken.

Innerhalb kürzester Zeit entstand in der deutschen Öffentlichkeit gegenüber der Gruppierung eine stark ablehnende Haltung, so daß diese daraufhin ihre Missionsmethoden änderte. Es wurde die sogenannte „Home Church Mission“ (Hausmission) eingeführt.

Dabei werden einem Mitglied oder einer Familie bestimmte Wohnbezirke zugeteilt, die dann zu missionieren sind. Über freundschaftliche Kontakte und Hilfeleistungen z.B. beim Kinderbeaufsichtigen oder der Unterstützung hilfsbedürftiger Personen werden zwischenmenschliche Beziehungen geknüpft, die schließlich zu einer neuen Mitgliedschaft führen sollen. (108)

Seit der Wiedervereinigung lebt die Straßenmission verstärkt wieder auf. Die Bewegung errichtet Informationsstände in den Fußgängerzonen der Großstädte, die unter den verschiedensten Bezeichnungen angemeldet werden. (109)

Hierbei wurden in den letzten Jahren bereits die Kinder der ersten Generation (im Alter zwischen 16 und 21 Jahren) als Werber eingesetzt. (110)

Ziel aller Kampagnen sind überwiegend junge Menschen. Mit der Gewinnung junger, gebildeter Anhänger erhofft sich die Bewegung zunehmenden Einfluß auf die Gesellschaft.

In einem Rundbrief der österreichischen Abteilung heißt es:

„...Unsere Hauptzielgruppe waren Studenten, die wir u.a. am Mozarteum erreichten....Unsere Bücher- und Informationsstand stellten wir auch gerne auf dem Alten Markt auf, zumal die juristische, theologische und geisteswissenschaftliche Fakultät nicht weit weg sind...“ (111)

Eine der wichtigsten Anwerbegruppen an den Universitäten ist die **C A R P** (Collegiate for the Research of Principles).

Sie wirbt an den Hochschulen aller Länder mit der Durchführung von Weltstudentenkongressen (z.B. in Bangkok), Sportveranstaltungen, Vorträgen und Einladungen zu Mittagessen. (112) In Korea und Japan ist die CARP nach eigenen Aussagen im Studentenparlament aller Universitäten vertreten und führt verschiedentlich den Vorsitz. (113)

Aus der Satzung der CARP wird deutlich, warum die Anwerbung von Studenten für die Ziele der Vereinigungsbewegung von großer Wichtigkeit ist. Hauptzweck der Organisation ist die

„Förderung des Erziehungswesens, ausgehend vom universitären Bereich, und der Lehrerbildung, um damit das Erziehungswesen insgesamt zu erneuern.“

Weitere in den Statuten genannte Ziele sind : die Neubelebung des christlichen Fundaments der Demokratie, die Vereinigung von Religion und Wissenschaft, von östlichen und westlichen Kulturen, die Kritik am Kommunismus und die Förderung der Information über das Universitätssystem.

Aus der Satzung ergibt sich lediglich, daß „theoretische Grundlage für die unter Punkt 4 angegebenen Aktivitäten“ die Vereinigungsphilosophie („Unification Thought“) ist. Der Inhalt der Philosophie wird aber nicht näher erläutert. Der unbedarfte Interessent erkennt nicht, daß CARP eine Unterorganisation der Vereinigungsbewegung ist. (114)

Von den CARP-Studenten wird erwartet, daß sie sich an die Universitäten verteilen und dort neue Untergruppen gründen, um studentische Entscheidungen zu beeinflussen. Diese Untergruppen sind dem Gesamtvorstand gegenüber rechenschaftspflichtig (Punkt 11 und 12 der Satzung). Gleichzeitig ist CARP eine Unterorganisation der politischen Vereinigung CAUSA (Confederation of Associations for the Unity of the Societies of the Americas).

b) Die Integration und die Unterwerfung

Aus früheren Jahren gibt es etliche im wesentlichen übereinstimmende Aussteigerberichte, die die von Scharff dargestellten Manipulations- und Kontrolltechniken bestätigen. (115)

Tatsächlich verschwanden damals neue Gruppenmitglieder aus den Augen ihrer Umwelt, weil sie in Trainingszentren oder Wohngemeinschaften verweilten oder sich mobilen Missionierungsteams anschlossen. Sie hatten keinen Kontakt zu Familienangehörigen oder Freunden. Es wurde immer öfter über „Gehirnwäsche“ und „Menschenraub“ im Zusammenhang mit der Vereinigungsbewegung berichtet.

Der Lösungsprozeß von der Umwelt wurde von der Bewegung dadurch unterstützt, daß am Beginn der Mitgliedschaft die Kontaktaufnahme kontrolliert und reguliert, d.h. gegebenenfalls auch verhindert wurde. (116) Hierbei ist sogar Post von Verwandten und Freunden unterschlagen worden. Bei den Workshops, die der Einführung der Neuen dienten, sind Münzfernsprecher überwacht und bei Bedarf abgestellt worden. (117)

Das neue Mitglied wurde derart für die Ziele der Bewegung eingespannt, daß für eigenständiges Nachdenken keine Zeit mehr blieb. Beruf und Studium wurden häufig aufgegeben oder vernachlässigt, um sich ganz den Zielen der Bewegung widmen zu können.

Getreu den unifikatorischen Grundsätzen, daß der Erfolg der Arbeit gleichzeitig ein Spiegel der Glaubenstreue und spirituellen Entwicklung sei, wurden die Mitglieder weltweit zu Missionseinsätzen eingeteilt. Die Mitglieder waren „...der festen Überzeugung, mit ihrem Opfer an Zeit, Geld und Mühe zur Erlösung der Welt beizutragen“. (118)

Die Gruppenmitglieder hatten kaum Zeit zum Lesen. Die Bücher aus dem Privatbesitz wurden „geopfert“. Durch die Abschottung der Anhänger von Literatur, Rundfunk und Fernsehen und die Beschränkung der Gesprächspartner auf Gruppenzugehörige erfolgte eine „Informationskontrolle“. Diese führte dazu, daß keine kritischen Gedanken gegenüber der Gruppe und der Lehre auftraten. (119)

Die Abhängigkeit des einzelnen von der Gemeinschaft wurde u.a. dadurch verstärkt, daß Mitglieder ihr persönliches Eigentum der Gruppe

übereigneten. Das reichte von den Ersparnissen über das Auto bis hin zum Bankkonto. (120)

Die Folgen der Kontroll- und Manipulationstechniken verdeutlicht die Aussage in einem Gerichtsverfahren :

„Was immer deine ‘Zentralfigur’ dir sagt, ist die Wahrheit, nur das ist die Wahrheit. Darüber kann es keine Zweifel geben. Sie sagen dauernd: ‘Vertraue, wo du nicht verstehst.’ Man versucht schließlich ganz automatisch zu antworten. Je automatischer man antwortet, um so vertrauenswürdiger ist man.“ (121)

In der neueren Zeit wird von einer scheinbaren Liberalisierung des deutschen Zweigs der Munbewegung berichtet. Dem steht entgegen, daß insbesondere aus den neuen Bundesländern berichtet wird, daß die Vereinigungsbewegung nach wie vor versucht, Mitglieder nach der Anwerbung zum „Fundraising“ in verschiedene Länder Europas zu schicken, um „Geld für den wahren Vater zu machen“. (122)

Eine Aussteigerin erzählt, man habe von ihr sogar verlangt, ihre Wohnung aufzugeben, um sich für fünf Wochen zum Geldsammeln zu begeben. (123)

Hierdurch wird deutlich, daß die Mitglieder, die zum Fundraising eingesetzt werden, in finanzielle Abhängigkeit von der Gruppe geraten können.

c) Die Lösung von der Gruppe

Das einzelne Mitglied kann sich kaum allein aus dem Zwang der Gruppe lösen. Die Mechanismen, die es in die Gruppe brachten, verhindern umgekehrt auch, daß es sich davon lösen kann. Die Isolierung von der Außenwelt erschwert die Wiederaufnahme von Kontakten zu anderen. Die Angst vor dem Ausgestoßensein verhindert oder verzögert Ablösungen. Der Austritt kann für das Mitglied schwerwiegende soziale und finanzielle Folgen haben. (124)

Ein deutscher Aussteiger aus dem amerikanischen Zweig schildert seine Erfahrungen folgendermaßen:

„Es ist faszinierend und erschreckend wie intelligente, kritisch denkende Menschen in fanatische Sektenanhänger ohne kritisches Denkvermögen umgewandelt werden können. Das ist mir passiert, und viele meiner Freunde in der Munsekte haben selbst nach 10 Jahren heute noch nicht den Absprung geschafft. Ich hatte großes Glück, doch was ist mit denen, die nicht solch ein liebevolles und unterstützendes Elternhaus wie ich haben?“ (125)

Die größten Chancen aus der Vereinigungsbewegung auszusteigen, haben diejenigen Mitglieder, deren Eltern oder Freunde auch gegen den Widerstand der Gruppe die Kontakte aufrecht erhalten.

III. Der Universale Machtanspruch

Muns erklärtes Ziel ist die Vereinigung der Welt unter seiner Herrschaft. Die „Göttlichen Prinzipien“ schließen mit dem Satz :

„Damit die ideale Welt der einen großen Familie unter dem Herrn der Wiederkunft als dem wahren Vater errichtet werden kann, müssen alle Sprachen miteinander vereinigt werden.“ (126)

Die Vereinigungsbewegung behauptet, unter der Schaffung der idealen Welt verstehe Mun nicht die Errichtung einer politischen Weltordnung, sondern es handele sich um eine bildhafte, der Sprache der Bibel vergleichbare Darstellung.

Diese Behauptung ist schon deshalb zweifelhaft, weil nach den „Göttlichen Prinzipien“ der Weg zur Herstellung der idealen Welt ein dritter Weltkrieg sein solle, der entweder geistig-ideologisch oder physisch-militärisch ausgefochten wird. In diesem dritten Weltkrieg soll die Welt Satans (d.h. der Kommunismus) unterworfen werden. (127)

Weder Wortwahl noch Darstellung dieses dritten Weltkrieges lassen den Eindruck entstehen, es handele sich um eine „mythische Theologie“. Vielmehr deutet die Beschreibung handfester Vorstellungen auf die Durchsetzung weltlicher Ziele hin.

Nach der gültigen Lehre der Vereinigungsbewegung endete der vorhergesagte 3. Weltkrieg durch die geistig-ideologische Überwindung des Kommunismus. Zeichen dieses Sieges waren Muns Treffen mit Gorbatschow (1990) und Kim Il Sung (1991). Sie sollten die ideologische Vernichtung der „Kain-Typen“ symbolisieren, und der 3. Weltkrieg wurde geistig für vollendet erklärt. Seit 1990 begann für die Vereinigungsbewegung die letzte vollständige Vereinigung der „Neuen Menschheit“. (128)

Nach Aussagen ehemaliger Gruppenmitglieder (129) sowie nach in der Literatur vertretenen Auffassungen (130) und insbesondere nach Erkenntnissen des Fraser-Reports (131) plant Mun die Schaffung einer weltweiten Theokratie, d.h. einer Weltordnung, die die Trennung zwischen Kirche und Staat abschafft. Im Fraser-Report wird aus verschiedenen Schriften und Reden Muns zitiert, in denen er seine Ambitionen, die Weltherrschaft zu übernehmen, in aller Deutlichkeit vorträgt.

„Die Zeit wird kommen, wo ohne mein Zutun, meine Worte nahezu Gesetz sein werden. wenn ich etwas wünsche, wird es getan. Wenn ich etwas nicht wünsche, wird es unterbleiben. wenn ich einen bestimmten Botschafter für ein bestimmtes Land empfehle und dann dieses Land und den Amtssitz dieses Botschafters besuche, wird er mich mit dem roten Teppich empfangen.“ (132)

„...mußte man im Mittelalter Kirche und Staat trennen, weil die Leute damals korrumpiert waren. In unserer Zeit müssen wir jedoch eine automatische Theokratie haben, um die Welt zu regieren. Daher können wir Politik und Religion nicht trennen... Eine Trennung zwischen Religion und Politik ist dem Satan am liebsten.“ (133)

Mun bringt seinen Führungsanspruch in einer in Amerika gehaltenen öffentlichen Rede zum Ausdruck. Er sagte:

„Die Welt hat keinen Führer. Weder die Russen noch die Amerikaner. Sie rufen nach ihrem wahren Führer.

Glaubt ihr, daß der Führer, nach dem sie rufen, der Mann aus Asien ist, Mun genannt ?“ (134)

1. Die wirtschaftlichen Unternehmungen

Zur Verwirklichung seiner Ziele benötigt Mun erhebliche finanzielle Mittel. Eine seiner Quellen sind seine Anhänger, die mit ihren „Spenden“, ihrer Arbeitskraft und ihren Sammelbeträgen beträchtliche Summen aufbringen.

Darüber hinaus hat Mun sich eine weitere Einnahmequelle erschlossen, indem er weltweit diverse Wirtschaftsunternehmen betreibt.

Bereits 1959 gründete Mun die „Yeohwa Shotgun“, anfangs eine Luftgewehrfabrik, die sich später zu einem der Hauptlieferanten für Waffen an die koreanische Regierung entwickelte. (135)

Heute stellt sich diese Gründung als „Tong Il Company“ dar, die als internationaler Konzern für Werkzeugmaschinen auch verschiedene Firmen in Deutschland übernommen hat. (136)

Die erste Firmengründung nach Muns Übersiedlung in die USA war 1973 die Gründung der Tong Il Enterprises in New York. Zweck des Unternehmens war anfangs der Import und Export von Marmorvasen und Ginseng-Produkten. Zwischenzeitlich bestehen neben der Mutterfirma in Korea Zweigniederlassungen in aller Welt und Abkommen mit amerikanischen, japanischen, britischen und deutschen Firmen. Mun soll zeitweise bis zu 80 % des Ginsenghandels beherrscht haben. (137)

Heute gehören zur Vereinigungsbewegung eine Titan- und Silizium Company, Reedereien, eine Thunfischflotte in Alaska, Fischverarbeitungsindustrien in Amerika, Kosmetikvertriebe, Karatestudios, Pizzerien, Blumenläden, Reisebüros und Sprachschulen für koreanisch. Letztere sind besonders wichtig, weil im Weltreich Muns nur noch koreanisch gesprochen werden soll! (138)

Mun versuchte seit Beginn seiner Übersiedlung in die USA, dort eine der großen Banken (Diplomat National Bank) unter seine Kontrolle zu bringen. Damit wäre es ihm gelungen, Einfluß auf alle wirtschaftlichen Bereiche des Landes zu nehmen. Nachdem Mun und seine Funktionäre bereits 64 % der Anteile unter falschen Angaben in ihren Besitz gebracht hatten, gelang es der amerikanischen Regierung, diesen Plan zu vereiteln. (139)

Mehr Erfolg war Mun in Uruguay beschieden. Dort gelang es ihm in den 90er Jahren eine der Großbanken in seinen Besitz zu bringen. (140)

Gemeinsam ist allen Unternehmungen der Vereinigungsbewegung, daß die Firmenanteile nur von einem begrenzten Personenkreis gehalten werden, von Mun, seiner Frau, seinen Kindern und den Mitgliedern der „36 Familien“. (141) Damit bleiben Geld und Macht auf einen engen Kreis konzentriert.

Die Finanzkraft des Mun-Imperiums darf nicht unterschätzt werden. Zwar soll das Wirtschaftsimperium nicht zu den zehn größten Familiengesellschaften Koreas gehören, (142) doch Fachleute schätzen allein das Anlagevermögen Muns auf ca. 5 Milliarden Dollar. (143)

Wie groß die hinter Mun stehende Finanzmacht tatsächlich ist, vermag wohl niemand wirklich einzuschätzen.

Die Verflechtungen der Wirtschaftsunternehmen der Vereinigungsbewegung sind kaum durchschaubar. Schon 1978 hat der Fraser-Report festgestellt :

„In der Vielfalt ihrer Funktionen und ihrem grundlegenden organisatorischen Aufbau ähnelt sie heute einer multinationalen, mit Fabrikation, internationalem Handel, Rüstungsaufträgen, Finanzierungen und sonstigen Geschäften befaßten Gesellschaft. Ihre Tätigkeiten gehen jedoch insofern darüber hinaus, daß sie auch religiöse, bildungsmäßige, kulturelle, ideologische und politische Unternehmungen beinhaltet.“ (144)

Mun benutzt die Medien zur Beeinflussung der öffentlichen Meinung. Deshalb erwarb er Anfang der 70er Jahre die „Washington Times“. (145) Mun soll die Zeitung mit jährlich 35 Millionen Dollar subventionieren, um sich seinen Einfluß zu erhalten. (146)

In Deutschland übernimmt der Kando-Verlag in Frankfurt am Main den Vertrieb der Publikationen der Vereinigungsbewegung. (147)

Mun besitzt außerdem eine der modernsten Druckereien Südamerikas in Montevideo/Uruguay. Dort ist geplant, eine Tageszeitung aufzulegen, die in 19 Staaten Nord- und Südamerikas erscheinen soll. (148) Außerdem plant er in Südamerika die Übernahme von Radio- und Fernsehstationen. (149)

Mun macht kein Geheimnis daraus, daß er seine religiöse Lehre dazu benutzen will, auf die öffentliche Meinungsbildung einzuwirken. Er will in der Lage sein, marktwirtschaftliche Entwicklungen in seinem Sinne zu manipulieren :

„Dieses System sollte letztlich in einer Form dominieren, daß selbst in Japan und Deutschland die Menschen nicht mehr Produkte ihres Landes kaufen, sondern auf zentrale Anweisung hin kaufen werden. Mit welcher Art gedanklichem oder wirtschaftlichem System können derartige Anweisungen gegeben werden? Die Religion ist das einzige System, die dies vermag.“ (150)

Während früher die USA bevorzugter Investitionsstandort für Mun waren, scheint er nunmehr den Schwerpunkt der Aktivitäten nach Südamerika zu verlagern. Besonders in Argentinien, Paraguay, Uruguay und Brasilien zeichnet sich eine Verdichtung Mun'scher Investitionen ab. Ein Projekt in Argentinien im Umfang von 500 Millionen Dollar sieht z.B. die Gründung einer Kolonie im Nordwesten des Landes vor, in der Bauern und Fischer aus 160 armen Ländern angesiedelt werden sollen. (151)

Die Vereinigungsbewegung versucht auch in Afrika, den Staaten der ehemaligen „UdSSR“, in China und Nordkorea wirtschaftlich Fuß zu fassen. In China sollen unter Mitwirkung Muns eine Automobilfabrik und ein Atomkraftwerk erbaut werden. In Nordkorea soll in der Nähe des Geburtsorts Muns ein Freizeitgelände entstehen, das 350 Millionen Dollar kosten soll. (152)

Ein weiteres, utopisches Zukunftsprojekt Muns ist der Bau einer internationalen Friedensautobahn, die alle Länder der Welt verbinden soll. Ausgangspunkt soll Tokio in Japan sein, das durch einen 190 km langen Tunnel mit dem koreanischen Festland verbunden werden soll. Angeblich arbeiten schon 100 Techniker an der Verwirklichung dieser Mun'schen Idee. (153)

2. Die kulturellen Unternehmungen

Eines der ersten Kulturprojekte Muns war die Gründung der „Korean Cultural and Freedom Foundation“ (KCFF) im Jahre 1964. Hierzu gehörte u.a. die koreanische Ballettgruppe „Little Angels“, die vor allen Staatsoberhäuptern und einflußreichen Persönlichkeiten der westlichen Welt auftraten. Der Fraser-Report stellte fest, daß die Mitglieder der Truppe z. B. zum Devisenschmuggel der Vereinigungsbewegung und Aktivitäten des koreanischen Geheimdienstes eingesetzt wurden. Untergruppen dieser Kulturstiftung waren Künstlervereinigungen, Tanzgruppen, Jazzbands, Orchester, Chöre usw. (154)

Im Bildungsbereich wurden ebenfalls internationale Organisationen mit dem Ziel der Beeinflussung gegründet. Eine der bekanntesten bei uns dürfte die „Professors World Peace Academy“ (PWPA) sein. Zu ihren Mitgliedern gehören namhafte Professoren und Wissenschaftler aus allen Bereichen der Wissenschaft und Forschung, die sich zu jährlichen Symposien treffen. Die Kosten der Teilnehmer werden von der PWPA übernommen. (155)

Die Vereinigungsbewegung unterhält in Brasilien, Korea und den Vereinigten Staaten eigene Universitäten. Besonders die Hochschulen in den südamerikanischen Ländern bilden die Grundlage für die Rekrutierung neuer Anhänger auf breiter Front. (156)

Die Errichtung eigener Kindergärten soll die Ideologie der Vereinigungsbewegung über die Kinder in die Familien tragen. In Gießen wurde dem Kindergarten „Die Wichtel“ allerdings keine städtische Förderung bewilligt.

Ähnlich wird in Österreich über Fortbildungsveranstaltungen des „Forum Ost“ versucht, über die Lehrerfortbildung Einfluß auf die Erziehung und die Kinder zu nehmen. (157)

3. Die militärischen Ambitionen

Auch im militärischen Bereich ist Mun durchaus ambitioniert und interventionsfreudig. So verspricht er, seine Anhänger aus aller Welt im Namen Südkoreas einzusetzen. Falls Nordkorea einen Krieg gegen das südkoreanische Volk provoziere, so ist es nach Ansicht der Mitglieder der Vereinigungsbewegung Gottes Wille, daß sie ihr religiöses Vaterland bis zum letzten verteidigen, die vereinigte Kreuzfahrerarmee organisieren und zum Zwecke der Verteidigung Koreas und der freien Welt an diesem Krieg teilnehmen. (158)

Im Fraser-Report wurde 1978 abschließend zur Vereinigungsbewegung festgestellt: „Bei der Ausbildung und dem Einsatz von Mitgliedern der unteren Ränge ähnelt sie einer paramilitärischen Organisation, während sie in anderer Hinsicht die Eigenschaften einer streng disziplinierten Partei hat.“ (159)

4. Die politischen Bestrebungen

Muns politische Ansichten werden schon in den „Göttlichen Prinzipien“ dargelegt. Er lehnt den Kommunismus, aber auch die Demokratie ab. Nach seinen Ausführungen soll sich der Wille des Volkes von Natur aus zum Christentum neigen. Wenn sich die Geschichte ihrer Erfüllung nähert, dann muß die demokratische Regierung, die den Willen des Volkes vertritt, der „christlichen“ Regierungsform weichen. (160)

Wenn in einem Land folglich genügend Anhänger Muns leben, kann der Druck auf eine demokratische Regierung so verstärkt werden, daß diese sich letztlich der Ideologie der Vereinigungsbewegung beugen muß.

„Wir brauchen ein Minimum von 10.000 Mitgliedern in einem Land, damit die Wahren Eltern und die Vereinigungsbewegung ernst genommen werden.“ (161)

Die Demokratie ist für Mun kein politisches Ziel, sondern nur Mittel zum Zweck. Sie dient einzig dazu, als Vertreter der Abel-Seite den Kommunismus zu beseitigen. Den Individualismus der Demokratie lehnt Mun grundsätzlich ab. (162)

Mun versucht mit seiner Vereinigungsbewegung ein staatenähnliches, weltweites Gebilde zu errichten. Er verfügt über Grundbesitz (z.B. neben Immobilien und Anlagevermögen die „Heiligen Gründe“), eine Flagge (weiß mit rotem Symbol der Vereinigungsbewegung), die bei allen Auftritten Muns im Hintergrund geißt wird, ggfs. eine Hymne (es stünden ca. 8 der „Heiligen Songs“ zur Auswahl). Die Nation der „wahren Christen“ soll sein Staatsvolk sein.

Bei den „Heiligen Gründen“ handelt es sich nicht nur um religiöse Gebetsstätten, sondern um Grundstücke, die für die Vereinigungsbewegung aufgekauft werden sollen. Die genaue Lage zu den Nachbargrundstücken muß angegeben und die Unterlagen sollen an die nationalen Zentralen weitergeleitet werden. (163) Es ist zu vermuten, daß über den Landerwerb Einflußmöglichkeiten im kommunalen Bereich geschaffen werden sollen.

Günstig für die politischen Ambitionen Muns war in den frühen 60er Jahren seine fanatische Ablehnung des Kommunismus, die ihm wirtschaftliche Vorteile unter der koreanischen Regierung des Präsidenten Park verschaffte. Zu dieser Bevorzugung kam noch seine Freundschaft mit dem Gründer des koreanischen Geheimdienstes, der einer seiner frühesten Anhänger war. Der Fraser-Report schloß damals nicht aus, daß der koreanische Geheimdienst die Grundorganisation der Vereinigungsbewegung geplant hat und für seine Dienste nutzen wollte. Die Vereinigungsbewegung unterhielt zeitweise antikommunistische Ausbildungscamps für koreanische Führungskräfte, die von der Regierung Park beschickt wurden. (164)

Mun behauptet heute, daß er für die Einsetzung der koreanischen Präsidenten zuständig sei, da er der gottgewollte Führer Koreas sei. Alle Präsidenten mußten bei ihrer politischen Aufgabe versagen, weil sie nicht bereit waren mit ihm zusammen zu arbeiten. (165)

Eine der treibenden Kräfte im politischen Geschehen der Vereinigungsbewegung ist die oben schon erwähnte CAUSA (Confederation of Associations for the Unity of the Societies in the Americas), deren deutscher Zweig in Bonn ansässig ist.

CAUSA organisiert Seminare für Führungskräfte weltweit und propagiert ihre Philosophie des „Gottismus“ und der „Headwings“. Dies

bedeutet nichts anderes als die Vereinigungslehre in militanter Form ohne die Mythologie der „Göttlichen Prinzipien“. Unterorganisationen sind die studentische CARP-Vereinigung und das „Internationale Sicherheitskoncil“ (International Security Council). Während der jährlichen Treffen des ISC vereinen sich namhafte Vertreter aus militärischen und wirtschaftlichen Kreisen zur Einschätzung der politischen Weltsituation. (166)

CAUSA-Funktionäre versuchten u.a. in der Bundesrepublik eine eigene Partei zu gründen. Dies ist nicht gelungen. (167)

Mun und seine Funktionäre haben bis heute ganz gezielt versucht, Personen des öffentlichen Lebens für ihre Ziele einzuspannen. Am Rande der Veranstaltungen durch die Mun-Organisationen im wirtschaftlichen oder kulturellen Bereich ergaben sich immer Gelegenheiten, sich mit Präsidenten, Abgeordneten, Showgrößen oder sonst bekannten Personen zu einem Interview oder Fototermin zu stellen. (168) Der ehemalige Präsident der Vereinigten Staaten, Bush, und dessen Frau sind z.B. ständige Redner auf diesen Veranstaltungen und begleiteten Mun auch schon zu Vorträgen nach Japan. (169)

Die gewonnene Publicity nutzt Mun gegenüber der koreanischen Regierung, um seine Wichtigkeit in der westlichen Welt zu demonstrieren. Seine Anhänger macht er glauben, daß bereits viele Staatsoberhäupter seine Ideologie unterstützen und die vorausgesagten Änderungen der Gesellschaft sowie die Verwirklichung der Ziele der Vereinigungsbewegung kurz bevorstünden. (170)

IV. Organisationen der Vereinigungsbewegung und ihre Untergruppen

(Aufzählung in alphabetischer Reihenfolge; ein Anspruch auf Vollständigkeit besteht nicht, da stets neue Gründungen erfolgen)

A.R.W. - Assembly of World Religions, gegründet 1985, organisiert Tagungen, Konferenzen religiösen Inhalts, Untergruppe der I.R.F.

C.A.R.P. - Collegiate Association for the Research of Principles, Untergruppe der C.A.U.S.A., verbreitet die Lehre Muns an den Universitäten, versucht grundsätzlich Sitze in den Studentenparlamenten zu erringen

C.A.U.S.A. - Confederation of Associations for the Unity of the Societies of the Americas, gegründet 1980, setzt die politischen Ziele Muns in die Tat um; Hauptphilosophie ist der „Gottismus“ und „Headwing“, eine entmythologisierte Form der „Göttlichen Prinzipien“, organisiert den Söldnerersatz

C.W.R. - Council for the World's Religions, gegründet 1984, Untergruppe der I.R.F.

F.F.W. - Frauenförderung für den Weltfrieden, deutsche Abteilung gegründet 1992, Vereinigung der Frauen im Sinn der Vereinigungsbewegung unter der Führung der Wahren Mutter Mun

F.G.G. - Forum für Geistige Führung, Untergruppe der C.A.U.S.A. zur Sammlung politischer Kräfte

F.R.W. - Forum Religion und Weltgestaltung, gegründet 1984, veranstaltet in der Bundesrepublik Tagungen für religiös Interessierte, Untergruppe der I.R.F.

I.C.F. - International Cultural Foundation, gegründet 1968, Ziel ist die Schaffung einer neuen Weltkultur

I.C.U.S. - International Conference on the Unity of Sciences, organisiert Konferenzen, Seminare und Tagungen für Wissenschaftler und Politiker, die Teilnahmekosten trägt die Stiftung

I.O.W.C. - International One World Crusade -
gegründet 1972, Missionierungsorganisation, plant den Einsatz der Mitglieder bei Sammlungen und Demonstrationen

I.R.F. - International Religious Foundation,
gegründet 1963, organisiert Seminare und Veranstaltungen für Theologen

I.S.C. - International Security Council,
Untergruppe der C.A.U.S.A., Mitglieder sind namhafte Militärs aus der NATO oder den Verteidigungsministerien der Welt, Treffen dienen der Einschätzung der Weltsituation

P.W.P.A. - Professors World Peace Academy ,
gegründet 1973, im Vorstand befanden sich auch deutsche Professoren, Untergruppe der I.C.U.S.

R.Y.S - Religious Youth Service,
Einsatzprogramm für junge Leute bei sozialen Projekten, Untergruppe des I.R.F.

Die Aufzählung ist keineswegs vollständig. Sie soll lediglich die Vielschichtigkeit der Vereinigungsbewegung darstellen.

V. Verzeichnis der Fußnoten

- 1 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 821 zu „Munbewegung“
- 2 Minhoff/Lösch, S. 61; Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 821 zu „Munbewegung“
- 3 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“
- 4 San Myung Mun, Ein Prophet spricht heute, Kurzbiographie, S. 143 ff; Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“; Kim Young Oon, Vereinigungstheologie, Kurzbiographie, S. 254; Koch, Günter, Himmlische Soldaten, S. 145 ff
- 5 Sun Myung Moon, Ein Prophet spricht heute, S. 143 ff; Obst, Helmut, Neureligionen, Jugendreligionen, New Age, S. 270; Haupt, M. in: Erste Auskunft Sekten zur „Vereinigungskirche“, S. 190 ff
- 6 Lindner in Kehrler : S. 222; vgl. Vereinigungskirche e.V. „Gottes Herz heilen“, S. 8

- 7 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“
- 8 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“; Haupt, in: Erste Auskunft Sekten, S. 190 ff; Minhoff/Lösch, S. 66
- 9 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“; vgl. Bendrath u.a., Ein Messias aus Korea, S. 24
- 10 Minhoff/Lösch, S. 67
- 11 Minhoff/Lösch, S. 71; Koch, S. 147; Hak, Ja-Han Moon, Ansprache am 02.11.1993 in Frankfurt, in: Zeitenwechsel, S. 66
- 12 Haupt, in: Erste Auskunft Sekten, S. 190; Minhoff/Lösch, S. 68; Koch, Günter, Himmlische Soldaten - Die Legion des Sun Myung Moon, S. 145 ff
- 13 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“
- 14 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“; Minhoff/Lösch, S. 70;
- 15 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“; Koch, S. 145 ff; Haack, Unification Church Connections, S. 2 ff
- 16 Yamamoto, Puppet Master, S. 20; Obst, S. 274; Minhoff/Lösch, S. 71; Seel, in Becker/Schreiner, Wahn oder Glaube, S. 21; Sun Myung Mun, Christianity in Crisis, Vorwort, S. XII ff; Investigations of Korean-American Relations (Kurz : Fraser-Report), 21978, S. 72
- 17 Minhoff/Lösch, S. 71
- 18 Fraser-Report, S. 10; Robbins u.a. in: Horowitz, The Politics of Moon, S. 53; Karow, Yvonne, Bhagwan-Bewegung und Vereinigungskirche, S. 146
- 19 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 823 zu „Munbewegung“
- 20 Obst, S. 277; Yamamoto, S. 29; The Tradition, S. 68 ff
- 21 San Myung Moon, Christianity in Crisis, S. VII ff; Underwood, Barbara and Betty, S. 97; Kim, Young Oon, S. 261
- 22 vgl. Fraser-Report
- 23 San Myung Moon, Christianity in Crisis, S. XIII; Koch, S. 78 ff; Obst, S. 238; Heung Jin Nim, Victory of Love, S. 7
- 24 Minhoff/Lösch, S. 82; Gandow, Thomas, S. 104 ff
- 25 Hardin/Kuner, in: Kehrler, Das Entstehen einer neuen Religion, S. 131 ff
- 26 Hardin/Kuner, in: Kehrler, S. 131
- 27 Hardin/Kuner, in : Kehrler, S. 131 ff; Vereinsregister AG Frankfurt, VR 4612
- 28 Hardin/Kuner, in: Kehrler, S. 139 ff
- 29 Hardin/Kuner, in: Kehrler, S. 140 ff; vgl. Rosina, S. 32 ff
- 30 vgl. FN 26

- 31 Wahlpropagandamaterial der CARP
- 32 Hardin/Kuner, in: Kehrler, S. 129 ff
- 33 Minhoff/Lösch, S. 87
- 34 vgl. Minhoff/Lösch, S. 92
- 35 Sun Myung Mun: Ansprache zur Segnung am 25.08.1995; Gandow, in: Kehrner, S. 198 ff;
- 36 Hak, Ja-Han Moon in: Zeitenwechsel, S. 21 ff und S. 51 ff; epd-Hessen-Nassau vom 09.11.1993; Hak-Ja Han Mun, Ansprache zur Gründung der deutschen Abt. der Frauenföderation, 1992
- 37 Bischöfliches Ordinariat Rottenberg/Stuttgart u.a., Neue Heilsversprechungen, S. 42
- 38 vgl. Aufzählung in „Die Göttlichen Prinzipien“, S. 36 ff
- 39 vgl. „Vereinigungsprinzipien“, inoffizielle Übertragung von Albert Heitzinger, S. 18 ff
- 40 vgl. Die Göttlichen Prinzipien, S. 151 ff, S. 249
- 41 Die Göttlichen Prinzipien, S. 388 ff; Mun, The Future of Christianity, in: Christianity in Crisis, S. 72; Flasche, in: Kehrler, S. 126 ff
- 42 Die Göttlichen Prinzipien, S. 246 ff, S. 537 ff; Mun, God's Hope for Mankind und The Future of Christianity in: Christianity in Crisis, S. 26 ff und S. 93 ff; Flasche, in: Kehrler, S. 132
- 43 Die Göttlichen Prinzipien, S. 382 ff
- 44 Minhoff/Lösch, S. 61
- 45 Die Göttlichen Prinzipien, S. 239
- 46 Die Göttlichen Prinzipien, S. 222 ff, S. 537 ff; Mun, The Future of Christianity in: Christianity in Crisis, S. 94; Flasche, in: Kehrler, S. 135 ff; Mun, Vierzig Jahre Vereinigungskirche, in: Zeitenwechsel, S. 41/42
- 47 Yamamoto, S. 21 ff; The Tradition, Book One, S. 98; Obst, S. 275; Kim, Young Oon, S. 260
- 48 Mun, The Future of Christianity in: Christianity in Crisis, S. 94; vgl. Satzung der „Vereinigungskirche e.V.“ AG Frankfurt, VR 7640; Mun, Zeitenwechsel, S. 42 ff
- 49 Synkretismus = Vermischung verschiedener religiöser Elemente zu einem Glauben
- 50 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 zu „Munbewegung“
- 51 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 a.a.O.
- 52 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 a.a.O.
- 53 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 a.a.O.; Obst, S. 269 ff; Lindner, in: Kehrler, S. 231 ff

- 54 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 822 a.a.O.
- 55 Minhoff/Lösch, S. 94
- 56 The Tradition, S. X
- 57 Mun, God's Hope for Man in Christianity in Crisis, S. 9; a.a.O. The Future of Christianity, S. 80
- 58 Mun, Zeitenwechsel, S. 41 ff
- 59 Die Göttlichen Prinzipien, S. 238
- 60 vgl. Die Göttlichen Prinzipien, S. 61, S. 63
- 61 Gandow, S. 76; Hartwig, A. Magisterarbeit, S. 43
- 62 vgl. Gandow, S. 75 ff; Karow, S. 137; Sontag, S. 163, S. 168
- 63 Lindner in Kehrler, S. 222 ff; Karow, S. 138
- 64 vgl. Fraser-Report, S. 42; Mun in: Christianity in Crisis, S. 39, S. 128; The Tradition, S. 38
- 65 vgl. Karow, S. 199; Die Göttlichen Prinzipien, S. 122, S. 162; Sontag, S. 175
- 66 Die Göttlichen Prinzipien, S. 151; Sontag, S. 162, Mun in Christianity in Crisis, S. 157
- 67 vgl. Karow, S. 217/218
- 68 von Hammerstein, Ich war ein Munie, S. 19; Hassan, S. 130 ff
- 69 vgl. Karow, S. 162; Obst, S. 292; Bromley in: Kehrler, S. 121; Underwood, S. 104; Hassan, S. 104 ff, S. 134 ff
- 70 Karow, S. 137 ff, S. 158, S. 182
- 71 vgl. Hartwig, A. Magisterarbeit, S. 59; Neue Perspektiven, Nr. 46, Juni/Juli 1996, S. 9
- 72 vgl. Underwood, S. 162, S. 191; Yamamoto, S. 66
- 73 vgl. Scharff in Underwood, S. 156; Die Göttlichen Prinzipien, S. 108 ff
- 74 Die Göttlichen Prinzipien, S. 235 und S. 312 ff
- 75 Minhoff/Lösch, S. 72
- 76 vgl. v.Hammerstein, S. 37; Underwood, S. 75 ff; Yamamoto, S. 67; ARD „Report“, Jan. 96
- 77 vgl. Fraser-Report, S. 42, S. 52, S. 64
- 78 Fraser-Report, S. 13
- 79 Karow, S. 160; Kim, Young Whi, S. 54
- 80 vgl. Hassan, S. 42 ff
- 81 v. Hammerstein, S. 15, S. 38; Underwood, S. 42 ff, S. 61 ff
- 82 vgl. Underwood, S. 58 ff
- 83 vgl. Fraser-Report, S. 10 ff, S. 37 und 49; Hassan, S. 24; vgl. Underwood, S. 144, S. 162, S. 251;

- 84 Fraser-Report, S. 82 ff
- 85 Rd.brief vom 08.12.1993, S. 25
- 86 Amtsgericht Düsseldorf, HRB 14720
- 87 Underwood, S. 61
- 88 Die Göttlichen Prinzipien, S. 151; Sontag, S. 162; Mun, Christianity in Crisis, S. 157
- 89 vgl. Rosina, S. 165 ff; Karow, S. 45, S. 53; Hassan, S. 105; Seel in Becker/Schreiner, Wahn oderS. 32 ff
- 90 vgl. The Tradition, Book One; Gandow, S. 58
- 91 The Tradition, Book One, S. 85
- 92 vgl. The Tradition, S. 8 ff
- 93 vgl. Mun, Christianity in Crisis, S. 157
- 94 vgl. Mun, The Tribal Messiah; Neue Perspektiven, Magazin, Nr. 46, Juni/Juli 1996, S. 13
- 95 Obst, S. 319
- 96 vgl. Blachmann „Mit Mun zum Honeymoon“, 1996
- 97 vgl. Rosina, S. 125 ff
- 98 AG Hamburg, Az.: 289 F 232/84
- 99 Gandow, S. 65
- 100 vgl. Blachmann, Mit Moon zum Honeymoon; KFW, Im Reich des Bösen; Kehler, S. 183; Lindner in : Kehler, S. 225; Feige in : Kehler, S. 242;
- 101 Vereinigungskirche e.V. , Segen der Liebe, S. 28/29
- 102 Gandow, S. 68 ff
- 103 vgl. Hak-Ja Han Mun, Ansprache zur Gründung der „Frauenföderation für den Weltfrieden“ Deutschland,1992; Obst, S. 319 ff
- 104 Rd.brief Österreich vom 08.12.1993, S. 26
- 105 vgl. Gandow, S. 70 ff; Eimuth, S. 168 ff
- 106 vgl. Underwood, S. 156
- 107 Minhoff/Lösch, S. 91 ff
- 108 Handbuch Religiöse Gemeinschaften, S. 832
- 109 vgl. Rd.brief Österreich, Witnessing vom 21.03. bis 12.04.1993, S. 21
- 110 Weltblick, 5.Jg., Nr.2, S. 11
- 111 Rd.brief der Vereinigungsbewegung Österreich vom 08.12.1993, S. 21
- 112 Ansprache Muns und seines Sohnes am 23.08.1992 zum 1.Weltkultur und Sportfestival; vgl. Broschüre der Senatsverwaltung für Jugend und Familie , Berlin, S. 72; Werbebroschüre der CARP 1988
- 113 Brief des ehem. CARP-Vorsitzenden D. Schmidt
- 114 Vereinssatzung CARP, Amtsgericht Bonn VR 4707
- 115 vgl. die Berichte von Hassan, Underwood und v.Hammerstein
- 116 vgl. v. Hammerstein, S. 31; Underwood, S. 10; Hassan, S. 38
- 117 vgl. Underwood, S. 93 ff
- 118 vgl. Hassan, S. 28, S. 93 ff; Yamamoto, S. 64
- 119 vgl. Rosina, S. 93 ff; Underwood, S. 58 , S. 157
- 120 vgl. Underwood, S. 61
- 121 Underwood, S. 166; Hassan, S. 104 ff
- 122 KFW, Im Reich des Bösen
- 123 KFW, Im Reich des Bösen, Manuskript, S. 7
- 124 vgl. Karow, S. 157, S. 213 ff, S. 266 ff; vgl. Hassan, S. 86 ff, 95 ff, S. 109; Wnuk-Lipinski, in: Becker/Schreiner, Heil oder Unheil, S. 69 ff
- 125 Quelle bekannt
- 126 Die Göttlichen Prinzipien, S. 547
- 127 Die Göttlichen Prinzipien, S. 529
- 128 Heung Jin Nim, Victory of Love, S. 8 ff
- 129 z.B. Hassan, S. 29
- 130 z.B. Gandow, S. 102
- 131 Fraser-Report, S. 5 ff
- 132 Fraser-Report, S. 40
- 133 Fraser-Report, S. 5
- 134 KFW, Im Reich des Bösen, Manuskript, S. 6
- 135 Robbins in Horowitz, S. 53; Fraser-Report, S. 10; Freed, S. 41
- 136 vgl. HRB-Auszüge der Fa. Saeilo und Heiligenstaedt; Gießener Anzeiger v. 30.11. 91; Gießener Allgemeine vom 25.06. 94 und 16.07.94; Top-Business 1/95 „Manager als Sekten-Soldaten“; KFW, Manuskript, S. 5
- 137 vgl. Gasper/Müller/Valentin, S. 706; KFW, Manuskript, S. 5
- 138 Die Göttlichen Prinzipien, S. 574; The Tradition, Book One, S. 36 ff (Gelöbnis sollte koreanisch gesprochen werden); a.a.O. S. 37; Fraser-Report, S 4 ff
- 139 vgl. Fraser-Report, S. 110 ff
- 140 Koch, S. 193 ff; IPS Dritte Welt Nachrichtenagentur vom Januar und Juni 96
- 141 Fraser-Report, S. 103, S. 128; FAZ vom 28.09.90 „Mit dem Geld der Gläubigen...“
- 142 Kang, Gin-Won Dr., Marktstrategien erfolgreicher koreanischer Unternehmen auf den Weltmärkten, 1993
- 143 FAZ, 28.09.90 „Mit dem Geld der Gläubigen...“

- 144 Fraser-Report, S. 4
- 145 Fraser-Report, S. 33 ff; Hassan, S. 29; Koch, S. 173
- 146 KFW, Im Reich des Bösen, Manuskript, S. 6
- 147 Amtsgericht Frankfurt, HRB 38451
- 148 vgl. FN 148
- 149 Berliner Dialog, 3/1996, S. 35
- 150 Fraser-Report, S. 7, Wiedergabe eines Ausspruchs Muns
- 151 vgl. IPS, Juni 1996
- 152 FAZ, 28.09.90 und 26.07.1994; Wnuk-Lipinski in Becker/Schreiner, Heil oder Unheil, S. 80; Obst, S. 289
- 153 Obst, S. 293; FAZ vom 28.09.90; Gemeinschaft vom Heiligen Geist, Eine Vision für den Weltfrieden, S. 30
- 154 vgl. Fraser-Report, S. 21 ff, S. 37, S. 81 ff, S. 89 und S. 105 ff
- 155 vgl. Vereinsregistrauszug PWPA/PWPA-E; Hassan, S. 75; Gandow, S. 93 ff; Mun, Zeitenwechsel, S. 47; Fraser-Report, S. 18, S. 46; Neue Perspektiven, Nr. 46, Juni/Juli 1996, S. 13
- 156 vgl. Mun, Zeitenwechsel, S. 48; Haack, UCC, S. 47; Obst, S. 284; Fraser-Report, S. 17 ff
- 157 Rd.brief der Vereinigungsbewegung Nr. 35 vom Sept./Okt. 1993, S. 6
- 158 Fraser-Report, S. 6
- 159 Fraser-Report, S. 4 ff
- 160 Die Göttlichen Prinzipien, S. 135 ff, S. 468 ff
- 161 Rd.brief vom 08.12.1993; vgl. Kim, Young Whi, Guidance for Heavenly Traditions, S. 323 :“...because policy in the democratic world is decided by numbers. Leaders and therefore policies are chosen through popular vote.“
- 162 vgl. Hassan, S. 111
- 163 The Tradition, S. 45 ff, S. 59 ff, S. 73 ff
- 164 Fraser-Report, S. 73 ff
- 165 Mun, Tribal Messias, S. 11; vgl. Heung Jin Mun, The Victory of Love, S. 5
- 166 Minhoff/Lösch, S. 290 ff; Gandow, S. 94; Obst, S. 284
- 167 Quick, 25.01.90 „Schönhubers seltsame Vertraute“
- 168 Fraser-Report, S. 6
- 169 IPS Nachrichtenagentur, Juni 1996
- 170 Fraser-Report, S. 64 ff; S. 128 ff

VI. Literaturverzeichnis

a) Literatur der Vereinigungsbewegung

- C.A.R.P.: Propagandamaterial aus dem Wahlkampf 1976
- Die Gemeinschaft vom Heiligen Geist für die Vereinigung des Weltchristenheit: Eine neue Vision für den Weltfrieden, 1. Auflage 1988
- Frauenföderation für den Weltfrieden: Gründungserklärung, Ansprache Frau Hak-Ja Han Muns am 11.11.1992
- H.S.A.U.W.C (Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity): Christianity in Crisis- New Hope - Rev. Sun Myung Moon, New York 1986
- H.S.A.U.W.C.: The Tradition - Book One, 2. Auflage ,Canaan Foundation 1993
- Heitzinger, Albert: Überblick über die Vereinigungsprinzipien, inoffizielle Übertragung aus dem Amerikanischen, Signale Druck- und Verlagsgesellschaft, o. Jg.
- Kim, Young Oon: Vereinigungstheologie - Eine Annäherung, 1. deutsche Auflage, Kando-Verlag 1995
- Kim, Young Whi: Guidance for Heavenly Traditions, Volume 2, 1. Auflage, Kando Verlag 1985
- Moon, Heung Jin: The Victory of Love, H.S.A.U.W.C. 1992
- Moon, Sun Myung: The Tribal Messiah, Holy Spirit Association 1994
- Moon, Sun Myung: The True Family and I, Ansprache am 25.08.1995 in Seoul
- Mun, Hyo-Jin: Ansprache zur Eröffnung des 8. Hanmadang Sports Festival, Vereinigungskirche e.V.
- Mun, San Myung: Die Göttlichen Prinzipien, 2. Auflage, Gesellschaft zur Vereinigung des Weltchristentums Frankfurt 1973
- Mun, San Myung: Die neue Zukunft des Christentums, 2. deutsche Auflage, Vereinigungskirche e.V. 1977
- Mun, San Myung: Ein Prophet spricht heute- Die Worte des Rev. San Myung Mun, 1. deutsche Auflage, Vereinigungskirche e.V. Frankfurt März 1976
- Neue Perspektiven, Magazin der Vereinigungsbewegung, Nr. 46, Juni/Juli 1996

- Rundbrief der Vereinigungsbewegung Nr. 35, Sept./Okt. 1993
- Rundbrief der Vereinigungsbewegung Österreich vom 08.12.1993
- Vereinigungskirche e.V.: Zeitenwechsel - Vier Ansprachen der Wahren Eltern, Kando-Verlag 1995
- Vereinigungskirche e.V.: Gottes Herz heilen - Lebensbeschreibung Muns, 1995

b) Literatur über die Vereinigungsbewegung

- Becker, Kurt E., Schreiner, Hans-Peter: Heil oder Unheil ?-Beispiel: Vereinigungskirche San Myung Moons, Pfälzische Verlagsanstalt 1982
- Becker, Kurt E., Schreiner, Hans-Peter: Wahn oder Glaube- Alternativen zur Industriegesellschaft ?, Fackelträger-Verlag 1980
- Bendrath, Detlef u.a.: Ein Messias aus Korea ? 2. Auflage, Evangelischer Presseverband für Bayern 1992
- Freed, Josh: Moonwebs - Journey into the Mind of a Cult, Dorste Publishing, Toronto 1980
- Gandow, Thomas: Mun-Bewegung - CARP, CAUSA und „Vereinigungskirche“ des San Myung Mun, 1. Auflage, Evangelischer Presseverband für Bayern 1993
- Haack, Friedrich-Wilhelm: Jesus Christus und/oder San Myung Mun, 1. Auflage, Evangelischer Presseverband für Bayern 1981
- Hammerstein von, Oliver: Ich war ein Munie - Tagebücher und Berichte einer Befreiung aus der Mun-Sekte, dtv 1980
- Horowitz, Irving Louis: Science, Sin and Scholarship - The Politics of Reverend Moon and the Unification Church, 2. Auflage, Alpine Press 1979
- Karow, Yvonne: Bhagwan-Bewegung und die Vereinigungskirche - Religions- und Selbstverständnis der Sannyasins und der Munies, Verlag Kohlhammer 1990
- Katholisches Filmwerk: Im Reich des Bösen - Der Kreuzzug der Munsekte, Dokumentation 1991
- Kehrner, Günter (Hrsg.): Das Entstehen einer neuen Religion - Das Beispiel der Vereinigungskirche, Kösel-Verlag München 1981
- Kirchner, Wolfgang: Denken heißt zum Teufel beten - Roman über eine Jugendsekte, Rowohlt Taschenbuchverlag 1994
- Koch, Günter: Himmlische Soldaten- Die Legion des Sun Myung Moon, 2. erweiterte Auflage, Militärverlag der Deutschen Demokratischen Republik, Berlin 1989

- Minhoff Christoph, Lösch, Holger: Neureligiöse Bewegungen- Strukturen, Ziele, Wirkungen, 2. aktualisierte Auflage, Bayerische Landeszentrale für Politische Bildungsarbeit 1994
- Obst, Helmut: Neureligionen, Jugendreligionen, New Age, 1. Auflage, Verlags-Anstalt Berlin 1991
- Sontag, Frederick: Sun Myung Moon and the Unification Church, Pathenon Press 1977
- Underwood, Barbara und Betty: Im Bann des Himmels - Erfahrungen von Mutter und Tochter über vier Jahre Mun-Sekte, deutsche Erstausgabe, dtv 1985
- Yamamoto, J. Isamu: The Puppet Master- An Inquiry into Sun Myung Moon and the Unification Church, Inter-Varsity Christian Fellowship, USA 1977

c) Weiterführende Literatur, Lexika und Zeitungen

- Arbeitskreis Neue Jugendreligionen: Erste Auskunft „Sekten“ - Okkultismus, Esoterik, Neue Religiosität, 1. Auflage, Verlagsgesellschaft Benno-Bernward-Morus 1994
- ARD-Magazin „Report“ im Januar 1996
- Blachmann: „Mit Mun zum Honeymoon“, Sendung im ZDF-Magazin „37“ vom 23.01.1996
- Frankfurter Allgemeine Zeitung
- Gasper, Müller, Valentin: Lexikon der Sekten, Sondergruppen und Weltanschauungen, Neuauflage, Verlag Herder 1995
- Giessener Allgemeine , Tageszeitung
- Giessener Anzeiger, Tageszeitung
- Haack, Friedrich-Wilhelm: Unification Church Connections - Organisationen, Firmen, Aktivitäten und Begriffe des Mun-Imperiums, München 1989
- Hartwig, Annegret, AAO-Bewegung und Vereinigungskirche, Magisterarbeit an der Freien Universität Berlin, Institut für Religionswissenschaft, 1994
- Handbuch Religiöse Gemeinschaften: Freikirchen, Sondergemeinschaften, Sekten, Weltanschauungen, missionierende Religionen des Ostens, Neureligionen, Psycho- Organisationen für den VELKD-Arbeitskreis, 4. völlig überarbeitete und erweiterte Auflage, Gütersloher Verlagshaus 1993
- IPS - Dritte Welt Nachrichtenagentur

- Kang Dr., Gin-Won: Marketingstrategien erfolgreicher koreanischer Unternehmen auf den Weltmärkten, Schriftenreihe des Instituts für betriebswirtschaftliche Forschung an der Universität Zürich, Band 73, 1993
- Quick, Wochenmagazin
- Rosina, Hans-Joachim: Faszination und Indoktrination - Beobachtungen zu psychischen Manipulationspraktiken in totalitären Kulturen (Jugendreligionen), Arbeitsgemeinschaft für Religions- und Weltanschauungsfragen München 1989
- Klöcker, Michael, Tworuschka, Udo: Religionen in Deutschland, Olzog Verlag 1994
- Klosinski, Gunther: Was Sekten für Jugendliche so attraktiv macht, Beck'sche Verlagsbuchhandlung 1996
- Müller, Ulrich, Lehmkuhler, Anne Maria: Zwischen Allmacht und Ohnmacht - Untersuchungen zum Welt-, Gesellschafts- und Menschenbild von Neureligiösen Bewegungen, 2. neu bearbeitete Auflage, Roderer Verlag 1993
- STERN, Magazin vom 07.06.1984, „Barbie organisiert den Staatsstreich - eine Killerkarriere(5)“
- STERN, Nr. 25 aus 1975, „Terrortruppe aus Fernost“ - Spitzel des KCIA im Ruhrgebiet
- Top-Business, Monatsmagazin
- U.S. House of Representatives: Investigation of Korean-American Relations - Report of the Subcommittee on International Affairs of the House of Representatives, 31.10.1978 - Kurzform: Fraser-Report in der teilweisen Übersetzung durch den Landtag des Landes Nordrhein-Westfalen
- Wiebus, Hans-Otto: Lexikon Jugendkulte- Esoterik, New Age, Satanismus, 1. Auflage, Carlsen Verlag Hamburg 1995

VII. Ansprechstellen - Hilfe für Betroffene

1) Staatliche Stellen:

Ministerium für Kultus und Sport
Baden-Württemberg
Schloßplatz 4
70173 Stuttgart
Tel. 0711/279-2872

Bayerisches Staatsministerium für
Arbeit und Sozialordnung, Familie,
Frauen und Gesundheit
80792 München
Tel. 089/1261-1312

Bayerisches Staatsministerium für
Unterricht, Kultur, Wissenschaft
und Kunst
Salvatorstraße 2
80333 München
Tel. 089/2186-2261

Senatsverwaltung für
Jugend und Familie
Am Karlsbad 8-10
10785 Berlin
Tel. 030/2654-2619

Ministerium für Wissenschaft,
Forschung und Kultur des
Landes Brandenburg
Friedrich-Ebert-Str. 4
14467 Potsdam
Tel. 0331/866-4961

Senator für Frauen, Gesundheit,
Jugend, Soziales und Umweltschutz
der Freien Hansestadt Bremen
Bahnhofsplatz 29
28195 Bremen
Tel. 0421/361-4749

Freie und Hansestadt Hamburg
Behörde für Schule, Jugend und
Berufsbildung
-Amt für Jugend-
Hamburger Straße 31
22083 Hamburg
Tel. 040/29188-3901

Hessisches Ministerium für Umwelt,
Energie, Jugend, Familie und
Gesundheit
Dostojewskistraße 4
65187 Wiesbaden
Tel. 0611/817-3339

Kultusministerium des Landes
Mecklenburg-Vorpommern
Werderstraße 124
19048 Schwerin
Tel. 0385/588-7170/7510

Niedersächsisches Frauen-
ministerium
Hamburger Allee 26-30
30161 Hannover
Tel. 0511/120-8843

Ministerium für Arbeit, Gesundheit
und Soziales des Landes
Nordrhein-Westfalen
Horionplatz 1
40190 Düsseldorf
Tel. 0211/837-3494

Ministerium für Kultur, Jugend,
Familie und Frauen des
Landes Rheinland-Pfalz
Mittlere Bleiche 61
55116 Mainz
Tel. 06131/164382

Ministerium für Frauen, Arbeit,
Gesundheit und Soziales
des Saarlandes
Franz-Josef-Röder-Straße 23
66119 Saarbrücken
Tel. 0681/501-3118

Sächsisches Staatsministerium
für Kultus
Caroloplatz 1, Westflügel
01097 Dresden
Tel. 0351/564-2715

Ministerium für Arbeit, Soziales und
Gesundheit des Landes Sachsen-
Anhalt
Seepark 5-7
39116 Magdeburg
Tel. 0391/567-4010

Die Ministerpräsidentin des Landes
Schleswig-Holstein
Informations- und Dokumentations-
stelle
"Sekten und sektenähnliche
Vereinigungen"
Adolfstraße 48
24100 Kiel
Tel. 0431/988-1880

Ministerium für Soziales und
Gesundheit des Landes Thüringen
Werner-Seelenbinder-Straße 6
99096 Erfurt
Tel. 0361/3472-230

Bundesministerium für Familie,
Senioren,
Frauen und Jugend
Rochusstr. 8-10
53123 Bonn
Tel. 0228/930-2864/2862

2) Kirchliche und private Stellen

(Angesichts der Vielfalt von Beratungsstellen erhebt diese Auflistung
keinen Anspruch auf Vollständigkeit.)

Baden-Württemberg

ABI Aktion Bildungsinformation
e.V.
Dr. Helga Lerchenmüller
Alte Poststr. 5
70173 Stuttgart
Tel. 0711-299335

Ev. Zentralstelle für
Weltanschauungsfragen (EZW)
Dr. Hemminger/Dr. Werner Thiede
Hölderlinplatz 2a
70193 Stuttgart
Tel. 0711/2262281 od. 82

Bischöfl. Ordinariat, Ref.
Religions- und Weltanschauungs-
fragen
Susanne Beul
Pf. 9
72101 Rottenburg/Neckar
Tel. 07472/169586-419

EBIS e.V. Eltern- und
Betroffeneninitiative
Liselotte Wenzelburger-Mack
Pf. 30 oder Hölderlinweg 10
72663 Großbettlingen
Tel. 07022/42411

Weltanschauungsbeauftragter der
Ev. Landeskirche Baden,
Prof. Dr. Jan Badewien

Vorholzstraße 7
76137 Karlsruhe
Tel. 0721/9349-290

Erzbischöfliches Seelensorgeamt
Dipl. Theol. Albert Lampe
Okenstr. 15
79108 Freiburg
Tel. 0761/5144136

Bayern

Elterninitiative zur Hilfe gegen
seelische Abhängigkeit und
religiösen Extremismus e.V.
Marsstr. 19 II
80335 München
Tel. 089/5595612

Beauftragter für Sekten- und
Weltanschauungsfragen der Ev.-
Luth. Kirche in Bayern
Dr. Wolfgang Behnk
Marsstr. 19 II
80335 München
Tel. 089/5595612

Sektenbeauftragter der Erzdiözese
München und Freising
Hans Liebl
Dachauer Str. 5/V
80335 München
Tel. 089/5458130

Beauftragter der Ev.
Reformierten Kirche in Bayern
Norbert Müller
Kurt-Eisner-Str. 50
81735 München
Tel. 089/674263

Diözese Augsburg
Beratungsstelle für Religions-
und Weltanschauungsfragen
Hubert Kohle
Kappelberg 1
86150 Augsburg
Tel. 0821/3152211

Beauftragter für Sekten- und
Weltanschauungsfragen der
Diözesen Bamberg und Eichstätt
Dipl.Theol. Ludwig Landhammer
Obstmarkt 28
90403 Nürnberg
Tel. 0911/204337

Beauftragter der Ev. Luth.Kirche
in Bayern für religiöse und
geistige Strömungen
Pfr. Bernhard Wolf
Neuendettelsauer Str. 4
90449 Nürnberg
Tel. 0911/678578

Ref. für Religions- und
Weltanschauungsfragen
Herr Martin Göth
Inbruckgasse 13a
94032 Passau
Tel. 0851/393366

Kath. Sektenbeauftragter
OstR Matthias Rehl
Artur-Landgraf-Straße 33
96049 Bamberg
Tel. 0951/54450

Berlin

Evangelische Zentralstelle für
Weltanschauungsfragen (EZW),
Dr. Michael Nüchtern
Auguststraße 80
10117 Berlin
Tel. 030/28395-211

KASW-Berlin (Kath. Arbeitskreis)
c/o Dominikanerkloster
St. Paulus
Pater Klaus Funke
Oldenburger Straße 46
10551 Berlin
Tel. 030/3957097(98)

Beauftragter für Sekten- und
Weltanschauungsfragen
der Ev. Kirche in
Berlin Brandenburg
Pfr. Thomas Gandow
Heimat 27
14165 Berlin
Tel. 030/8157040

Eltern- und Betroffeneninitiative
gegen psychische Abhängigkeit
für geistige Freiheit e.V.
Pfr. Thomas Gandow
Heimat 27
14165 Berlin
Tel. 030/8183211

Brandenburg

Arbeitskreis für Neue Religiöse
Gemeinschaften
W. Brummert
Franz-Mehring-Str. 4
15230 Frankfurt/Oder
Tel. 0335/22769

Bremen

Sektenberatung Bremen e.V.
Bernhard Brünjes
Postfach 101 543
28015 Bremen
Tel. 04205/1609

Ev. Beauftragter für Sektenfragen
Pastor Helmut Langel
Heymelstr. 35
28359 Bremen
Tel. 0421/231991

Hamburg

Beauftragte der Nordelbischen
Ev.-Luth. Kirche f. Hamburg
Pastorin Dr. Gabriele Lademann-
Priemer
Kreuselstr. 6
20095 Hamburg
Tel. 040/327848

Arbeitsbereich Weltanschauungen
und religiöse Gruppierungen,
Arbeitsgemeinschaft Kinder- und
Jugendschutz Hamburg e. V.
Margaretenstr. 41
20357 Hamburg
Tel. 040/4395118

Beauftragter für Jugendseelsorge im
Nordelbischen Jugendpfarramt
Sprengl
Pastor Jörn Möller
Hirschgraben 25
22089 Hamburg
Tel. 040/2518207

Hessen

Beauftr. für Sekten-,
Weltanschauungs- und Islamfragen
der Ev. Kirche von
Kurhessen-Waldeck
Pfr. Eduard Trenkel
Pf. 410260
34114 Kassel
Tel. 0561/3083243

Ev. Beauftr. für Sekten- und
Weltanschauungsfragen
Pfr. Hans-Dieter Stolze
Mauerstr. 15
34117 Kassel
Tel. 0561/14916

Beauftragter der Ev. Kirche für
Sekten-, Weltanschauungs- und
Islamfragen
Pfr. Eduard Trenkel
Wilhelmshöher Allee 330
34131 Kassel
Tel. 0561/9378-243

Beauftragter für Sekten- und
Weltanschauungsfragen
Pfr. Ferdinand Rauch
36041 Fulda
Tel. 0661/83-980

SINUS-Sekten-Information und Selbsthilfe Hessen-Thüringen
Kurt-Helmuth Eimuth/Angelika Christ
Rechneigrabenstr. 10
60311 Frankfurt/Main
Tel. 069/92105-634

Ev. Arbeitsstelle für Religions- und Weltanschauungsfragen
Dipl.Päd. Kurt-Helmuth Eimuth
Rechneigrabenstr. 10
60311 Frankfurt/Main
Tel. 069/92105-630

Der Beauftragte für religiöse Gemeinschaften und Weltanschauungsfragen der Ev. Kirche in Hessen und Nassau,
Pfarrer Dr. Fritz Puth
Elisabethenstr. 51
64283 Darmstadt
Tel. 06151/175437

Mecklenburg-Vorpommern

Pfr. Friedrich von Kymmel
Dorfstr. 50
17406 Morgenitz/Usedom
Tel. 038372/70251

EBI Eltern- und Betroffeneninitiative
Astrid Hisserich, c/o Jugendamt
Anklamer Str. 15/16
17489 Greifswald
Tel. 03834/68338

Beauftragter der Ev. Landeskirche Pommerns
Superintendent Reinhold Garbe
Wolgaster Str. 6
17509 Wusterhusen
Tel. 038354/22110

Amt für Gemeindedienst der Ev. Luth. Landeskirche Mecklenburgs
Landespastor Mattias Kleiminger
Hansenstr. 5
18273 Güstrow
Tel. 03843/63964

Beauftragter für Sekten- und Weltanschauungsfragen des Erzbistums Hamburg für den Bereich des Erzbischöflichen Amtes Schwerin, Pfarrer Michael Sobania
Niels-Stensen-Weg 1
23936 Grevesmühlen
Tel. 03881/2324

Niedersachsen

Landeskirchlicher Beauftragter für Sekten- und Weltanschauungsfragen
Pfr. Rainer Schumann
Wilhelmstr. 27
26121 Oldenburg
Tel. 0441/16237 oder 26854

Sekten-Info-Rauderfehn e.V., Elterninitiative gegen den Mißbrauch der Religion, Heinz-Dieter Büchte,
Pastor Bernd Brandt
Postfach 1104
26811 Rauderfehn
Tel. 04952/82140

Beauftragter für Sekten- und Weltanschauungsfragen
Pastor Johannes Göhler
Am Osterkamp 5
27624 Ringstedt
Tel. 04708/2874

Beauftragter für Weltanschauungsfragen der Hannoverschen Ev. Landeskirche
Pastor Wilhelm Knackstedt
Postfach
30002 Hannover
Tel. 0511/1241-414 oder 452

Niedersächsische Elterninitiative gegen den Mißbrauch der Religion e.V.
Archivstraße 3
30169 Hannover
Tel. 0511/1241-414

Bischöfl. Generalvikariat
Hildesheim, Referat Sekten- und Weltanschauungsfragen
Dipl. Päd. Marion Hiltermann
Dornhof 18-21
31134 Hildesheim
Tel. 05121/307337

Beauftragter der Selbständigen
Ev. Luth. Kirche
Pastor Hinrich Brandt
Lange Str. 84
31552 Rodenberg
Tel. 05723/3579

Landeskirchenamt der Ev. Luth. Landeskirche Schaumburg-Lippe
Herderstr. 27
31675 Bückeburg
Tel. 05722/25021

Beauftragter für Weltanschauungsfragen der Ev. Kirche Göttingen
Pastor Ingolf Christiansen
Albanikirchhof 1a
37073 Göttingen
Tel. 0551/59765

Sektenbeauftragter der Ev. Luth. Landeskirche in Braunschweig,
Propst Armin Kraft
Schützenstraße 23
38100 Braunschweig
Tel. 0531/4718-27

Bischöfl. Generalvikariat Osnabrück
Arbeitsstelle „Neue Religionen“
Ludger Plogmann
In den Sandbergen 27
49808 Lingen
Tel. 0591/64967

Elterninitiative-Neue religiöse Bewegungen
Anneliese Friedrichs
An der Blankenburg 14
49078 Osnabrück
Tel. 0541/42191

Nordrhein Westfalen

Arbeitskreis Sekten e.V., Verein zur Bekämpfung geistiger und seelischer Abhängigkeit
Auf der Freiheit 25
32052 Herford
Tel. 05221/5998(57)

Beauftragter der Lippischen Landeskirche
Pfr. Klaus Fitzner
Paulsenstr. 7
32825 Blomberg-Lippe
Tel. 05235/7308

Erzbischöfl. Generalvikariat
Paderborn
StR i.K. Roland Gottwald
Domplatz 3
33098 Paderborn
Tel. 05251/125468

Volksmissionarisches Amt der
ev. Kirche im Rheinland,
Beauftragter für Sekten- und
Weltanschauungsfragen
Pfr. Joachim Keden
40479 Düsseldorf
Tel. 0211/3610246

Artikel 4, Initiative für
Glaubensfreiheit e.V.
Walter Krappatsch
Postfach 101202
44712 Bochum
Tel. 02325/60442

SEKTEN-INFO Bochum
Verein für Jugend- und
Sozialarbeit
Rottstr. 24
44809 Bochum
Tel. 0234/578156

Sekten-Info-Essen e.V.
Heide Marie Cammanns
Rottstr. 24
45127 Essen
Tel. 0201/234646(48)

Bischöfliches Jugendamt Essen,
Informationsstelle destruktive Kulte,
Klaus Gerhards
Burgplatz 3
45127 Essen
Tel. 0201/2204280

Bischöfl. Generalvikariat
Münster, AK Sekten- und
Weltanschauungsfragen
Pf. 1366
48135 Münster
Tel. 0251/495543

Erzbistum Köln
Abt. Jugendseelsorge
Werner Höbsch
Marzellenstr. 32
50606 Köln
Tel. 0221/1642313

Informations- und Dokumentations-
zentrum Sekten/Psychokulte (IDZ)
bei der AJS,
Jürgen Hilse/Beate Roderigo
Poststr. 15-23
50676 Köln
Tel. 0221-9213920

KIDS-Kinder in destruktiven
Sekten e.V.
Jutta Birlenberg
Bogenstraße 11
51375 Leverkusen
Tel. 0214/55760

Elterninitiative zur
Wahrung der geistigen Freiheit e.V.
Ursula Zöpel
Geschwister-Scholl-Str. 28
51377 Leverkusen
Tel. 0214/58372

Bischöfliches Generalvikariat,
Referat Sekten- und
Weltanschauungsfragen
Dr. Hermann-Josef Beckers
Klosterplatz 7
52062 Aachen
Tel. 0241-452419-374

Arbeitskreis Sekten-Okkultismus-
New Age, Ev.Jugendbüro
Adenauerallee 37
53113 Bonn
Tel. 0228/2679656-54

Zentralstelle Pastoral-
Kath. Sektenbeauftragter
Hans Gasper
Kaiserstr. 163
53113 Bonn
Tel. 0228/103230

Beauftragter für Sekten- und
Weltanschauungsfragen der Ev.
Kirche von Westfalen
Pfr. Dr. Rüdiger Hauth
Röhrchenstr. 10
58452 Witten/Ruhr
Tel. 02302/910100

Kath.-Sozialethische
Arbeitsstelle e.V., Referat für
Sekten- und Weltanschauungsfragen
Harald Baer
Postfach 1667
59071 Hamm
Tel. 02381/8768(69)

Rheinland-Pfalz

Bischöfl. Generalvikariat Trier
Ref. für Weltanschauungs- und
Sektenfragen
Hans Neusius
Hinter dem Dom 6
54290 Trier
Tel. 0651/7105526

Aktion Jugendschutz
Sektenberatung
Am Wasserturm 11
66953 Pirmasens
Tel. 06331/3468

Referent für Sekten- und
Weltanschauungsfragen
Diözese Speyer
Dipl.-Theol. Christoph Bussen

Domplatz 3
67343 Speyer
Tel. 06232/102218

Saarland

VITEM e.V.
Jeanette Schweitzer
Ensheimer Str. 125
66386 St. Ingbert
Tel. 06894/870452

Referat für Weltanschauungs- und
Sektenfragen im Bistum Trier,
Hans Neusius
Hinter dem Dom 6
54290 Trier
Tel. 0651/7105526

Diözesan-Arbeitskreis für
Weltanschauungs- und Sektenfragen
Pfarrverband Neunkirchen,
Andreas Zimmer
Steinwaldstraße 119
66539 Neunkirchen
Tel. 06821/89378

Sachsen

Studentenrat der TU Dresden
AG Sekten/Sondergemeinschaften
Mommensenstraße 13
01069 Dresden
Tel. 0351/4632042(43)

Sektenbeauftragter der Ev.-Luth.
Landeskirche Sachsen
Pfr.Ekkehart Ziegelschmid
An der Heilandkirche 1
01157 Dresden
Tel. 0351/4211664

Kath. Beauftragter für Sekten
und Weltanschauungsgemeinschaften
im Bistum Dresden-Meißen
Kaplan Gerald Kluge
Karl-Liebknechtstraße 15
01662 Meißen
Tel. 03521/469614

Ev. Kirche der Schlesischen
Oberlausitz
Pfr. Jörg Michel
Martin-Luther-King-Haus PSF 2339
02977 Hoyerswerda
Tel. 03571/72073 oder 414227

Kath. Sektenbeauftragter
Dresden-Meißen
Matthias Holuba
Peterssteinweg 17/II
04107 Leipzig

Sekten- und Weltanschauungs-
beauftragte
Pastorin Ingrid Dietrich
Giordano-Bruno Str. 1
04249 Leipzig
Tel. 0341/473915

EBI Eltern- und
Betroffeneninitiative gegen psychi-
sche Abhängigkeit Sachsen e.V.
Solveig Prass
Wasserturmstraße 68
04299 Leipzig
Tel. 0341/8775120

Sachsen-Anhalt

Beauftragter der Ev. Kirche
Anhalts (Dessau)
Pfr.i.R. Dr. Karl-Wilhelm Berenbruch
Allee 23
06493 Ballenstedt/Harz

Kath. Sektenbeauftragter
Erfurt-Meiningen
Bruno Wagner
Hauptstraße 38
37327 Breitenbach

Kath. Sektenbeauftragter
Seelsorgeamt Magdeburg
Rosel Förster
Max-Joseph-Metzger-Str. 1
39104 Magdeburg
Tel. 0391/3800

Schleswig-Holstein

Beauftragter für
Weltanschauungsfragen
der Nordelb. Kirche
Pastor Detlef Bendrath
Brahmsstr. 20f
23556 Lübeck
Tel. 0451/44786 oder 42215

Thüringen

Beauftragter für Weltanschauungs-
fragen
Kirchenrat Dr.Dr. Büchner
Karolinenstr. 8
99817 Eisenach
Tel. 03691/76649

Kath. Pfarramt
Kaplan Michael Neudert
Alexanderstr. 45
99817 Eisenach
Tel. 03691/3880

いわゆるセクト及び心靈集團

ムーン（文鮮明）運動

連邦共和国家族、老齡者、女性及び青少年省の委託により連邦行政管理局が発行

発行者：連邦行政管理局

発行所：ゲーリンガー社

この小冊子は連邦政府の公的研究書の一部であり、無料で提供され、非販売書として定められている

いわゆるセクトや神霊団体というような問題分野に関するある狙いを持った情報や啓蒙の研究書の中で、連邦政府は、その構造、組織、手口そしてその目的が、個人や社会に対して潜在的危険性を含みうる集団から市民を守るための、ある重要な文書を入手している。

この小冊子によって、ドイツに於いてすでに以前より活動を行っているムーン運動の活動に関する報告がなされている。このムーン運動への加入は、若者達やその親族にとってしばしばそれまでの生活形態の崩壊ということに結びついており、その集団へ身を捧げるあまり、教育や友人関係、そして家庭をも放棄されることが頻繁になっている。元信者達が報告しているように、この全体社会へ深くはまり込んでしまうことは、このムーン運動によって、個人や家族にとっては親類を失ってしまうような、あまりにも大きな諸問題を引き起こすことに繋がっているのである。

この小冊子はそうしたことから一つの手助けの指針であり、いわゆるセクトや神霊集団という問題分野の議論の中での事実 に即した情報であり啓蒙の書となるものである。

1996年12月 ボンにて

ドイツ連邦議会議員
家族、高齢者、女性及び青少年省大臣
クラウディア・フォルク

目次

はじめに

I. ムーン運動とその創立者の歴史

1. 文鮮明の成長、彼の運動の成立と発展
2. ドイツにおける統一運動

II. ムーン運動の教えと指導システム

1. 文鮮明の教えの宗教的な目標設定
2. 文鮮明の権威的指導姿勢とムーン運動のヒエラルキー
3. このグループのエリート意識
 - a) 極度に単純化された世界観
 - b) サタンの周囲世界の制圧
 - c) 集団内言語と儀式
4. 婚姻と家族
5. グループへの結びつき
 - a) 勧誘方法
 - b) 統合と征服
 - c) 組織からの脱退

III. ムーン運動の全世界的な権力願望

1. 経済的諸企業
2. 文化的諸企業
3. 軍事的野望
4. 政治的企て

IV. 統一運動の組織と下部組織

V. 脚注

VI. 参考文献

VII. 呼びかけの場所 —当事者だった人々への手助け

1. ムーン運動とその創立者の歴史

1. 文鮮明の成長、彼の運動の成立と発展

ムーンもしくは統一運動は1954年韓国人文鮮明（ドイツ語ではMun、英語ではMoonと表記）によって興された運動で、そこには彼の無数の地下組織が付帯しており、ドイツにおいて最も知られているのは、「Vereinigungskirche e.V. 統一教会」（組織の教会的範囲）、大学学生組織「CARP」（全国大学連合原理研究会）、そして政治組織「CAUSA」（以前は「世界的ソビエト化侵略に対抗する戦闘員」という名称であったが、今日での公式な名称は「アメリカ社会統一協会連合」となっている。※訳者注：新名称も旧名称同様に頭文字を取ってCAUSAという名称になるように配慮されている）及び「精神的指導のためのフォーラム」である。(1)

文鮮明は1920年2月25日（旧暦では1920年1月6日）、北朝鮮のキリスト教化が強く進んでいた地域、平安北道の農家の息子として生まれた。(2)

彼の両親は1930年に初めてキリスト教に改宗した。伝説的に著されているこの統一運動の伝記によれば、彼にとっては両親がプレスビテリアン派のキリスト教に改宗したことが、自身の宗教的問題の最終的な解明を意味していないというほど、少年時代の文鮮明は宗教的探求者であったという。(3)

普通人としての自身の生活を文鮮明は1936年のいわゆる「復活祭の幻影」によって終焉させたという。ある韓国の山上で復活祭の朝に、祈りの中に深く沈み入っていた時、ある現象を体験したという。イエスは彼に対してその時、イエスが二千年前に挫折した伝道を終わらせ、地上に天の帝国を築くことを彼に委任したというのである。長い抵抗の末彼はその任務を引き受けたという。(4)

彼に与えられた任務の内容は「復活祭の幻影」後何年かして初めて文鮮明にとってははっきりしたものになってきたという。9年間の継続的な探求と、文鮮明が精神世界の対話への努力の後、彼は神の真理を手中に治めたというのである。(5)

この間に彼は高等学校教育を終え、様々な宗教的潮流とのコンタクトを取り、日本において何学期か電気工学を大学で学び、またしばらくの間日本の底辺でも働いていた。彼は大学を修了することなく韓国へ戻ることとなった。(6)

同盟国による韓国の解放のおよそ一年後、この26歳の青年は当時のソ連によって作られた北朝鮮の首都平壤において新しい教えを広め始めた。彼は最初の信者を獲得し、最初の結婚をした。(7)

1946年彼は一時期、イスラエル修道院という組織に加入していた。その統率者は自らをメシアとみなしていたのである。(8)

1947年8月11日文鮮明は表向きは彼の伝道活動のために逮捕され、1948年の再度の逮捕の後、5年間の強制労働収容所行きの判決が下された。判決理由は議論の余地のあるところで、一部には重婚を訴えられて、有罪の判決が下されたとも主張されている。彼は既に結婚しているにも関わらず、ひどく若い信者と結婚したとのことである。(9) 他の文献では、この重婚の非難は後にはなくなったとも書いている。この有罪判決は単に治安妨害の結果であるというのである。(10)

確かな事は、文鮮明が1948年に韓国のプレスビテリアン派教会からセクト的策動ということで除名されたという事である。(11)

1950年秋に文鮮明は朝鮮戦争の統一国家の兵士によって、興南の強制労働収容所から解放された。(12) 彼は韓国の港湾都市釜山へ赴き、そこで彼の伝道活動が再開された。(13) 文鮮明はそこで、彼の教義の集大成である「原理講論」の少なくとも部分的な執筆者である劉孝元（後の韓国統一教会会長）に出会っている。(14)

1954年5月に文鮮明は「世界基督教統一神霊協会」（統一教会）を設立させ、活動の中心をソウルに移した。

（写真内の上の文章：世界平和への新しいヴィジョン）

（写真下の文章：出典：1988年世界基督教統一神霊協会）

1955年文鮮明は韓国において再び逮捕され、不法監禁並びに性的強要で訴えられた。(15) この逮捕の背景には、有名な梨花女子大学の宗教担当の女性講師金永雲と数人の女学生が勧誘されたことと、韓国生まれのこの教会との対立があったようである。この訴訟事件の結果、彼の信者達は大学を去らなければならなかった一方で、彼に対するこの訴訟は程なくして取り下げられたのである。(16) この事件の後文鮮明は最初の妻と離婚し、新たに再婚をした。(17)

1959年文鮮明は経済的活動を開始した。彼は無数にある彼の会社の最初のものを設立させた。今日の統一産業 というソウルの会社である。その会社は当時空気銃を、今日では臼砲と重砲を製造している。(18)

再度の離婚の後、文鮮明は1960年に現在の妻、韓鶴子と結婚した。この結婚（「子羊の結婚」）は文鮮明とその信者にとってある特別なそして根本的な意味を持っていた。それによって人類の新たな時代が始まったというのである。

60年代の初めこの運動の海外伝道が、先ずは日本へ、続いてアメリカへの伝道師の派遣がという形で始まった。(19)

1965年、彼はアメリカ合衆国やドイツをはじめとして、40カ国に及ぶ最初の世界旅行に

着手した。この旅行の間に文鮮明はこの統一運動の聖なる地として120の土地に恵みを垂れたのである。この旅行のハイライトは、韓国大使館によって仲介されたアイゼンハワー元大統領との短い会見であった。(20)

1971年、文鮮明は居住地をアメリカ合衆国に移し、彼の教えの計画的な世界展開を開始した。1972年に7都市を回るデイ・オブ・ホープ・ツアーによってそれはスターとした。1973年には21都市旅行と続き、1974年には32都市となった。最高潮に達したのが、1974年のニューヨーク・マディソンスクエアガーデンにおける5万人にもおよぶ参加者を前にしての文鮮明の演説であった。そして更なる高みは、—それは彼の説教活動の一時的な集結でもあったが— 1976年のワシントンのワシントンモニュメントでの演説であった。(21)

アメリカと韓国間の政治的な緊張のため、1978年にアメリカ下院の調査委員会が設けられた。委員長は下院議員のドナルド・フレーザーであった。この委員会はアメリカと韓国の間に関係する多くの地下組織を暴き出し、それは統一教会運動の役割にまで及んだ。初めて統一教会運動の諸目的の宗教的、経済的及び政治的な深い関わりが明るみに出たのである。(22)

1982年文鮮明は合衆国において脱税の罪で13ヶ月間の懲役判決を受け、1984年に彼はこの刑に服した。(23)

1990年、当時のソ連大統領ミハエル・ゴルバチョフはモスクワにおける第11回世界言論人会議時に個人的に文鮮明と会見をしている。この催しはメディア界の統一をねらって文鮮明によって設立され、はじめて共産圏で開催されたものであった。統一教会が主張するところでは、この会見が行われたのは、ゴルバチョフが文鮮明の重要性を認識しており、ゴルバチョフにとってこの出会いの理由は、この取引相手（文氏のこと訳者注）の経済的財政力とそれに結びついた経済的な援助にあるとみられるとのことである。(24)

1995年、文鮮明夫妻は、ロシア、アフリカ、南アメリカなど多くの国々への更なる伝道旅行に着手した。

2. ドイツにおける統一運動の成立と発展

統一運動の最初のドイツ人メンバーは1963年カリフォルニアにおいて勧誘されており、1964年にはすでに伝道師としてドイツとオーストリアに派遣された。(25)

この文鮮明の教えの根本ともいえるべき「原理講論」はドイツ語に翻訳され、活動の最初のセンターがフランクフルトに設立された。(26)

1964年11月にはこの運動は「世界基督教統一協会」としてフランクフルトにおいて登録

されている。(27)

最初の何年かはドイツ連邦共和国内での広がり小さなものだったが、1969年における統一協会ドイツ支部の新しい支部長が任命されるに際しての文鮮明の訪問の後、この状況は一変した。会社の設立（印刷会社、写真現像所、朝鮮人参製品の輸入販売会社等々）と最初のドイツ語新聞が印刷、配布された。協会メンバーによる共同生活と、協会の維持のため財政的分担が期待された。

また伝道の形態も変遷していった。最初の何年かは街頭で講演会への招待状が配られていたのに対して、執拗な方法に変わってきている。メンバーは例えば、「原理」を読み、大声で説教するために、公共交通機関を利用するのである。1971年以来ドイツにおける統一運動においては常時、伝道というものが存在している。70年代の半ばまでこの統一運動は二つの訓練センターを獲得しており、一つはヘッセン州カンベルクの近くにあるノイミューレ（新製粉所）、もう一つはフランケンにあるレーゲルスミューレ（规律的製粉所）である。(29) 1975年に「統一教会」という名称に改称した。(30)

1976年CARP（統一運動の大学組織）は大挙して連邦議会総選挙に介入したが、それは間もなく法的に禁止されるに至った。CARPの選挙ポスターは反共産主義、社会主義を煽動するものであった。(31)

メディアにおける反対キャンペーンは短期間でこの統一運動のイメージを悪化させるものであったが、彼らはこれを逆に利用しようとした。印刷物を利用した活動は改善され、街角での伝道はほぼ完全に姿を消し、いわゆる家庭伝道が導入されるようになった。(32) そして講演会を通しての会員の両親へのコンタクトが強まったのである。(33)

1984年、当時のベルリンの壁での統一キャンペーンが行われ。このCARPは「聖なる土地」を捧げ、国際集会を召集した。(34)

1987年8月、それまでの開催地でも激しく反対されていたCARPの世界大会の第4回が、ベルリンにおいて催されたのである。警察と文鮮明に反対するデモ隊の間での激しい衝突が起こった。

CARPのこのベルリンでの活動に関して、文鮮明が今日主張するところでは、ドイツが再び統一され、壁が壊されることが可能になったのは、この統一運動の影響によるところである、というのである。(35)

1992年には「女性年」にちなんで、連邦共和国内で統一運動内での新しい設立があった。「世界平和女性連合」である。文鮮明のイデオロギーの下で世界の全女性の統一ということとその目的としたものである。この世界統一を目指した組織の会長は文鮮明の夫人

韓鶴子である。彼女は1992年及び1993年と続いてフランクフルトに赴き、召集された聴衆の前で演説を行った。文夫人はこの際明らかに文鮮明の教えの使者として立ち振る舞っていたのである。(36)

II. ムーン運動の教えと指導システム

1. 文鮮明の教えの宗教的な目的設定

この統一運動の教えは本質的には、様々な書物に書かれている文鮮明の啓示「原理講論」ないし文鮮明の説教"Master Speaks (主のみことば)"に基づいている。この「原理講論」は文鮮明によって開かされた真理として我々の時代にも有効なものであるという。(37)

文鮮明は全ての存在の中には対極的な構造を含んでいると見る。世界の多くのものは相対する二つのペア（例：男性と女性、肯定的と否定的等）から成っているという一般的な観測から(38)、文鮮明は神も自身の中に男性的主体と女性的対象を統合させていると結論づけている。神は男性的主体という内面性であるということの一方で、女性的対象としての創造性を対極においている。この神の双方の極の間にある不変の交換、授受作用が存在するというのである。これが永遠なる神の存在の根本である。

神は、完全で罪のない神聖なものに対する対峙者を作るために、人間アダムとエバを創造したという。その完全性によって三大祝福の実現に達したという。その完全性へと導く三つの神の祝福を文鮮明は次の聖書の言葉から取っている。「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ」(1.創世記 1、28)

最初の祝福である「生めよ」は唯一の人格の完全性を、第二の祝福「ふえよ」はその家族への完全性を導いており、そして第三の祝福は被造物に対する支配の完全性の内容を含んでいるという。(39)

神はこの罪のないペアから一つの三位一体（四位基台）を作ろうとしたという。神の目的は、地上に樂園を建設することであったが、この目的はしかしながら、墮罪によってすっかり膿んだものとなってしまったというのである。文鮮明の認識では、エバがサタンによってそそのかされ、人間はそれによって悪の道についたということによって、この墮罪が生じたということである。この樂園が罪に満ちた世界に替わり、サタンがこの世界の主人になるのである。(40)

文鮮明が唱えるところでは、神の元々の計画、即ち地上に天の帝国を再び作り上げるとするのが神の目的である。この行程においては人間も又定められた役割があるという。人間は回復によって神とのつながりを再び取り戻さなければならない。人間個々は自分の力でそれが出来ないため、再臨主、メシアの助けが必要となるというのである。(41)

罪のない者としてのアダムが一人の罪のないエバと夫婦になり、サタンとも無関係な最初の「真の家族」を作る事がその優先的課題であるという。信者達は加入儀礼を通じてこの真の夫婦の子供となりこの「真の家族」の成員となるのである。こうして彼らは罪のない子供達を作り得るのである。(42)

なるほど神は、その理想観念を例えば第二のアダムたるイエスの地上への派遣を通して様々に試みたが、断念したのだという。イエスは早い時期の十字架での死により肉体的再生を成就することには成功しなかったというのである。神は原理的に一人の女性を再生することも、罪のない子供を作り上げることに成功しなかったというのである。(43) さらにこの統一運動の教えによれば、第三のアダムが必要とされるのである。これが、信者より「真の父」と崇められる韓国で再臨したメシア文鮮明なのだというのである。(44)

文鮮明がメシアであるという重要な確証は、信者にとっては、1960年に女学生韓鶴子との結婚であった。このいわゆる「子羊の結婚」―それは罪のないアダムと罪のないエバの一致と価値づけられている―によって、文鮮明は神と人類の仲介者たるのである。(45) かれは他のあらゆる宗教が長く待ち続けていた中心たる人物になったというのである。「従って全ての宗教は、このキリスト教（統一教会を指す。訳者注）に委託することで統一されるのである」。この事はもちろんヒンズー教、仏教、イスラム教にとっても当てはまるという。(46) 文鮮明とその妻はこの共同体の「真の父母」として将来にわたりみなされ、その成員は「真の家族」となるのである。(47)

文鮮明の宗教的イデオロギーの目的は、地上に天の帝国を築き上げることである。すなわち彼の支配の下での全ての宗教の統一である。文鮮明はこの統一という概念を、決して様々な信仰的な主義主張の同権的並立ではなく、彼の尺度による絶対的な服従として理解しているのである。

「この天の帝国はまず地上に作られる。人間というのは一つの統一された世界を渴望するのである。世界は一つのイデオロギーと一人の父を必要としている。世界はただ一つの国となる。全ての国家が統一されれば、それらは神の支配の下一つの民族となるのである。」(48)

これにより明らかなのは、文鮮明は宗教的にばかりではなく、政治的な支配をも目指しているということである。

彼の教理というのは、他の世界観の諸要素から主要なものが組み合わせられているのである。韓国においてはそのような諸説融合(49)はけっして珍しいものではない。批評家(50)によって主張されるところでは、すでにこの「原理講論」というのは、文鮮明が一

時期加入していたイスラエル修道院の創設者であり責任者である金百文の「基督教根本原理」の本の剽窃にすぎないとの点である。(51) このタイトルの疑うべくもない類似性と共に、この本はその内容的な相似性をも提示しているという。(52)

このキリスト教的概念からは他にも、アダムとエバとの楽園の具象的描写が剽窃されている。聖書においても述べられているこの墮罪は全く常軌を逸した説明がなされている。聖書においては、最初の人間たるアダムとエバの不従順によって墮罪に至ったのは、神によって禁止されていたにも関わらず、知恵の木のリンゴを二人が食べてしまったためであるということなのである。それに対して文鮮明はこの墮罪を、サタンによるエバの性的な墮落と見ているのである。この墮罪認識はすでに1688年ロンドン生まれの科学者、神智学者エマニエル・スウェーデンボルグとその信奉者達によって主張されたところである。文鮮明はソウルにおける高等学校時代にすでに、聖霊降臨団やスウェーデンボルグの信奉者である騎士団の創始者達（李龍道のような）との接触があった蓋然性は高い。(53)

この教理の強いメシア的派遣意識は幾つかの韓国の宗教—金百文においても同様で一に見出されるところである。(54)

今まで述べてきた要素と共に、文鮮明のイデオロギーには東洋的知も垣間みれる。万物の対立性という彼の認識は、儒教の陰陽思想によっているということも部分的に主張されるところである。(55)

2. 文鮮明の権威的指導姿勢とムーン運動のヒエラルキー

この統一運動の中で文鮮明は絶対的権威者となっている。(56) 信者から「真の父」として崇められている文鮮明はメシアとしての彼の役割を完全に確信している。：

「.....神は私をその任務を遂行する上での道具として任命したのである。私は神の真理を神に代わって明かす為に呼ばれたのである。私はイエス・キリストやこの生ける神と直接関係を持つように指名されたのである。」(57)

1994年におけるこの運動の40周年において彼は告げた。「真の父母として現れたそれはメシアである。神はこの任務を遂行するために私を指名したのである。」(58)

文鮮明自身は自らを、神の如く感じ、それ故決して罪を犯すことのない完全な人間であると見ている。「この者はそれ故、神の寺院になり、それにより神的実体となるのである。かれはすなわち神的な価値を有するのである。(59)

それにより彼は自身の見解によれば同時に全宇宙を治める能力を有しているのである。(60)

彼によって祝福を受けた最初の36家庭の男性達（たいていが韓国人）が彼を支持して仕えている。彼らは文鮮明がもつ企業のほとんど全てで最高の地位を占めている。この家族の子供達はできる限りこのサークル内でのみお互い結婚がなされるのである。(61)

1992年以来、文夫人も公に姿を現すことが多くなっている。たいていは会長を務める「世界平和女性連合」においてである。

文鮮明の長男、孝進はCARP世界統一の会長に指名され、そこでの学生のスポーツ及び世界会議を主幹している。国々においては国の父、国の親と呼ばれる者達—この者達には「36家庭」の中からの一人の顧問が彼らの側に立って世話をやっている—がこの統一教会を指揮している。この下に各地区の責任者がいるのである。この者達を中央の指導者達が管轄しているのである。

単なる一介のメンバーというのは、中央の指導部やより地位の高いメンバー達によって完全な支配下に置かれている。それは「非個人的なもの」なのである。(62)

指導幹部の養成は、独自の教育機関所在地であるニューヨークのベリータウンにおける統一神学校において行われる。その卒業生は主に資金調達と戸別訪問伝道が訓練される。(63)

3. このグループのエリート意識

この統一運動の信者達は、この成就される人生の唯一の鍵を所有していると信じている。彼らは自身を、神の帝国をこの世に作り上げることに貢献する選りすぐられた者（神の勝利者、神の兵士）と理解している。(64) この任務は、彼らの見るところでは、明らかに世界のその他の者から彼らを際立たせているというのである。(65)

個々のメンバーは、グループの諸条件が満たされ、その苦勞に対する感謝の念を文鮮明によって受け入れられたとき、世界救済に貢献し得ると信じている。(66)

このエリート意識は、回りの世界との明らかな距離と、特定の生活概念や行動概念の中で意見を述べるこのグループの排他性というものを導くのである：

a) 極度に単純化された世界観

統一原理の教理は信者達にはある非常に単純な世界観を伝えている。「対立的原理」によれば「善」又は「悪」或いは「この運動への肯定」又は「その否定」といった単純な区別しか存在していない。妥協といったものはあり得ない。文鮮明の信者は「神の戦士」として常に善の側に位置し、他方でこの統一運動の外部にいる人類は破滅への判決が下されるのである。(67) 文鮮明やその教えに対する批判はサタンの攻撃とみなされる。(68)

最終目的の成就是、個々人がグループとして一致した行動ができるかどうかにかかっているのであって、グループそれ自体ではないのである。不成功は信仰の足りなさとの運動の中での関与の少なさを意味している。(69) 人間間での争い事がもし起れば、常に簡単な解決策がある。このグループへの服従、すなわちより身分が高いグループのメンバーの下に入ることである。他の方法はサタンの術中にはまり、この運動の目的を危うくするのである。(70)

このグループ内での更なる手段、共通性は思考停止のテクニックである。極度に集中的な祈り、歌、口ずさみ、瞑想がこれにあたる。この方法は心理治療の分野でもその使用が見られるものである。この統一運動の中ではしかしながら、メンバーがグループに対して批判的、敵対的な考えををしないように、自動的にその思考停止というものをを用いるように訓練されているのである。(71)

b) 「天の惑わし」の助けにを借りたサタンの周囲世界の制圧

地上における天の帝国の再生のために文鮮明の認識では、サタンを出し抜き、その所有物を一個一個剥奪するためには、あらゆる手段が許されるという。(72)

この統一運動の目的のために受け取られ得るそれぞれの物、人や土地は、この悪に対する勝利を意味している。そのため、この神の計画に権威を持たせる為には甚だ多くの人員が動員されなければならないのである。(73)

元信者達から何度も報告されることは、彼らが資金調達と対話者の勧誘を行う際、その真の目的と背景を偽っていたということである。この態度は文鮮明によって「天の惑わし」と名付けられた。彼はそれを聖書と神の態度から正当と主張しているのである。

神は最初の誕生の権利を獲得したヤコブの惑わしを、それが神の目的に尽くしたという理由で正しいこととみなしたとある。(旧約聖書 2.創世記参照) (74) この統一運動の真の目的に関する世間への惑わしは、それ故認められた手段であるというのである。

この「天の惑わし」は統一運動の全ての活動に渡っている。

一資金調達

この統一運動はこれをサタンに対する財政的戦いと理解している。

集められ得るどんな金額もサタンの影響圏の減少という意味を持っているのである。同時に金銭提供者は天の救済の分け前を買い取るという事なのである。この戦略方法を文鮮明は日本において試し、発展させたのである。(75)

メンバーは10人から12人の集金チームに分かれ、そのグループの中では文鮮明の企業から調達される安い製品の販売者としてたいてい二人ないし三人の人間が活動している。彼らは、社会施設、年配者のパーティー、幼稚園、若い音楽家のため、等々と偽るので

ある。(76)

60年代、70年代には文鮮明のこの運動の中には「インターナショナル・ワン・ワールド・クルセード」という独自の組織があり、この組織はもっぱら資金調達チームの全世界的な展開に携わっていた。何百という信者達が全世界において出動し、彼らは数週間現場に留まり、そして更なる出動にと転地して行くのである。その際問題となるのは、文鮮明が特にアメリカにおいてその目的の追求を発起する政治的デモへの組織的割り振りである。(77)

1978年のアメリカ政府の調査報告（フレイザーレポート）によると、統一運動の中心となる資金調達チームは日に正味で千ドルを集めることが可能であるとのことである。(78)

ある元信者の報告では、彼は6年以上のこの運動の所属中に総計60万ドルを集めたという。これは日収にして平均256ドルになることを意味している。

一勧誘（伝道）

この運動の個々のメンバーは「精神的な子供」の勧誘によって、その精神的発展のレベルを示し、同時にサタンの世界を狭めて行かねばならない。(79)

その際にすぐにその勧誘目的を明らかにすることは問題ではない。この目的を持った「天の惑わし」によって、潜在的な犠牲者たる人々の講演会やグループでの会食、或いはワークショップへの案内が試みられることがあり得るのである。(80) 新しいメンバーが一度でもそのグループのセンターに足を踏み入れれば、その者はあまりに歓迎されるため（いわゆる「愛の爆撃」）退会することが難しくなる可能性があるのである。(81)

このサタンに対する新しい力の動員化と、この運動への勧誘はあらゆる手段を神聖化しているのである。(82)

一政治的、文化的及び経済的行動

文鮮明自身も公衆の面前では、彼の政治的目的を覆い隠すためにこの「天の惑わし」を利用している。1974年の韓国からの国連軍撤退に反対するデモの前に彼は次のように言っている。

「汝らの発言は決して政治的な性質を有してはならないということを考えねばならない。「我々は政治的なことに興味を持たない」と言わねばならないのだ。我々がこれを行うのは政治的な理由からではなく、人間的理由からなのである。」(83)

文化的分野においてもこの「天の惑わし」の原則はうまく使われている。フレイザーレポートは、韓国の舞踏グループ「リトル・エンジェルス」が外国為替の密売買に悪用されたということを指摘している。同様にこのグループを通して、政治的な決定権を持つ

者への接近が試みられた。(84)

人がリトル・エンジェルスのことを質問したとき、彼女らは、文鮮明がリトル・エンジェルスの設立発起人であると簡単に言うであろう。我々がリトル・エンジェルスに対してあまりにもあからさまに我々の主人や教会からの後押しを受けている点を公表すれば、文鮮明は自分の名声のためにこれらの子供達を動員しているというサタンの攻撃に遭ってしまうだろう。」(1973年幹部情報)

オーストリアにおける統一運動の告示では、文鮮明によって設立された「青年宗教者奉仕団」(全世界における20代、30代のための会議)によって何百もの人間が世界平和の主体的展望に啓発されたことが誇らしげに報告されている。この参加者達は今や、「原理講論の神学的観点を知ることもなく、統一運動のメンバーであるというのでもなく、責任に満ちた任務の中で父の理想を次々と伝えて行くことになる」のである。(85)

統一運動の経済的諸活動の中で、見た目には、会社はそれぞれお互い独立して行動しているようである。しばしば経営幹部に関してのみこの運動とのつながりが証明されることがあるくらいである。

例えば、統一運動の最高幹部であるKae-Hwan Kim 博士は1962年に奨学生として来独し、経済学を研究し、優秀な成績で卒業している。彼はポッフムのルール大学で研究助手として勤務していた。1979年にデュッセルドルフにて、機械工作のための有限会社Sae II 輸出入社を設立させた。1980年にはじめてKim 博士が文鮮明の最高幹部になったということが知られるようになった。彼はまたギーセンにおける文鮮明の会社Wanderer の支配人に任命された。(86)

c) 集団内言語と儀式

表面的に見る限り、統一運動の言葉においてほとんど通常言語との違いは現れない。しかし外部の人間が発言された内容を理解しようとつとめると、通常概念が別の意味をつけられているということが明らかになる。

「授受」、「主体と対象」などはこのグループのヒエラルキーからの出た概念である。下部は常に「与えられる者」、対象であり、主体と「与える者」だけが上部に位置し得るのである。

カインとアベルの問題は個人的なつながりの分野からの敷衍的概念である。下部に位置するメンバーは常にカインの役回りにある。カインがアベルを殺したため、かれはその償いとしてか弱きアベルに屈服しなければならないのであり、それによって彼はサタンの影響から解放され得るのである。この摩擦解決は常に従属の中にあるのである。

イサクもまた文鮮明の償いの教理の概念である。信者達はアブラハムの位置に置き換え

られ、イサクを彼らの指導者に捧げなければならない。多くは、最後の個人所有物、親とのつながり、友人、知人、または愛蔵書などがその際に問題となるところである。

アメリカ人の元信者B.アンダーウッド氏が報告するところでは、あるメンバーは実の子供—この子供は文鮮明によって祝福を受けたつながりとは関係のない子供であるが—とのコンタクトを犠牲として捧げたということである。(87)

「エンジェルのような」とは単に悪いということである。なぜならサタンは墮天使だからである。

「真のキリスト者」とは、この運動の言葉使いでは文鮮明の信者という意味しかない。教えの上での養子縁組という精神的再生によって信者達は真の人間として、真の父母の子供として生まれ変わるのである。(88)

このような言葉使いによって信者達は、次第に通常の言葉を忘れてゆき、もはや彼らの言葉や思考図式に合わない一般世間の諸概念の理解に関係づけることがもはや出来ないのである。(89)

一般世間からの更なる隔絶、エリート意識の助長へは、統一教会信者の日常生活の儀礼化が寄与している。このグループにおける特別な規範は、それぞれが発展を遂げるために、自由な空間を与えないということである。他のメンバーが常に近くにいるという事で、離れることが不可能になり、グループの処罰もすぐ成功するのである。

一 宣誓

誓いは毎週日曜日の5時、毎月の最初の日、及びこの運動の祭典日の度に唱えられる。この儀式は正確に規則づけられている。手や足の動きのきまりごと、衣装、態度、おじぎの仕方、部屋の飾り付け、祭壇の飾り付けに関して正確な指示書がある。誓いの言葉の声の大きさはどの参加者にとっても唱和できるものでなければならない。可能なら韓国語でそのテキストは読まれることが望ましい。この宣誓がもし途中で放棄された場合、この者とその家族はサタンに属してしまったということなるのだそうだ。(90)

統一教会の誓いの言葉

1. 宇宙の中心存在として、父の御旨（創造目的）と任せられた責任（個性完成）を全うし、喜びと栄光を帰し奉る善き子女となり、創造理想世界において永遠に父に仕え奉る真の孝子女となることを私はお誓い致します。

2. 父は六千年間供物として十字架路程を忍ばれ、死したる私を真の子女として活かすべく、み言と人格と心情を与え一体化せしめて、宇宙の相続権を与えたまわんとなさる聖なる御旨を私は受け、完全に相続することをお誓い致します。

3. 怨讐によって失われた子女と宇宙を復帰せんがため、父は父母の心情を抱かれ僕の体を受肉し給い、汗は地のために、涙は人類のために、血は天のために流され、私の身代わりに歴史路程における怨讐サタン粉碎の武器を与えたまい、それらを完全に審判するまで父の性相を受け、真の子女私は敵陣に向かって勇進することをお誓い致します。

4. 父は平和と幸福と自由と理想の源泉であらせられ、父を奉る個人と家庭と社会と国家と世界と宇宙は、本性の人間を通じてのみ心情一体の理想世界を完結することができ、私は真の人間となり、心情の世界において父の代身者となることによって、被造世界に平和と幸福と自由と理想をもたらし、父に喜びと満足を帰し奉る真の子女となることを私はお誓い致します。

5. 我々は神を中心とした一つの主権を誇り、一つの民を誇り、一つの国土を誇り、一つの言語と文化を誇り、一つの父母を中心とした子女となったことを誇り、一つの伝統を受け継いだ血族であることを誇り、一つの心情世界を成す役軍であることを誇り、これを実現せしめることを私はお誓い致します。

このような義務と使命を成就せしめるため、責任をもって生命を賭けて闘うことを私は。

宣誓しお誓い致します。

宣誓しお誓い致します。

宣誓しお誓い致します。

※第五節は常に韓国語でなされることが要求される。

—祝典日

この統一運動においていくつかの祝典日、記念祭がある。それらはたいてい陰暦に従って執行される。正月の「神の日」だけは陽暦に沿って行われる。自由意志による真なる親に対する御供はどの祝祭日にもあてはまる。(91)

—聖塩

世界と人間をサタンの影響から助け出さなければならないという考えが、文鮮明の信者の行動を支配している。祈り、断食或いは特別な会合などといった一般的な約定とともに、ロウソクと聖塩を使った特別な清めの儀式がある。この行いの次第は正確に文章化されている。外部からこのセンター内やある関係の住居に運び込まれる全ての物には、塩がかけられるか、ロウソクの煙で燻されねばならない。これによってサタンの影響が取り除かれるのである。ある者が特別なサタンの影響をによって悩んでいる場合、その者は同様に塩をかけられる。服はそれによって清められ更なる攻撃から守られるというのである。(92)

—マッチングと祝福

マッチングの際は、写真により、文鮮明によって祝福をされるべき将来の伴侶が決められる。この祝福の前の「聖酒式」での血飲（文鮮明によって配合された飲み物）によってサタンの血筋は消え、メンバーは精神的に「真のキリスト者」、「真の父文鮮明」の「真の子供」として生まれ替わるのである。(93)

1995年8月25日の36万組の祝福の後、文鮮明は1997年11月にアメリカのワシントンD.C.において、360万のカップルによる集団結婚式をもくろんでいる。

4. 婚姻と家族

統一運動の教理の中では婚姻と家族は中心となる制度である。文鮮明はあらゆる演説の中で何度もこの婚姻と家族については強調している。(95) しかし彼が考えるところのこの制度は、ドイツ憲法の中で固定化している家族概念とはほとんど一致していない。

文鮮明は伝統的意味での家族とは違う「家族」を考えている。すなわち、彼のことを「真なる父」としてみている信者のことをそう呼んでいるのである。「真の家族」というときはあらゆる他の条件に優先している。なぜならそれは永遠に求められるものであるからだ。

新しい罪のない人間の家族を達成するために、文鮮明は合同結婚式を行うのである。その際に彼は、彼が組み合わせたペアに祝福を施すのである。この目的のために彼は、各国から送られてきた写真でお互いが結婚するためのパートナー選びを行うのである。この文鮮明によってもたらされたパートナー選びに対して、それぞれのケースで異議が唱えられることも可能であるが、しかしそれはたいてい、この決定が受け入れられたとい

うことから出発しなければならない。(96)

この受け入れとは、一方では、信者達が、文鮮明は写真を見ることで正確なパートナーの心を認識することが可能な、透視的能力を自由に操っているということに対する信仰を持っているということに基づいたものであるということ。他方で理解しておかなければならないことは、この共同体から破門され、サタンに帰属してしまうという事に対する集団的抑圧や恐怖が恐ろしく大きいということである。(97)

ハンプルクの法務局は、文鮮明によってなされたある婚姻を婚姻法第34条によって破棄したのである。というのは女性側の事情聴取によって、この結婚承服は、婚姻成立への自由な決断を妨げるような共同体の脅しによってある強制された状況に置かれたためのものであるという結論に達したからである。(98)

文鮮明によるこの祝福（いわゆるBlessing）は、しかしながらこの婚姻締結だけを内容として含んでいるのではない。この祝福の本来的要素は、「真の家族」への文鮮明による二人揃っての養子縁組ということなのである。(99)

映画やテレビのレポートで、何人かの夫に関しては、そのパートナーだけが儀式の間、写真を携えて出席していた場面が映し出されていた。それを見る限り、死亡した文鮮明の信者と共に生きている者の間の祝福が可能のようである。(100)

この結婚する二人によって祝福の際に述べられた約束は本質的に文鮮明に対する宣誓となる。この二人は彼の原理に従い、この関係がうまく行くための責任を負うことを誓うのである。(101)

40日間から3年に及ぶ聖別期間と言われる一定の期間の後、ようやくお互い親密な交渉を持つことが許される。韓国からの報告では、最初の性的な交わりは強く儀式的で、その詳細を文書で報告しなければならないという。（例えば、アダムとエバの具現たる男女の位置関係など）(103)

この儀式の目的は、文鮮明の信者の増数化である。すなわち罪のない、サタンの血族に決して墜ちない「真のキリスト者」の生産なのである。

子供の出産と養育はこの統一運動の中では女性の役割に還元される。家族の生活や子供に対する世話義務さえもこの運動の目的に従っているのである。ある文鮮明の女性信者の手紙から明らかになったことは、よどみのない伝道活動が保証され続けるために、小さな子供の世話取りは他の者にまかせられるということである。

「私がブラハを目指してリスボンを発ったとき、子供達は置き去りにされた。デビッドはまだ母乳を飲んでいて。私を救ってくれたのは真なる父の次の言葉であった。

「.....感傷的にならないように私は子供の写真を見ることを断念し、神の仕事に専

念したのである……」。私もそうしよう。私はたった一枚の写真を持っていたが、ほとんどそれを見ることはなかった。このときデビッドはある事故に遭っていた。... 私は彼がいつかその事を誇りに思ってくれることを希望している。なぜなら彼はそれを一つの犠牲として尽くすことが出来たのだから。」(104)

この手紙から更に明らかになったことは、この子供達の父親も又同じ時期に少なくとも5カ月間、外国派遣の途上にあったという事である。

より高度な目的の下で、この個人性やあらゆる個人的なつながりというものを従属的地位におくということは、あるなお露骨な家族生活への介入を後づけることが可能である。年齢的な或いは健康上の理由から子供を授かることができない他の夫婦に「真なる子供」を授けてもらうように、文鮮明は信者からそれを求められるのである。そうなる前に、子供を産み、手許においておくべきだったのであるが。(105)

5. グループへの結びつき

統一運動への入口というのは、回心が行われる様々な局面で起こることである。

新しいメンバーは、その意識、態度、情報源及び思考をこの運動のコントロール下に置こうという目的を持った、定められた管理機構を通らなければならない。目的は自身の人間性を、このグループのアイデンティティーにすり替えられた新しい人間のにそれに作りかえることである。

この種の人間性変質化が如何にして機能するかを、アメリカ人ガリー・シャーフ（彼自身以前は学生組織CARPの会長であったが、退会後は、訴訟手続きのかたわら、「思考の自由リハビリセンター」—ここではその他、元信者の治療も行っている—の会長も務めている）は実例を挙げて説明している。：

「一人の人間を彼の家や友人から引き離しなさい。朝7時から夜の1時まで続き、私用は決して許されない 一たとえ一度の洗顔も食事さえも— 自由のない計画的なプログラムによって彼自身の意識を剥奪せよ。宗教的観念をこの諸要素に大量にそそぎ込め。それは受講者を混乱させ疲労に追いやり、彼がその一つにでも疑わしいと思ったり、講話に完全に従う事が出来なかったのは自分が悪いからであるという事実を除いては、もはや何を言われたのかも分からなくしてしまうのである。睡眠不足とタンパク源の不足した食事は、それらがこの人間を肉体的に切り詰めて行くことによって、この行程をより補強するのである。」(106)

a) 勧誘方法

70年代、80年代にはこの統一運動は、特別に執拗な勧誘方法により、注意を引いた。(107) メンバー達は様々な方法で積極的にセンターや彼らの共同住居におびき寄せようと試みたのである。

わずかの間にドイツの大衆の間には、このグループに対する強い反対姿勢が起こり、このことが彼らの伝道方法を変えさせることとなった。いわゆるHome Church Mission 家庭教会伝道が導入されたのである。

ある一人のメンバー或いは一家族は、伝道すべき特定の居住区を割り当てられる。友人的つながり、子供の面倒を見たり、介護が必要な人の世話取りといった諸援助などを介して、相互の人間関係を結ぶのである。それが結果的に新しいメンバーに導いて行くことにつながるのである。(108)

ドイツの統合以来、街頭伝道というのが再び強まっている。統一運動は大都市の歩行者専用ゾーンに情報スタンドを設けている。それらは全く多種多様な名称で登録されている。(109)

ここには近年、第一世代の子供達（16歳から21歳）が広報員として投入されている。(110)

ここでのあらゆるキャンペーンの対象は、主に若者である。若い、教養のある信者の獲得により、この運動のドイツ社会における影響力の増大化が期待されているのである。

オーストリア支部の会報の中では次のように書かれている。：

我々の主な対象グループはモーツアルテウムなどにきた学生である。本と情報スタンドを我々は、特に法学部、神学部、人文学部から離れていない場所であるアルターマルクト広場に敢えて設けたのである。(111)

大学における最も重要な勧誘グループはCARP（Collegiate for the Research of Principles）である。

彼らは全ての国の大学において、世界学生会議の開催（例えばバンコック）、スポーツ大会、講演会や昼食会への招待等による勧誘活動を行っている。(112) 韓国や日本においてCARPはあらゆる大学の自治会の中で独自の発言をし、中には自治会長を務めているところもある。(113)

CARPの会則から、なぜ学生の勧誘がこの統一運動の目的にとって大きな重要性を持っているのかがはっきりと理解できる。この組織の主要目的は、
「全世界的範囲に向けられた教育制度の促進、そしてこの教育制度を全体的に刷新化するための教員教育」

その規約の中には更なる、いわゆる目的といえるものが次のように書いてある：民主主

義におけるキリスト教的原理の新たな復活、宗教と学問及び東洋と西洋の文化の統一、共産主義に対する批判、大学システムに関する情報の供給。

この規約から明らかになっていることは、ここで報告されている第4項目の活動の理論的土台が統一哲学（統一思想）であるということだ。この哲学の内容は詳しくは解説されていない。未熟な入会希望者はCARPが統一運動の下部組織だということを認識していないのである。(114)

CARPの学生から期待されていることは、彼らがそれぞれの大学に散らばり、そこで学生の決定権に影響を与えるような新しい下部グループを作ることである。この下部グループは全幹部に対して責任を与えている。（規約第11及び12項）同時にこのCARPは政治的な統一組織CAUSAの下部組織でもある。

b) 統合と征服

数年以前から若干ではあるが本質的に内容の一致した元信者達の報告書が存在しており、それらはシャルフによって叙述された操作およびコントロールテクニックを裏付けるものである。(115)

事実、当時新たなグループの会員達は社会の目前から消えていた。彼等はトレーニングセンターまたは共同宿舎に滞在していたか、もしくは移動伝道チームに同行していたからである。彼等は家族や友人には一切連絡は取っていない。統一運動に関連した「洗脳」や「誘拐」についてが、頻繁に報告されていた。

それまでの生活環境から離脱していく過程は、入会当初に他人と接触する機会がコントロールされ、規制され、また場合によっては阻止されることによって押し進められている。(116) この場合には親戚や家族の便りは本人に手渡されることはない。新規会員の入会に用意されるワークショップでは、公衆電話が監督下におかれ、必要な場合には切断されることもある。(117)

新入会員はこの運動の目的の為に、自己内省する時間を許さないといった方法で緊張状態に置かれることとなる。職業や学業はもはや運動の目的に従うためには放棄されたり顧みられることはない。

活動の成功は信仰への忠誠や、精神的な発展の現われであるという根本原理に忠実に従って、会員は広範囲に及ぶ伝道活動へ投入される。会員は、「・・・世界の救済のために時間、資本、そして自らの身体を捧げることを信念としていた。」(118)

この集団の会員たちは読書のための時間などもはや許されていなかった。個人の書物も「捧げられた」のである。書物、ラジオ放送並びにテレビ放送からの信者の隔離と集団内での会話の制限は「情報コントロール」に役立つものであった。これはさらに、集団

や教義に対する批判的な見方をさせない上で効果を上げることになった。(119)

共同体への個人の依存性は、会員がグループに個人の所有物を委譲することによって強められる。それは貯金から車、さらに銀行口座にまで及んでいる。(120)

コントロール、及び操作テクニックの結果は法廷での証言が明らかにしている。

「『お前の「管理者」が常にお前に言うこと、それが真実だ。そのみが真実だ。』それについて疑いを持つことはあり得ない。彼らが続いて言うことは、『お前が理解できないことを信じよ。ついには全て自動的に答えが探されるようになる。自動的に答えられるようになればそれだけその者はより信用に値する者となるのである。』」(121)

近年、文鮮明運動のドイツ支部が一見リベラル化（自由化）されているような報告がなされている。それに対して、とりわけドイツ新州（旧東ドイツ圏）からの報告されていることは、この統一運動は相変わらず、「真の父」へ献金するために、他のヨーロッパ諸国へ「寄付金」集めのために会員を送り込むこもうとしている、ということである。(122)

ある女性の脱会者は、彼女が強要されたことはそればかりではなく、5週間にわたる金集めへ赴くための費用として、彼女の住居を手放すことすら求められたと語っている。(123)

このように、寄付金の為に動員された会員は、組織に金銭的に従属してしまい得る実体が浮かび上がってくる。

c) 組織からの脱退

会員一人一人が組織の強要から個人的に逃れることは先ずあり得ない。反対に、組織に導入されたメカニズムは脱退を妨害するように働いている。外界との隔絶状態は外部の人間と再び接触することを非常に困難にさせている。除名の恐怖は脱退への意志を怯ませまたとどまらせるように作用しているし、脱退は会員にとって社会的に、また金銭面に重大な問題となっている。(123)

アメリカ支部から脱会したあるドイツ人は自分の体験を以下のように述べている。

「正に驚くべきことであり恐ろしいことは、知的な批判精神を持った人間が、批判的な思考能力のない熱狂的信奉者へ転向していくという事だ。これは私にも起こった事であり、また私の友人の多くが10年経った今日でさえ未だにこのセクトから離脱できないでいる。私は非常に幸運だったが、私のように、愛情に満ち、支えてくれる両親の家を持っていない者はどうなるのだろうか。」(125)

このように統一運動からの脱退の最大のチャンスは、両親や或いは友人が組織に対抗して真摯に会員にコンタクトを差し向けることである。

III. 全世界的な権力願望

文鮮明が説く目標というものは彼の支配下における全世界の統一というものである。「原理講論」は次のような文章で結んでいる。

「真の父たる再臨の主の下、一つの大家族による理想世界が作られるとするならば、当然言語は統一されなければならないのである」(126)

この統一運動の主張によれば、文鮮明は理想世界の創造を、政治的な世界秩序の建設と理解するのではなく、実際の、聖書の言葉に対比せられる具象的表現こそが重要だというわけなのである。

この主張が疑うべきものだという理由は、一つには「原理講論」によれば、理想世界の創出への道とは、それは精神イデオロギー的に、もしくは肉体軍事的に勝ち抜かれる第三次世界大戦ということだからである。この第三次世界大戦ではサタンの世界（すなわち共産主義）が征服されることになるという。(127)

第三次世界大戦という言葉の選択でも描写でもないものが表現されており、「神話的神学」というものが問題となっている。むしろ、世界的視野にたった目的の実行というものをこの具体的な概念の記述が暗示しているという。

統一運動の教えに従えば、先に述べた第三次世界大戦は共産主義の精神イデオロギー的征服によって終焉するという。この勝利の兆しが、文鮮明のゴルバチョフとの（1990）及び金日成との（1991）会談であった。それらは「カイン型」のイデオロギー的な消滅を象徴しているのだという。また、第三次世界大戦は精神的には完結されたものとして明言された。1990年以降、統一運動にとって最終的な「新」人類の完全な統一が始まったわけである。(128)

当時会員であった者の証言(129)や機関誌にみられる代表的な文章(130)ならびにとりわけフレーザーレポート(131)の認識するところでは、文鮮明は世界規模の神権政治つまり、教会と国家との分離を廃止した新しい世界秩序—を作り出そうと計画しているという。フレーザーレポートには様々な機関誌や文鮮明の演説—そこで彼は世界征服を指揮する彼の野望を具体的に述べている—が引用されている。

「私に関係なく、私の言葉がそのまま法となる時がやってくるだろう。私がそれを望めば行われるのだ。私が欲しなければ行われまいだろう。私がある国のために特定の大使を推薦し、私がこの国を訪問し、また公職に就いているその大使を訪ねた

ならば、彼は赤い絨毯で私を歓迎するだろう。(132)」

「・・・中世において教会と国家は分離されていなければならなかった。なぜならば、民衆は当時墮落しきっていたからである。私たちの時代ではしかし、世界を統治するためには自動的な神権政治を持たねばならない。つまり、私たちは政治と宗教を分離できないのである・・・。宗教と政治の分離はサタンがもっとも好むものである。」(133)

文鮮明は彼の統治願望をアメリカで行われた公式の演説においても発言している。

「世界は指導者を有していない。ロシア人にしてもアメリカ人にしても然り。彼らは真の指導者を呼び求めている。

お前たちは信じているのか、彼らが呼び求める指導者は、アジアの文鮮明という男だということを。(134)」

1. 経済的諸事業

彼の目的の実現には文鮮明は莫大な資金を必要としている。その財源の一つが彼の信奉者であり、彼らは「寄付」、労働力及び莫大な集金力で文鮮明に寄与している。

それのみならず文鮮明は世界規模で株式の経済事業を運営することによってさらなる収入源を自ら開拓している。

1959年にはすでに文鮮明は銃製造工場を手始めに「エホバショットガン」を設立し、それは後に韓国政府への代表的な武器納入業者の一つにまで成長している。(135)

今日ではこの会社は「トンイル（統一）カンパニー」と称し、それは国際的な工場機械コンツェルンとしてドイツ国内においても様々な会社と取引をしている。(136)

文鮮明のアメリカ移住後の1973年、初めて設立した会社は「トンイルエンタープライズ」(ニューヨーク)であった。この会社の目的は当初は、大理石の花瓶と朝鮮人参製品の輸出入であった。そのうちに韓国にある母体会社と並んで世界各地に支店を持つようになり、アメリカ、日本、イギリス及びドイツの会社と提携を結んでいる。文鮮明は朝鮮人参貿易の80パーセントまでを当時占めたこともあったようだ。(137)

今日、チタン、ケイ素等化学会社、海運業、アラスカのマグロ漁船団、アメリカでの魚加工場、美容コンサルタント、空手道場、ピザ店、花屋、旅行代理店及び韓国語学校等が統一運動の所有となっている。また、とりわけ重要視されているのが韓国語である。文鮮明帝国では唯一韓国語が話されるようになるといわれているからである。(138)

文鮮明はアメリカへの移住当初からもくろんでいるのが同地での大銀行（Diplomat National Bank）を支配下に治めることであった。もしそれが成功すれば、それによりあ

あらゆる経済領域へ影響を与えることが可能になるからであった。文鮮明と彼の配下が偽の申告により、64パーセントにもものぼる株を獲得してから、アメリカ政府はこの計画をとん挫させることによりやうやく成功したといういきさつもあったのである。(139)

ウルグアイにおいては文鮮明は成功を手中に納めるにいたった。90年代に大銀行の一つを所有する事に成功している。(140)

統一運動のあらゆる企業体に共通している点は、株式が特定の人物枠よってのみ分担されていることである。その人物とは、文鮮明、彼の妻、彼の子供たちと、「36家庭」の構成員である。(141) それにより収益と権力は非常に限定された人物枠に集中することになる。

文鮮明の帝国における財力は過小評価されてはならない。もちろん、この経済帝国というものは韓国の10大財閥に属してはいないが(142)、専門家は文鮮明個人の投資だけでも50億ドルにも上ると見ているためである。(143)

文鮮明の財力が実際のところどれだけあるかは、誰も知ることはできない。統一運動の経済組織体への浸透はもはや見分けがつかなくなっているのである。1978年にはすでにフレーザーレポートは次のように断定している。

「それらの機能及び基盤となっている組織構造の多様性を見た場合、それは、製造、国際貿易、武器の注文、金融並びにその他の企業と連携したマルチインターナショナルな企業と酷似している。その活動はしかしながら、それが宗教的、教育的、文化的、イデオロギー的また政治的な企業を含んでいるという点において、それらを凌駕しているのである。(144)」

文鮮明はまた、世論に影響を与えるためのメディアも利用している。そのため、「ワシントン・タイムズ」を70年代初頭に獲得しているのである。(145) 彼は影響力を維持するために年間3,500万ドルもの補助金をこの新聞に当てているといわれている。(146)

ドイツにおいてもフランクフルトにあるカンドー出版社は統一運動の宣伝のための販売を引き受けているのである。(147)

そのほかにも文鮮明は南アメリカのもっとも近代的な印刷会社の一つをウルグアイのモンテビデオに所有しており、そこで印刷された日刊紙を南北アメリカの19の国家で出版される計画もある。(148)

また、南アメリカでラジオやテレビ局の買収も企てているようだ。(149)

そうして世論を操作するために、宗教的な教えを用いることも彼は隠していない。つまり、彼は思い通りにマクロ経済の発展を操作したいと望んでいるのである。

「こうしたシステムは、最終的には日本やドイツの人々は自国の製品をもはや個人的に購入するのではなしに、中央の指令で購入するようになるという形を取るのである。どういった思考形式で、またどのような経済システムでそうした指令が与えられるのであろうか。宗教こそが唯一それをなし得るシステムなのである。(150)」

かつてのアメリカ合衆国が文鮮明にとって好都合な投資地であった一方で、今や彼はその活動の重点を南アメリカへ移そうとしているように見える。中でもアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、そしてブラジルに文鮮明の投資は集中する傾向にある。アルゼンチンでは、5億ドル規模のプロジェクトが同国の北西地区の開発を予定しており、そこには160もの貧しい国々から、農民や漁民を移住させることが考えられている。(151)

統一運動は、アフリカ、旧ソビエト連邦、中国そして北朝鮮においても経済的にその足場を固めようとしている。中国では文鮮明の影響を受けて、自動車工場と原子力発電所が建設されようとしている。北朝鮮の文鮮明の故郷周辺では3億5千万ドルの巨費を投じてレクリエーション地域が建設される予定もあるようだ。(152)

さらに、文鮮明の一つのユートピア的未来プロジェクトに国際平和ハイウェイ構想というものがあり、それは世界のあらゆる国々を結ぶのだそうだ。その出発地点は日本の東京で、日本は190キロメートルの海底トンネルによって韓国と結ばれるということだ。この文鮮明のアイデア実現のために100人の技術者が既に働いているといわれている。(153)

2. 文化的な策謀

文鮮明の最初の文化的なプロジェクトは、1964年の「韓国文化自由財団」の創設である。ここには西側諸国の要人や、すべての元首たちの前でも披露した経験のある「リトル・エンジェルズ」舞踏団も属している。フレーザーレポートは、軍隊にいる会員が、例えば韓国の秘密情報機関活動や密輸組織へ統一運動の外貨が投入されていることを確認している。こうした文化財団の下部組織として芸術家同盟、舞踏グループ、ジャズバンド、オーケストラ、コーラス隊などが含まれている。(154)

教育面でも同様に、浸透を目的にした国際組織が設立されている。そうした中でも我々にもっとも有名な組織の一つは「世界平和教授アカデミー」である。この会員として、毎年色々なシンポジウムで出会うような、あらゆる学術及び研究分野の著名な教授や専門家が属している。参加者の費用は同組織が受け持っている。(155)

この統一運動は、ブラジル、韓国そしてアメリカ合衆国にあるいくつかの大学を援助しており、とりわけ南アメリカ諸国の専門大学が前線における新たな信者を勧誘するための温床となっている。(156)

いくつかの幼稚園の建設は、子供についての統一運動的イデオロギーを家庭へ浸透させているようである。ドイツ・ギーセンでは幼稚園「こびと」に対して、いづれにせよ、市の援助は認可されていない。

同様にオーストリアでは、「フォーラム・オスト（東）」という教職者の向上研修の開催によって、その教職者研修を通じて、教育や子供へ影響を与えようという試みがなされている。(157)

3. 軍事的野望

また、文鮮明は軍事分野にも接触し干渉する野望を持っている。つまり彼は彼の世界中の信者を大韓民国の名において配置すること考えているのである。仮に北朝鮮が韓国国民へ戦争を挑発した場合、統一運動の会員たちの考えでは、彼らの宗教的祖国を死守し、統一十字軍を組織して韓国とそして全世界の平和防衛を目的として、その戦争へ参加するというのは神の意志であるということなのだ。(158)

フレーザーレポートには1978年、統一運動に対して最終的に明らかになったこととして、「下部に位置する一般会員の教育と地域への配置を見ると、それは疑似軍事組織のようであり、他の観点から見た場合、規律に厳しい党派の特徴も持っている。(159)

4. 政治的企て

文鮮明の政治的な見解は既に「原理講論」において述べられているが、彼は共産主義者を拒絶する一方、また民主主義者にも反しているのである。彼の説明によれば、国民の意思というものは自ずとキリスト教（統一教会のことを指している）へと傾倒していくという。彼らが望む歴史が近づくと、国民の意志を代表する民主主義政権は、この「キリスト教的」政治体系に屈服しなければならないのである。(160)

かりに一国に十分な数の文鮮明の信奉者が居住した場合、民主主義政府への圧力は強められる可能性があり、そうなれば、最終的に統一運動のイデオロギーに屈しなければならないことになる。

「我々は真の父母と統一運動を真摯に受け入れる信者を一国に少なくとも1万人は必要としている。」(161)

民主主義は文鮮明にとって政治的に目指すものではなく、目的のための道具にすぎないのである。それはアベル側の代表者として共産主義を倒すという一点においてのみ有効であり、結局のところ文鮮明は一貫して民主主義を拒絶しているのである。(162)

文鮮明は彼の統一運動と共に世界規模の疑似国家的構造を実現することを目指している。彼は所有する地所（これは例えば投資や固定資産が「聖なる土地」となるのであるが）に対して、「旗」（白と赤の統一運動のシンボル）—それは文鮮明が登壇する際、背後に掲揚されるものであるが—の掲揚と、「歌」（「聖なる歌」の中から8つが選び出さ

れる)の唱和を命じている。「真のキリスト教徒」の国民が国家民族となるのである。

「聖なる土地」とは宗教的な祈りの施設だけではなく、この統一運動のために購入されるべき土地も重要となっている。つまり隣接する土地の正確な位置や書類はすべて統一運動のそれぞれの国の本部へ提出されなければならない。(163) 候補地は地方自治体の領域の中で影響力を及ぼしそうなところが選ばれているようである。

文鮮明の政治介入を有利に働かせているのが、1960年代初頭の狂信的な反共産主義者たちである。彼らは文鮮明のために朴大統領政権下の韓国政府の下で経済的な利益を与えたのである。また、彼の最も初期の信奉者の一人であった韓国機密情報組織の創設者となった人物との友好関係が、彼により一層有利に作用した。フレーザーレポートは韓国の機密情報組織が統一運動の地下組織を計画して、彼のために動こうとしたという可能性を否定していない。この統一運動は、朴政権から送り込まれた韓国政府幹部のための反共産主義教育のキャンプをも支援していたのである。(164)

文鮮明は、自分は神に望まれた韓国の指導者なのだから、韓国大統領に指名されて当然である。いかなる大統領も、彼らの政治的使命を果たすことはできない、なぜならば、彼らは私と共に共同で事にあたるという気がないからである、ということを今日主張しているのである。(164)

統一運動の政治面での影響力の現れの一つが先に述べた「Confederation of Associations for the Unity of the Societies in the Americans」であり、ドイツではボンにその拠点がある。同組織は世界規模で指導者のためのセミナーを開催しており、また、「神主義」と「頭翼思想」という哲学を喧伝している。これは「原理講論」の神話部分をなくした軍事体系の統一教義そのものである。その下部組織が「学生CARP統一」と「国際安全保障協議会」である。ISCの年間を通じた会合で、軍部や経済における著名な代表者が集まり、政治的な世界情勢の評価をまとめている。(166)

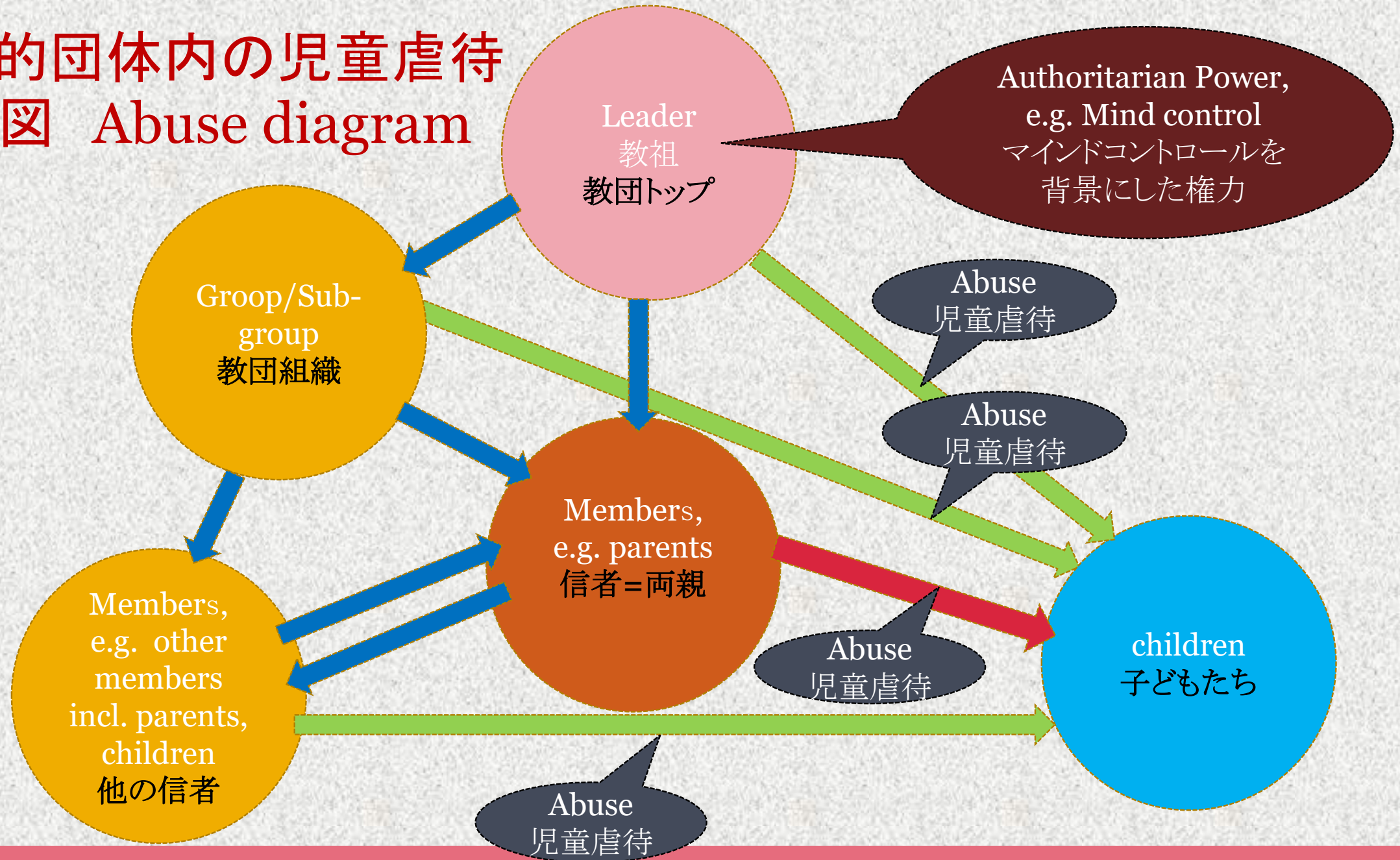
CAUSAの幹部が模索しているのが、ドイツ国内や他の地域において、独立した党を設立するということだが、これは未だ成功には至っていない。(167)

文鮮明とその幹部達が今日まで意識的に試みていることは、彼らの目的のために公人を利用するということである。文鮮明の組織を通じて、経済及び文化面では様々な諸行事の機会を利用して、大統領、代議士、その他の有名人、著名人とのインタビューや写真撮影をする機会が生じており(168)、前アメリカ大統領ブッシュ夫妻は、例えばこうした行事には常時演説者となり、文鮮明とともに日本へ講演のために訪れているのである。(169)

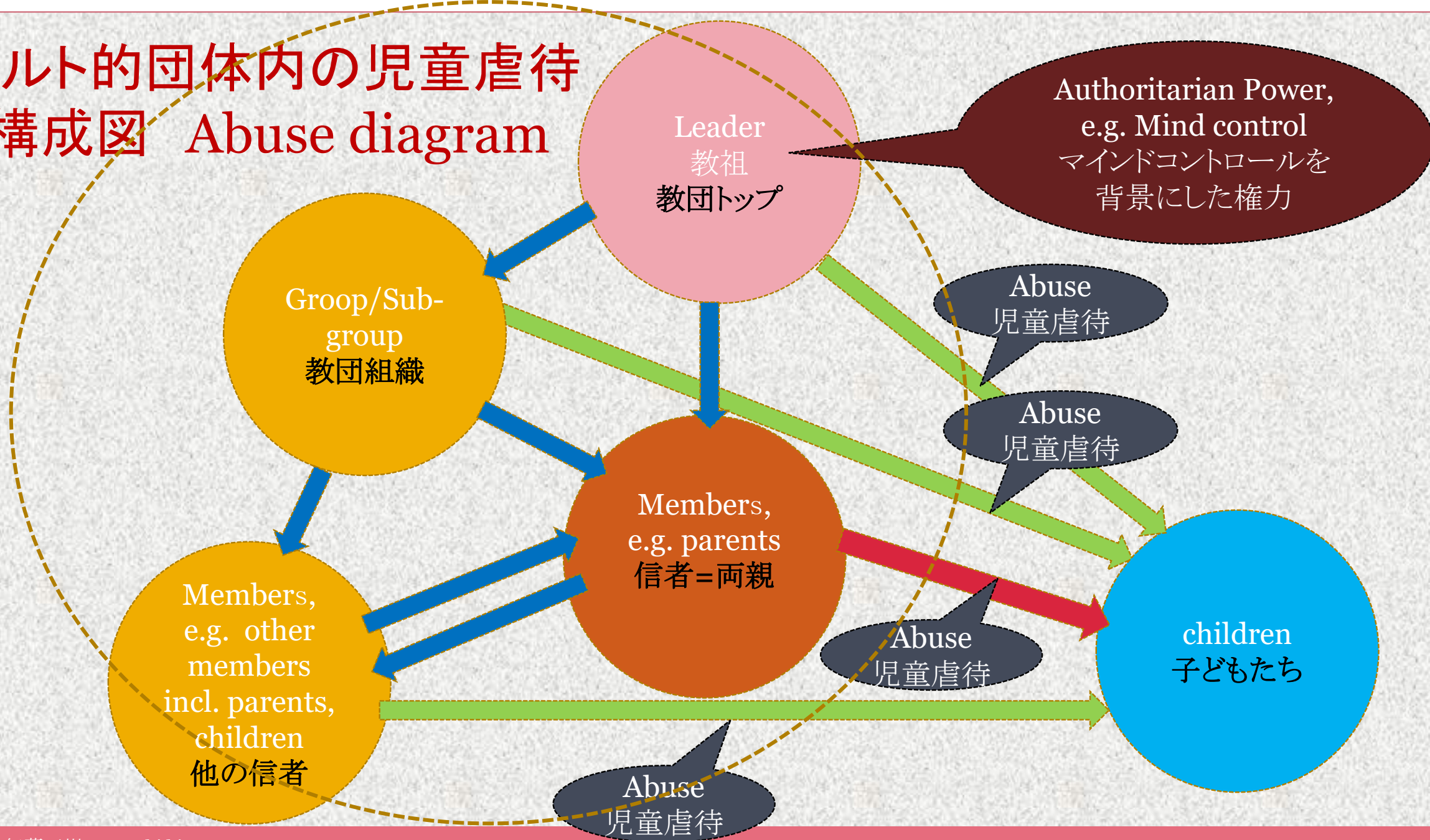
獲得した公人を文鮮明は韓国政府に対しても、西側諸国における彼の重要性を示威する

ために利用しているのである。そうすることにより、元首たちが文鮮明のイデオロギーを支持し、予定されている社会の変革並びに統一運動の目的達成が間近であるかのように文鮮明は信者に信じさせている訳である。(170)

カルト的団体内の児童虐待 構成図 Abuse diagram



カルト的団体内の児童虐待 構成図 Abuse diagram



令和4年 9月 28日

内閣官房 こども家庭庁設立準備室
厚生労働省 子ども家庭局
文部科学省 初等中等教育局 宛

陳情者：
連絡先：

宗教2世が抱える虐待被害救済に関する陳情

標記の件につき、早急な処置をしていただきたく、下記の通り陳情いたします。

1 陳情書提出の背景と理由

日本における一部の宗教信者の子ども(宗教2世)は「子どもが信仰を望まない場合でも宗教活動や信仰生活を強制させられる」問題を抱えている。家庭内という閉鎖的な環境下で、拒否権のない信者の子どもの基本的人権(信教の自由・幸福追求権等)が侵害されている。

宗教2世の多くが経験する宗教活動の強制や人生選択の強制、幼少期からの恐怖による教義の刷り込み等については心理的虐待にあたる可能性が高く、身体的虐待やネグレクトの被害報告も多数あがっている。たとえ当該虐待が信仰に起因するものであっても、児童虐待防止法上の虐待の定義に該当する行為があれば、通常の児童虐待と同様の措置をとるのが行政の義務である。

一方、実態として、公的機関に被害の相談をしたが「宗教の問題には対応できない」と門前払いされた宗教2世や、被害を自発的に訴える事が出来ずに、結果として孤立してしまった宗教2世は多い。児童相談所や学校等、地方自治体へ上記解釈を改めて通達する等、児童が適切な支援に繋がるまでの障壁を解消する必要がある。特に、被害児童の一次発見に加え、虐待被害を子ども自身が自覚し、自発的に訴えるための「虐待に関する教育」の実施機関となる学校等の果たす役割は、非常に重要であると思慮する。

また、一見保護者との対話が可能な場合であっても、保護者の信仰が厚い場合、中途半端な介入は事態を悪化させ、子どもへの更なる虐待、宗教団体施設での苛烈な「再教育」等を招く恐れがあることに留意し、安易に虐待の認定や一時保護が必要ないとの判断や、一時保護を早期に解除する等の判断を行わないよう十分注意する必要がある。これら宗教2世特有の注意点等について、当事者からヒアリングする等して整理した手引き等の作成を求める。

上記の問題は、宗教組織が「信者が組織から抜け出せない」「親が子どもに信仰を強制する事を誘発する」様な教義を掲げ、組織的に虐待の指導を行っている事が根本原因である。本問題の抜本的解決のために、組織的な虐待指導に対する規制も強く求める。

2 陳情内容

<短期のご要望>

- 行政機関・学校・様々な相談窓口等における下記事項の周知徹底
 - 児童虐待防止法上の児童虐待の条件に該当する被害を認知した場合は、その被害が信仰に起因するものであったとしても、一般の虐待と同様に被害児童を救済(児童相談所や市町村への通報を含む)すること
 - 宗教活動の強制や人生選択の強制、幼少期からの継続的な恐怖の刷り込み等は、心理的虐待として扱うこと
 - 虐待として扱えない様な権利侵害の場合でも、被害児童の保護者に対し、児童の意思・権利の尊重を促す等の対応を行うこと
 - 宗教2世特有の注意点を考慮した対応を行うこと
- 全国の初等中等教育機関での被害実態調査の実施
- 被害児童救済のための定期的なアンケートの実施
- 信教の自由を含めた児童の権利に関する実践的教育の実施
- 児童自らが悩みを相談しやすい環境および相談機関の整備
- 宗教の布教等を目的とした児童への強制労働が組織的に行われている実態の調査と厳正な対処

<長期のご要望>

- 児童虐待防止法等における宗教虐待の定義追加
- 他者に対して虐待を行うよう指導する行為の刑事罰化(組織的な虐待指導の規制)
- こども家庭庁施策において、信仰を起因とした虐待被害に対する配慮をすること
- こどもコミッショナーの設立

3 添付資料

- 署名簿
- ご要望内容の詳細
- 具体的な被害事例と現行法の解釈

以上

前回対談にて確認ができた重要なポイント

- ①保護者の動機が信仰に基づくものであっても、児童虐待防止法上の児童虐待にあたる行為があれば、児童相談所は他の児童虐待同様の措置をとる。
 - ②信仰の強制等(宗教活動の強制や生活上の規制の強制、人生選択の強制等を含む)についても、例として特定の部活動や進路選択を強制する保護者同様、当該行為が継続的であり児童が当該行為を拒否する意思を有する等、一定の条件を満たすものであれば、心理的虐待にあたる可能性がある。
- ①及び②の解釈は宗教2世問題に行政が介入し対処していく上で重要なものではあるが、実態として行政に相談したが門前払いされた宗教2世は多く、児童相談所や市町村へ上記解釈を改めて通達する等、適切な支援に繋がるまでのボトルネックを解消する必要がある(詳細は下記参照)。

適切な支援に繋がるまでのボトルネックの解消の要望

- ①児童が被害の認識を持てるようにするための環境整備と疑いを含めた被害児童の発見(多くは学校等を想定)
 - ・教職員等や、行政の悩み相談窓口等に、信仰に基づく児童虐待や、信仰の強制等に関する相談があった場合、宗教だからと門前払いをすることなく、実態を聞き取り、被害児童を発見する。
 - ・教職員等が、児童の外形的な特徴や、一部授業や活動を信仰を事由に拒否する、児童同士で信仰について噂されている等の客観的事実から、被害児童を発見する。
 - ・いじめアンケート等と同様、保護者に信仰を強制等されている児童を洗い出せる定期的なアンケート等から被害児童を発見するとともに、児童が被害認識を持つ環境を整備する。
 - ・信教の自由(保護者により強制される宗教活動を拒否する自由等)を含めた児童の権利に関する個別具体的事例を踏まえた実践的な教育を行うことで、児童が被害認識を持つ環境を整備する。
 - ・子ども総合相談窓口等、行政が設置する悩み相談窓口等について教育し、施設等がある場合は、実際に施設を訪問し機能を教育する等、児童自らが悩みを相談しやすい環境を整備する。
→信仰に基づく児童虐待や、信仰の強制等について受け付ける相談窓口(専用でなく上記の悩み相談窓口等でも可)についての教育・ポスター等の掲示による環境整備
- ②発見された被害児童を適切な支援へ連携
 - ・①に示した方法等により疑いを含め被害児童を発見した場合、児童の申し出がなくとも、児童相談所や市町村へ通報する。

→上記①～②に関する事項について、教職員等や、行政の悩み相談窓口等の相談員等への周知徹底

 - ・教職員等へは、「学校・教育委員会等向け虐待対応の手引き」を改訂し適切な対応方法として明記する。
 - ・行政の悩み相談窓口等の相談員等へは、当該の窓口等が国や地方に多数設置されているため、一つの省庁のみで周知徹底を図ることは困難であり、効果的な方法を検討し実施する。
- ③児童相談所や市町村での宗教2世に適した対応
 - ・信仰に基づくものであっても、児童虐待防止法上の児童虐待にあたる行為を児童虐待として扱い、信仰の強制等は(継続的であるか等を踏まえたうえで)心理的虐待として扱う。
→児童虐待の程度が著しい場合や、被害児童が帰宅を拒否する場合等については、一時保護する。
 - ・心理的虐待の認定や一時保護に至らないと判断した場合であっても、保護者に対し児童の意思・権利を児童相談所や市町村の職員等が伝え、児童の権利の尊重を促す等の対応を行う。
 - ・一見保護者との対話が可能な場合であっても、保護者の信仰があつい場合、中途半端な介入は事態を悪化させ、児童への更なる虐待、宗教団体施設での苛烈な「再教育」等を招く恐れがあることに留意し、安易に虐待の認定や一時保護が必要ないとの判断や、一時保護を早期に解除する等の判断を行わないよう十分注意する。
→当事者からヒアリングする等して、上記「再教育」等を含め、宗教2世特有の注意点等を整理した手引き等を作成し、児童相談所や市町村へ周知徹底する。

その他の要望事項

- ①エホバの証人における布教活動の強制は単なる心理的虐待ではなく、休日は必ず何時間も個人宅を訪問し教義を布教する等、社会通念上の「お手伝い」の範疇を超えた児童労働・児童への強制労働が組織的に行われている実態を早急に調査し、厳正に対処する。(参考:[児童への布教活動\(伝道\)の強制を謳うエホバの証人の公式サイト](#))
- ②宗教2世問題が最も深刻に顕在化するのは就職進学選択の年齢である18歳～22歳であり、高校卒業後は定職にも就かず、空いた時間を布教活動に充てるよう求め、引っ越しの妨害や緊急連絡先への記名の拒否、就職進学の勝手な取り消し、自宅や職場への付きまとい等、児童の自立を徹底的に妨害する悪質な保護者や宗教団体構成員が実在する実態を深刻に受け止め、未成年ではないことを以って、児童相談所等が門前払いする等の現状を早急に改善し、必要であれば他省庁の人権擁護機関、自立相談支援機関と連携する等して対処する。

■具体的な被害事例と現行法の解釈

①児童虐待防止法

(a)身体的虐待

- ・体罰
- ・儀式と称した自傷行為の強制、傷害

(b)心理的虐待

- ・自由意思の形成を阻害する幼少期からの脅迫、マインドコントロール
 - ・「〇〇すると死ぬ、地獄に行く」等の恐怖心を利用した教義の刷り込み
 - ・一般社会から長期間隔離したうえで、集団での信仰生活を強制
 - ・離教した人を集団で著しく敵視/無視する事による脱会の阻止
- ・宗教活動の強制
 - ・礼拝や布教活動等の強制
 - ・信仰に基づいた生活上の規則の強制
 - ・信仰に背こうとした、背いた児童への脅迫や暴言、無視、差別等
- ・人生選択の強制
 - ・異性関係、交友関係の著しい制限や妨害
 - ・就学/就業の制限や妨害
 - ・一人暮らしの制限や妨害
- ・自白の強制
 - ・過去の異性交遊、性交渉、自慰経歴等の自白を強制

(c)ネグレクト

- ・宗教活動への長期間の参加を目的とした療育の放棄
- ・身体的ネグレクト(数日間の断食の強制)
- ・医療ネグレクト(輸血拒否の強制、適切な治療を受けさせない行為)
- ・教育ネグレクト(伝統行事への参加、国歌や校歌の斉唱、武道等への参加禁止等)
- ・経済ネグレクト(高額寄付等による経済的困窮)

②労働基準法・児童福祉法

- ・実態として児童労働にあたる布教活動等の強制(幼児期から参加を強制)